高松市文化財調査報告書

横立山東麓１号墳

史跡高松城

1991.3

高松市教育委員会

はじめに

本書は、高松市教育委員会が、平成元年度から2年度にかけて実施した横立山東麓1号墳および史跡高松城跡の埋蔵文化財発掘調査事業報告書であります。

このうち横立山東麓1号墳は、古墳時代後期の積石の古墳として確認されたもので、高松市には全国屈指の積石塚古墳群である石清尾山塊古墳群が存在しますが、それとは、全く時代の違う積石の古墳が確認されたことは、歴史がいかに不思議で、懐の深い驚異的のものであるかを感じさせてくれました。

また、史跡高松城跡の調査では、事情もありましたが水中ポンプなどの機械力を使った発掘調査でも、石垣本体の基礎部分を明らかにすることはできませんでした。荒波打ち寄せる中での築城工事は、想像を絶する難工事であったことでしょう。今回の調査では、それを間接的ながら明らかにしてくれました。

今回報告する2件の発掘調査は、いずれも海との関連を持った遺跡であり、私ども高松市が早くから海と関わって生きてきたかを証明する遺跡です。そこに今後の町づくりの教訓を学びとれれば、と考える次第であります。

最後になりましたが、調査に御関与いただいた、関係機関および関係者の方々に厚くお礼申しあげるとともに、今後の御指導と御協力をお願いする次第です。

平成3年3月

高松市教育委員会

教育長　三　木　義　夫

例　　言

1. 本書は高松市教育委員会が平成元年８月に実施した発掘調査の報告書である。
2. 調査対象の横立山東麓１号墳は、高松市中山町に所在する。
3. 調査および保存にあたっては、土地所有者谷孝明氏の、御理解と御協力をいただいた。ここに謝意を表するものである。
4. 地元の文化財等調査協力員福家末義氏には、古墳発見の連絡、現地案内に御協力をいただいた。
5. 地元自治会および住民諸氏の御尽力と御助力をいただいた。
6. 香川大学助教授丹羽佑一氏、香川県教育委員会文化行政課の調査指導をいただいた。
7. 調査関係者は、下記のとおりである。（平成元年度）

教育長	三木義夫	文化振興課長	三木丸夫
教育部長	多田　孜	文化振興課長補佐	亀井　俊
教育部次長	増田晶三	文化振興課文化財係長	藤井雄三
		文化振興課事務員	川畑　聰
		文化振興課非常勤嘱託	中西克也

8. 調査全期間において、市内在住の末光甲正、中本弘志両氏の参加を得た。
9. 現地調査は、藤井総括のもと、川畑、末光、中西があたった。
10. 整理作業は、藤井総括のもと、川畑、末光、中西があたった。
11. 本報告書の執筆は川畑が担当し、編集も行った。
12. 遺物写真、実測は川畑による。
13. 挿図の一部に、建設省国土地理院発行の 25,000 分の１の地形図を使用した。
14. 以下の方々の御教示を得た。

岩橋孝、大久保徹也、大山真充、渡部明夫、和田素子（敬称略、五十音順）

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過……1
第２章　立地と歴史的環境……2
第３章　調査の内容
　第１節　調査の概要……7
　第２節　主体部……7
　第３節　墳　丘……8
　第４節　遺　物……14
第４章　まとめ
　第１節　調査の成果……17
　第２節　横立山東麓１号墳の占める位置……19
　第３節　下笠居中学校保管の周辺遺跡出土遺物……19

挿　図

第１図　横立山経塚古墳墳丘測量図……3
第２図　弾正原古墳横穴式石室実測図……4
第３図　周辺遺跡分布図……5
第４図　積石分布図……6
第５図　箱式石棺平面図……9
第６図　箱式石棺蓋石実測図（復元後）……10
第７図　墳丘平面図……11
第８図　墳丘断面図……12
第９図　出土製塩土器・土師器実測図……14
第10図　出土中近世土器実測図……15
第11図　弾正原古墳出土須恵器実測図……19
第12図　横立山経塚古墳出土円筒埴輪実測図……19
第13図　横立山経塚古墳出土円筒埴輪実測図……20
第14図　勝賀廃寺出土瓦実測図……21
第15図　根来寺・香西寺出土瓦実測図……22

図　　版

図版１－１　調査地遠景
図版１－２　調査地付近風景
図版２－１　積石調査前風景
図版２－２　箱式石棺調査前風景
図版３－１　箱式石棺（南東から）
図版３－２　箱式石棺（南西から）
図版４－１　箱式石棺（北西から）
図版４－２　北西トレンチ（東から）
図版５－１　南々東トレンチ（西から）
図版５－２　南々東トレンチ（北から）
図版６－１　箱式石棺蓋石（復元後、南西から）
図版６－２　積石断面（南西から）
図版７－１　出土製塩土器等（表）
図版７－２　出土製塩土器等（裏）
図版８－１　横立山経塚古墳出土円筒埴輪
図版８－２　横立山経塚古墳出土円筒埴輪
図版９　勝賀廃寺・根来寺・香西寺出土瓦

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

平成元年８月７日、高松市中山町の果樹園において、土地所有者の谷孝明氏が採石作業を行っていたところ箱式石棺を発見したと、地元の文化財等調査協力員福家末義氏を通じて当市教育委員会文化振興課に連絡があった。文化財担当者が現地を訪れたところ、高さ２ｍほどの積石が半壊状態にあり、その中央に箱式石棺が蓋を開けられ露呈していた。

そこで土地所有者と協議をした結果、未周知の埋蔵文化財であるので発見届けを出していただくとともに、石棺を対象にした緊急調査を行うことになった。その後、土地所有者と再度協議を行い、箱式石棺を埋め戻し現状保存することで合意を得た。

第２節　調査の経過

現地調査は平成元年８月９日から21日にかけて実働６日で行った。調査の方法は、石棺及び積石断面の清掃を行うとともに、２本のトレンチを設定して墳丘の範囲確認に努めた。

８月９日　機材搬入。石棺及び周辺清掃、製塩土器出土。

10日　石棺・墳丘実測作業。

11日　石棺・墳丘実測作業。

17日　石棺の蓋石復元。

18日　トレンチ設定、掘削。

21日　埋め戻し。積石断面実測作業。機材撤収。

第２章　立地と歴史的環境

高松市は香川県の東部に位置し、県庁所在地であるとともに四国の中心都市の一つである。北側において瀬戸内海に面しており、本州との海上交通による連絡地点でもある。市域は南側の一部を除いて高松平野にほぼ相当し、東、南、西の三方は二～三百メートル級の山々に囲まれている。

高松平野には春日川、香東川の一級河川が南から北に向かって流れ、瀬戸内海に注いでいる。この平野の特徴としては、北側の中央に標高２３０m級の石清尾山塊が独立丘陵として座していることが挙げられる。

さて横立山東麓１号墳が所在する地域は古くは笠居郷と呼ばれ、高松平野の北西の端に位置する。生島湾を囲む土地で、北面する山麓緩斜面が存在するが面積は狭い。北の生島湾を除いて、東は串の山、南は勝賀山、西は紅峰、黄峰、青峰等の山々に三方を囲まれており、高松平野と地形的には一線を画する。河川としては住吉川が勝賀山西端を源として流れているが、生島湾に注がず串の山の東端を通っている。

横立山東麓１号墳は生島湾を見下ろす山麓緩斜面にあり、五色台山系を形成する一つ、青峰から北に派生する横立山と呼ばれる尾根の東麓に位置する。さらに微地形で見れば、東にのびる舌状丘陵の付け根でも、北側の斜面へと傾きかける地点であり、生島湾を見下ろすことができる。付近は現在果樹園となっている。

次に歴史的にこの地区を展望してみる。まず旧石器・縄文時代の遺跡は不明であるが、西畠遺跡において採集されたサヌカイトを旧石器時代のものと見る意見がある。また縄文時代の遺跡で最も近くにあるのは佐料遺跡で、１点のみだが後期の土器片が採取されている。

弥生時代の遺跡については西畠遺跡、浜津神社南遺跡において土器片の散布が知られている。また『下笠居村史』[(1)]によると９カ所ほどの弥生土器の出土地を列挙しているが、まだ追認していない。ただ勝賀山西斜面から出土した遺物は実測図が提示されており、土器には壺・甕・甑があり、石器には石鏃・石槍・石斧がある。実測図から推測する限り、前期末のものと考えられる。

古墳時代では、幾つかの代表的な古墳が知られている。横立山東麓１号墳西側の尾根には横立山経塚古墳がある。全長37ｍの積石塚の前方後円墳で、後円部に主軸と直交する竪穴式石室をもつ。墳丘は後円部の直径22ｍ、高さ３ｍ、前方部の長さ15ｍ、高さ２ｍの規模を有する。積石塚だが前方部は土盛りで、旧状は短冊型かバチ形状であったと推定されている。竪穴式石室は長さ5.03m、幅0.８～1.０ｍ、高さ0.９～1.１ｍを測る。天井部の蓋石は９枚で、側壁は偏平な石を小口積みにしており、ゆるい持ち送りである。床面には握りこぶし大の礫が敷かれ

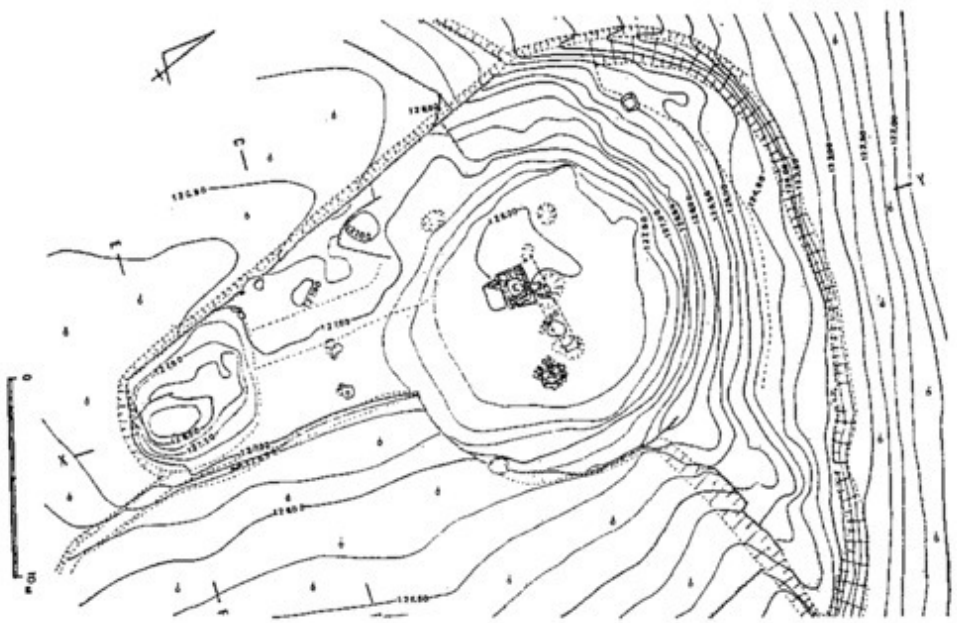
ている。４世紀末～５世紀初頭の築造時期が考えられる。

横立山東麓１号墳の南600mの尾根頂部には原経塚古墳がある。現在墳丘は正方形の積石であるが、かつては直径約十数mの円形で竪穴式石室が存在したという。

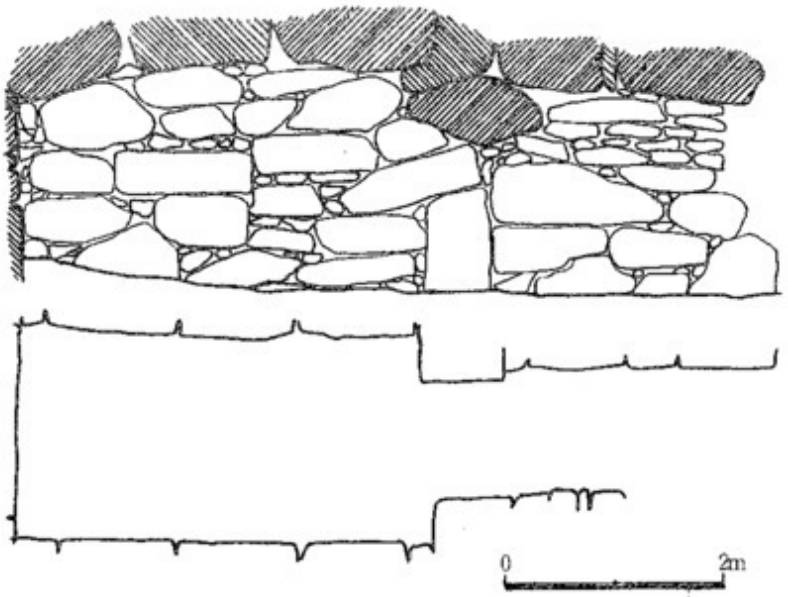
また生島湾から少し離れるが、串の山の東にある住吉神社古墳は箱式石棺がかつてあったらしく、さらに墳丘からは円筒埴輪、家型・人物の形象埴輪の破片が採集されている。円墳と推定されている。

横穴式石室をもつ古墳も２基知られている。弾正原古墳は串の山西側の斜面にあった古墳である。昭和44年に自然崩壊したため現存しないが、『下笠居村史』によれば両袖の横穴式石室で、玄室長さ３m80cm、幅１m90cm、高さ１m80cm、羨道は長さ２m80cm（残存の値か）、幅１m、高さ１m80cm を測る。開口方向は南西方向である。石室から推測する限りでは６世紀後半の築造年代が考えられる。下笠居の奥部、標高141mの竜王山の南急斜面に桑崎古墳がある。南方向の横穴式石室が開口しているが、大部分が土砂に埋まっている。現状では長さ３m50cm、幅１m20cmまでが測れるのみである。奥壁・側壁とも小振りの石を使用している。

以上が下笠居における主要古墳の概要であるが、『下笠居村史』には他に６基の古墳を紹介しているものの大部分は現在は不明である。また当時期の集落址は今のところ確認されていない。

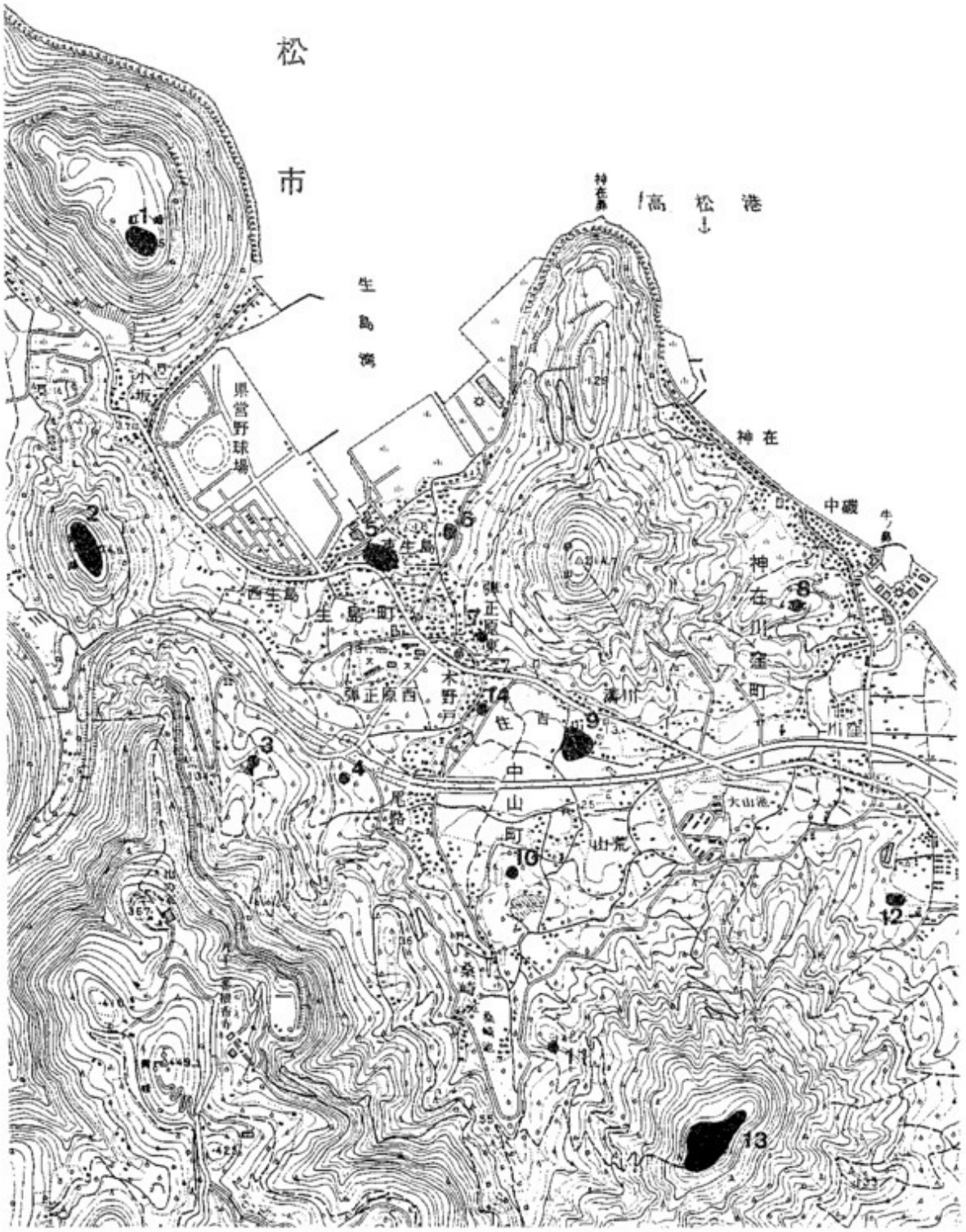


第１図　横立山経塚古墳墳丘測量図
（『新編・香川叢書』考古編）

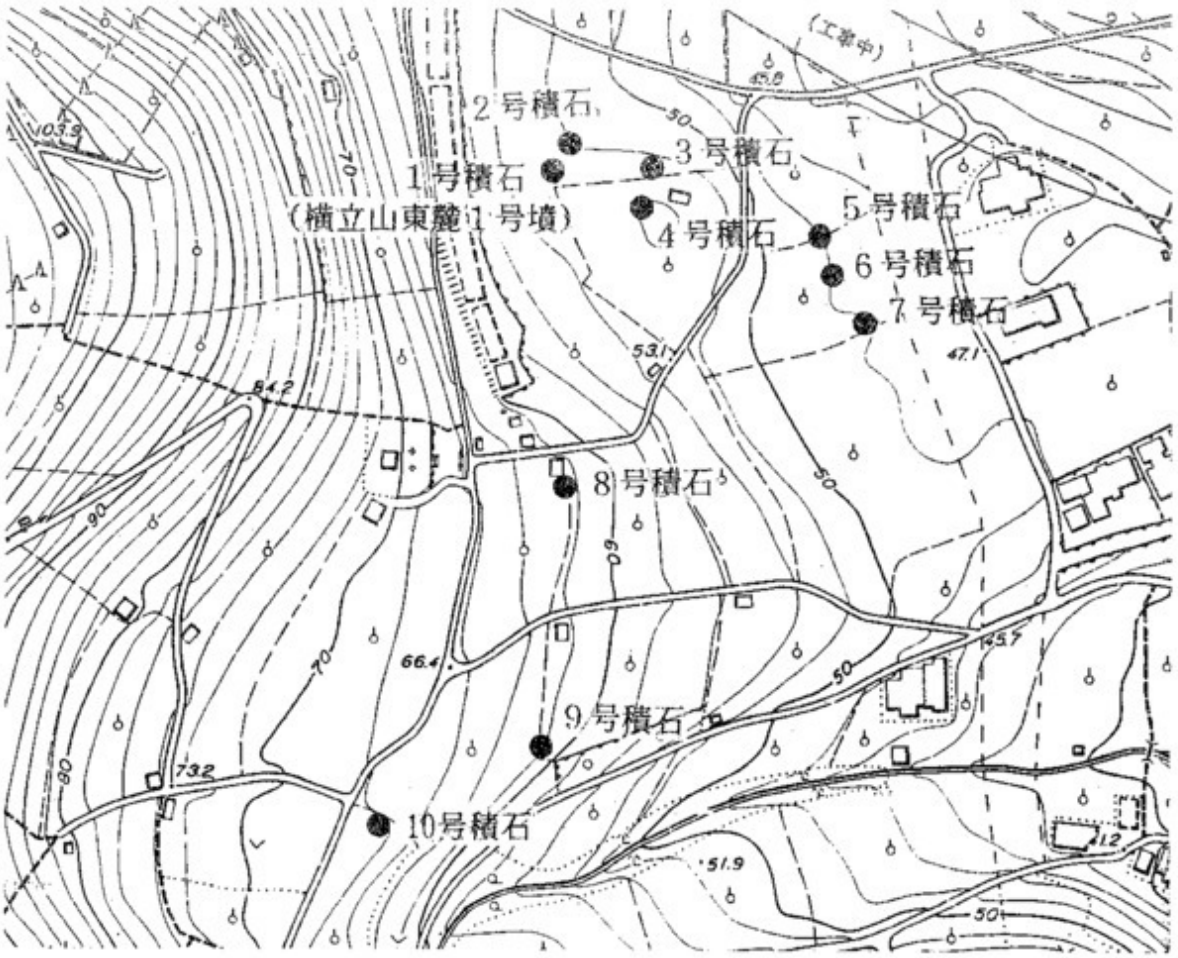


第２図　弾正原古墳横穴式石室実測図
（『下笠居村史』を一部修正）

古代・中世以降については４カ所の城の存在が知られる。勝賀山城は勝賀山の頂上にある戦国期の山城で、香西氏の居城である。昭和55年に当市教育委員会によって発掘調査を行っている(2)。勝賀山城は東の高松平野を正面としており、下笠居の地は城の裏側にあたる。中山城、亀水城、黄峰城についてはまだ発掘調査が行われていないが、堀跡、石塁が残っている。



第3図　周辺遺跡分布図（縮尺 1/25,000）



第4図　積石分布図（縮尺1／2,500）

第3図　周辺遺跡分布地図遺跡名

1. 亀水城跡	2. 黄峰城跡	3. 横立山経塚古墳
4. 横立山東麓1号墳	5. 西扇遺跡	6. 浜津神社南遺跡
7. 弾正原古墳	8. 住吉神社古墳	9. 中山城跡
10. 原経塚古墳	11. 桑崎古墳	12. 勝賀廃寺
13. 勝賀城跡	14. 木野戸古墳	

第３章　調査の内容

第１節　調査の概要

調査開始時の現場の状況は、10ｍ×20ｍの楕円形の積石が半分ほど削られ、積石中央付近に箱式石棺が姿を現していた。石棺はすでに蓋石が採石作業中に開けられていたが、割られた蓋石の一部が原位置を保っていた。側壁の石材も一部が割られていたが、これも採石作業中に破損したものであり、未盗掘であったと考えられる。石棺内には蓋石を動かした際に転落した土砂が堆積していたため除去したところ、床面と考えられる、地山に似た黄褐色土層があらわれた。

遺物は石棺内から製塩土器・土師器高坏破片が出土したが、すべて転落した土砂からの出土である。また石棺周辺でも製塩土器を採集したが、原位置を保っているものではなかった。しかしながら、石棺上に残存していた蓋石の直上から原位置を保っている製塩土器底部が出土したことから、蓋石上及びその周辺にあった遺物が蓋石を開けた際に石棺内に転落したり、周囲に散乱した可能性が考えられる。

さらに現在の積石がそのまま墳丘とは考えられないので、積石断面を精査するとともに、トレンチを石棺から積石断面に沿って北西および南々東の方向に設定した。北西方向のトレンチは長さ２ｍ、幅50㎝で石を除去していったが、調査期間等の事情により途中で断念した。南々東方向のトレンチは長さ７ｍ、幅50㎝～１ｍ10㎝で石を除去していったところ、深さ10㎝ほどでやや不規則ながら並べられている石群を確認した。検出した石群は石棺から２ｍの距離まで続いており、石は５～35㎝の大きさである。積石断面を精査している途中に、積石上部から土釜等の中近世土器が出土した。

土地所有者との協議で採石作業を行わず石棺を現状保存することになったので、これ以上の調査は行わず石棺およびトレンチを埋め戻してすべての作業を終了した。

また発掘と並行して付近の分布調査を行った結果、当古墳と同様な積石を９基確認した。さらに地元での聞き取り調査によれば、こういった積石が20～30基はあったという。しかしながらこれらの積石は、果樹園開墾の際に露出した岩盤等の栽培に適さない箇所に、地山に多く混入する石を積み上げたために生じたものもあり、すべてを古墳とすることはできない。しかし現状では古墳か否かの判断は下しにくいので、積石群を横立山東麓古墳群と呼称し、調査した箱式石棺を１号墳として適宜番号を付した。

第２節　主体部

当古墳の主体部は組合せ箱式石棺で、蓋石２枚、側壁石４枚ずつ、小口石１枚ずつの計12枚

の安山岩の板石によって構成されている。主軸は北西－南東方向で、内法の長さ170㎝、幅25～35㎝を測り、南側の方が幅が広い。

側壁の石材は不整形ながらも四角形に加工されており、蓋石・小口石に比べて薄手である。平らな面を石棺内側に向けている。基本的には各石材の端を合わせて配置しているが、石材どうしが重なっている箇所が両側壁とも１カ所ずつ見られる。側壁・小口とも上面の高さをほぼそろえている。

小口石は側壁に挟まれずに側壁の外側に位置し、平らな面を石棺内側に向けている。石材は南側の方が大きいものを使用している。

蓋石は、厚さ10㎝前後の大型で不整な四角形の石材を使用している。南側の石がもっとも大きく１ｍ10㎝×75㎝を測る。なお蓋石の位置については、北側の石は割られた石材の一部が原位置をとどめていたが、南側の石については推定復元である。

床面については石敷き等の施設は認められなかった。

石棺の側壁・小口石周囲には、20㎝大の安山岩の板石を幾重にも積み重ねているのが確認できた。また蓋石の上には10～60㎝の石を積み重ねているが、目張りの粘土等は確認できなかった。

第３節　　墳　丘

墳丘は現在南北方向に長い10×20ｍの楕円形の積石で、高さは２ｍである。採石作業により生じた積石の断面を分層したところ、４層に分けることができた。

Ⅰ　粗礫層（板石状で長さ５～25㎝、厚さ２～10㎝の礫、粗礫の間に細礫を含む）

Ⅱ　細礫層（丸石状で２～５㎝）

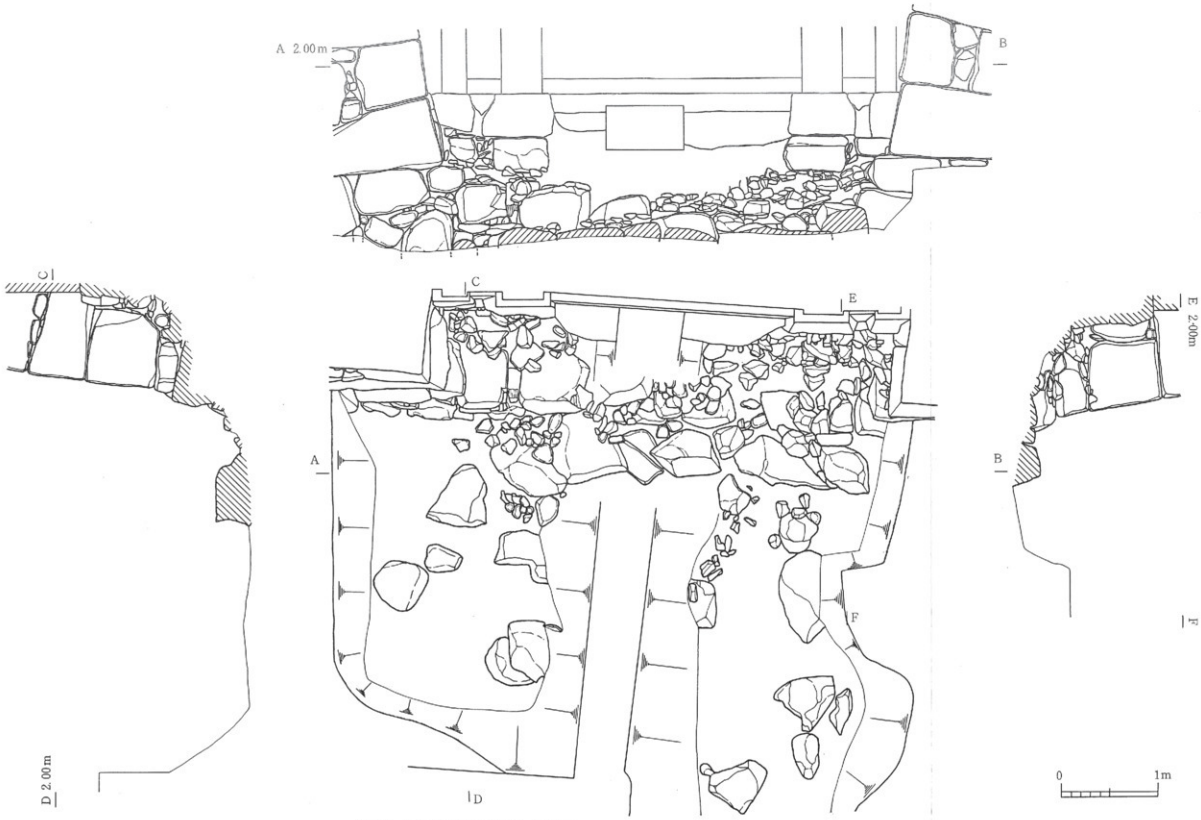
Ⅲ　粗礫層（板石状で長さ５～25㎝、厚さ２～10㎝の礫、Ⅰより細礫が少ない）

Ⅳ　巨礫層（板石状で長さ10～60㎝、厚さ２～15㎝の礫）

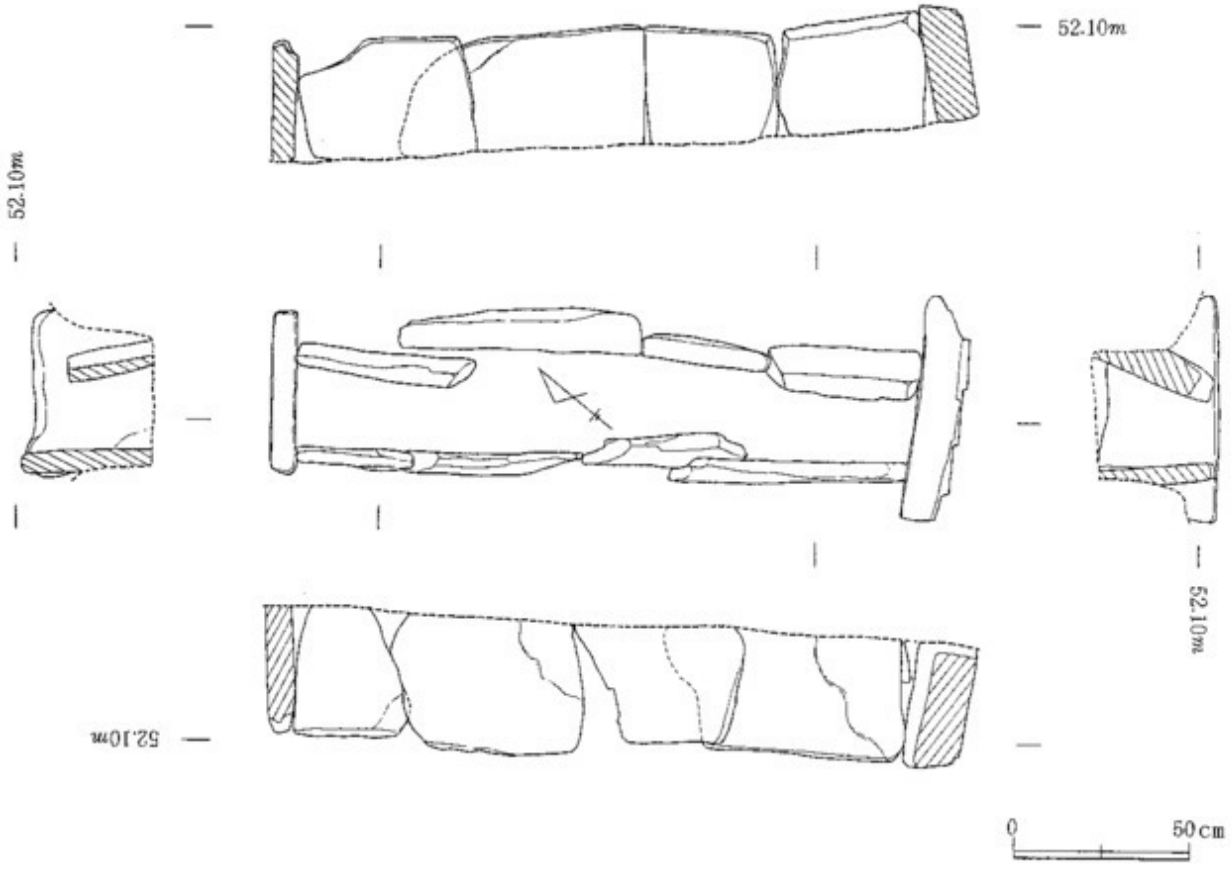
である。これらのうち第Ⅰ・Ⅱ層は中世以降の土器を含むことから、後世の積石であると考えられる。また第Ⅳ層は石棺を覆っている大きな板石の礫層で、付近であまり見られない大きな石を含んでおり、石棺に伴うものと考えられる。第Ⅲ層については、第Ⅲ層が認められる範囲とトレンチで検出した石群の範囲がほぼ一致することから、積極的に肯定できないものの墳丘の一部と考えられる。第Ⅲ層を含めて墳丘の規模を復元した場合、長さ６ｍ、高さは蓋石から１ｍと推定される。

また第Ⅳ層の下、箱式石棺の周囲には20㎝大の安山岩の板石を積み重ねており、第Ⅴ層と呼べるものである。

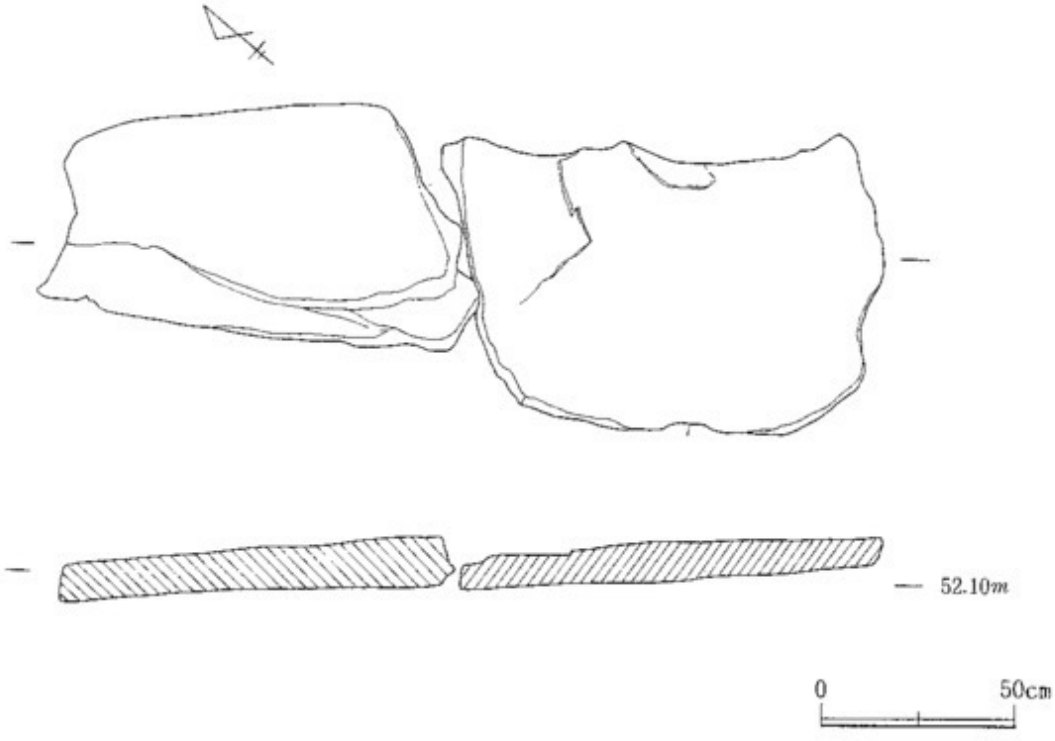
なお墳丘の形については今回の調査では明らかにすることができなかった。



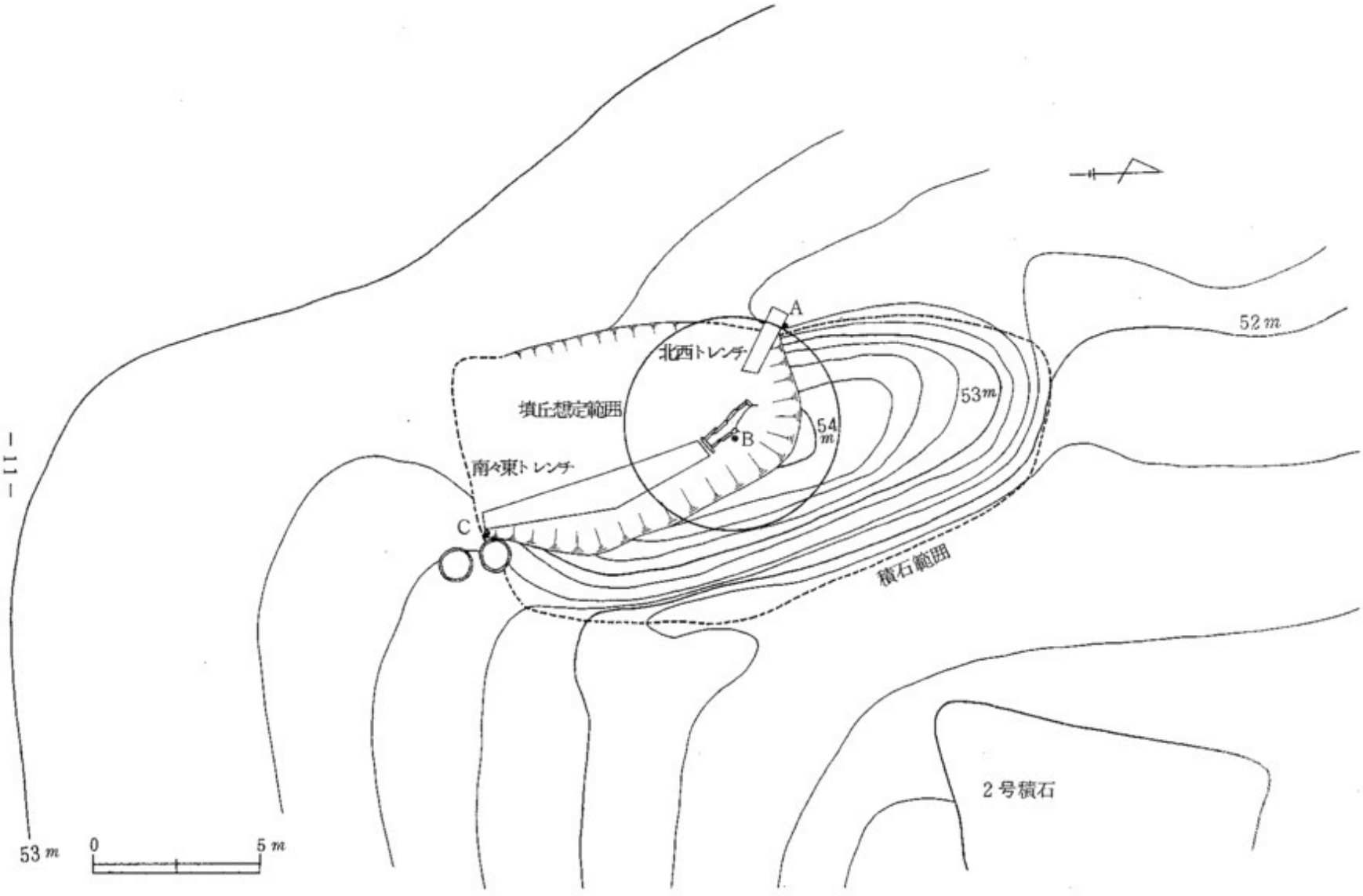
第6図　Ⅱ区水手御門前階段平・立面図



第5図　箱式石棺平面図

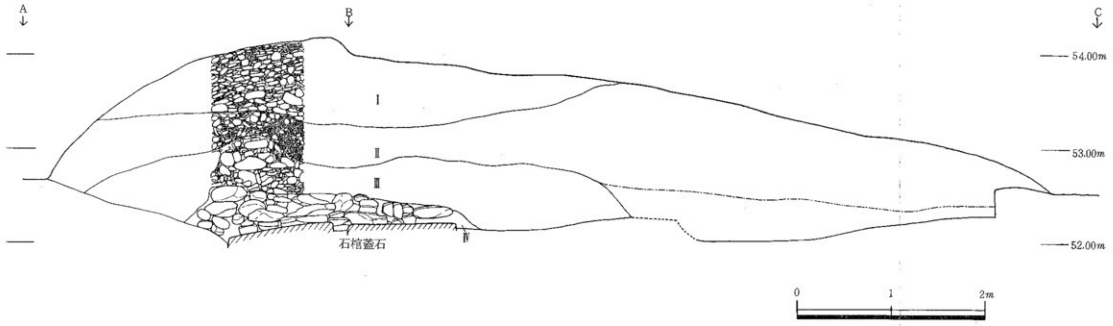


第６図　箱式石棺蓋石実測図（復元後）



第7図　墳丘平面図

Ⅰ　粗礫層（板石状で長さ５～25cm、厚さ２～10cmの礫、粗礫の間に細礫を含む）
Ⅱ　細礫層（丸石状で２～５cm）
Ⅲ　粗礫層（板石状で長さ５～25cm、厚さ２～10cmの礫、Ⅰより細礫が少ない）
Ⅳ　巨礫層（板石状で長さ10～60cm、厚さ２～15cmの礫）



第８図　墳丘断面図

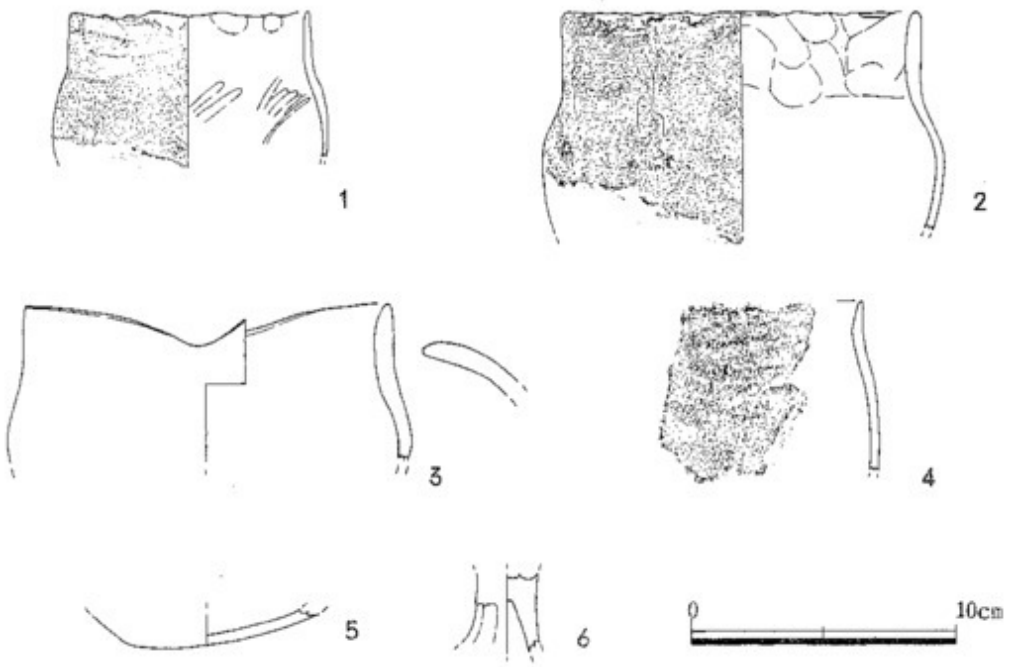
第4節　遺　　物

石棺内流入土および石棺周辺から製塩土器の破片が出土した。蓋石直上の底部をのぞいて原位置を保っていない。出土した製塩土器は口縁部で4個体を数え、すべて口縁部が直立し体部は球状を呈する。肩部に最大径をもつ。口径は9.2～14.1cmと数値にばらつきがあるが、口縁部のゆがみが大きく必ずしも正確な値とは限らない。色調は赤褐色である。破片には表面が薄く剥がれているものがあり、2次焼成を受けた可能性がある。

1・4は口縁部外面に平行の叩きを施している。また1の体部内面には二枚貝の貝殻条痕とおぼしきものが認められる。2・3は叩き痕はなく、ユビナデが見られる。3は口縁部のゆがみが大きく一部内側に湾曲している。5は底部の破片だが、1～4のどの破片と同一個体であるのかは不明である。ユビナデが見られる。

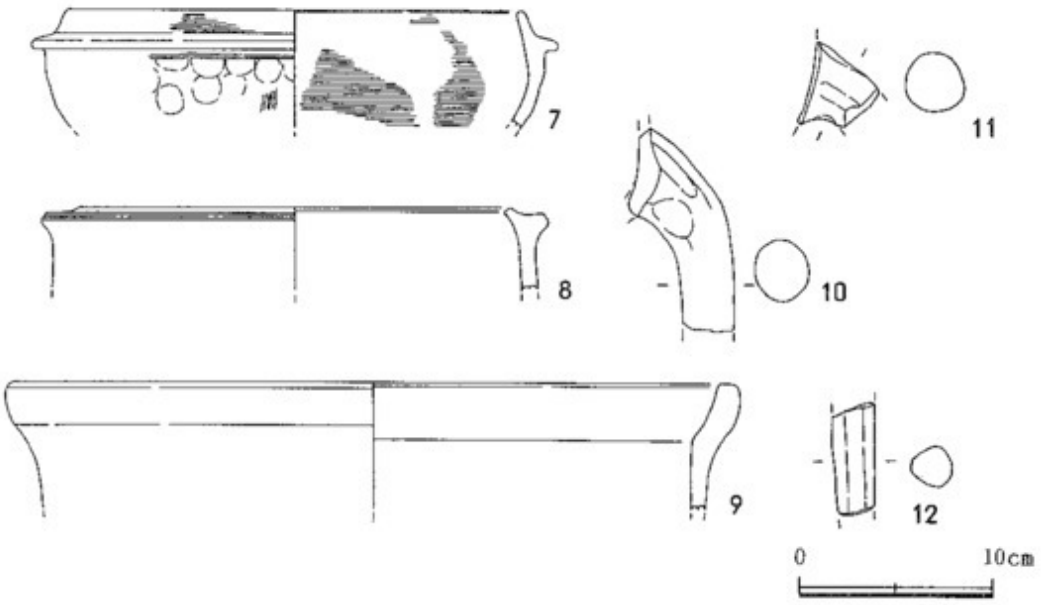
これらの製塩土器は香川県坂出市大浦浜遺跡の分類に従えば、Ⅱ類に属する(3)。6世紀中頃のものと考えられる。

また石棺内流入土の中から土師器高坏の脚部破片が出土した。坏部との接合部分で、外面にナデが施されている。



第9図　出土製塩土器・土師器実測図

一方、古墳時代に属する遺物以外に、積石の第Ⅰ・Ⅱ層から中近世の土師器が出土している。7・8は土釜の口縁部の破片で、7は丸い体部に鍔が付く形態のものだが、8は全体の形態は不明である。7の鍔は横方向の刷毛調整を行った後に付けられている。9は土鍋もしくは甕の口縁部の破片と考えられる。10～12は土釜の脚部の破片で、10・11は体部との接合部分、12は脚部中程の部分である。



第10図　出土中近世土器実測図

製塩土器

番号	部位	出土位置	法量（cm）	特徴	備考
1	口縁部	石棺周辺	口径※ 9.2 胴径※10.6 器高 (5.5)	口縁部は直立し、体部上半に最大径を有する。口縁部がややゆがむ。外面は平行の叩きを施し、ナデ。内面は2枚貝の貝殻条痕とおぼしきものが認められる。胎土は精緻で2㎜以下の砂粒を含み、灰褐色を呈する。器壁は2～3㎜。	焼成良好
2	口縁部	石棺内 流入土	口径※13.6 胴径※15.2 器高 (8.3)	口縁部は直立し、体部上半に最大径を有する。口縁端部がやや肥厚する。外面には無文。内面はナデである。胎土は精緻で3㎜以下の砂粒を含む。赤褐色を呈する。器壁は3～6㎜。	焼成良好
3	口縁部	石棺周辺	口径※14.2 胴径※15.5 器高 (5.9)	口縁部は直立し、体部上半に最大径を有する。口縁部が大きくゆがみ、端部がやや肥厚する。外面は無文。胎土は精緻で4㎜以下の小石を含む。赤褐色を呈する。器壁は4～7㎜。	焼成良好
4	口縁部	石棺周辺	器高 (6.5)	口縁部が短く直立し、体部上半に最大径を有する。外面は平行の叩きを施し、ナデ。内面はナデ。胎土は精緻で1㎜以下の砂粒を含む。明赤褐色を呈する。器壁は3～4㎜。	焼成良好
5	底部	石棺蓋石直上	器高 (1.5)	ゆがんだ丸底。内外面ともナデ。胎土は精緻で1㎜以下の砂粒を含む。明赤褐色を呈する。	焼成良好

土師器（古墳時代）

番号	器種	出土位置	法量（cm）	特徴	備考
6	高坏	石棺内 流入土	直径 2.3 器高 (2.6)	脚部で坏部との接合部分である。外面はナデ。胎土は精緻で1㎜以下の砂粒を含む。浅黄橙色を呈する。	焼成やや不良

土師器（中近世）

番号	器種	出土位置	法量（cm）	特徴	備考
7	土釜	積石第Ⅰ・Ⅱ層	口径※23.4 鍔径※27.3 器高 (6.0)	口縁部の破片。体部が球状を呈するものと考えられる。口縁部が短く鍔は水平に付く。内面全面と、外面は口縁部をヨコハケ。ヨコハケ後、鍔を付けている。外面の下半はユビオサエ後、一部にタテハケ。胎土は精緻で2㎜以下の砂粒を含む。褐色を呈する。	焼成良好
8	土釜	積石第Ⅰ・Ⅱ層	口径※22.2 鍔径※26.2 器高 (4.2)	口縁部の破片。口縁端面と鍔端面にそれぞれ一条の沈線。摩耗により調整は観察しにくいが、内外面ともヨコナデか。胎土は精緻で1㎜以下の砂粒を含む。明褐色を呈する。	焼成良好
9	不明	積石第Ⅰ・Ⅱ層	口径※38.0 器高 (6.5)	土鍋もしくは甕の口縁部の破片。内側に段をもち、器壁は厚い。胎土は精緻で1㎜以下の砂粒を含む。明褐色を呈する。	焼成良好
10	土釜	積石第Ⅰ・Ⅱ層	直径 3.9 器高 (10.4)	脚部の破片で、体部との接合部分である。外面はナデ。胎土はやや粗く6㎜以下の小石を含む。明褐色を呈する。	焼成良好
11	土釜	積石第Ⅰ・Ⅱ層	直径 3.0 器高 (4.3)	脚部の破片で、体部との接合部分である。外面はナデ。胎土はやや粗く4㎜以下の小石を含む。褐色を呈する。	焼成良好
12	土釜	積石第Ⅰ・Ⅱ層	直径 2.3 器高 (5.8)	脚部の破片で、中程の部分である。外面はナデ。胎土は精緻で1㎜以下の砂粒を含む。明褐色を呈する。	焼成良好

※は復元値、( )は残存値

第4章　まとめ

第1節　調査の成果

調査が緊急の短期間のものであり、また土地所有者の理解により現状保存されることになったため、調査は最小限のものしか行っていない。そのため、主体部は前述の箱式石棺以外に存在するのか、また墳丘についても形態等を明確にすることはできなかった。しかしながら今回の調査で、横立山東麓1号墳が箱式石棺の主体部をもち、積石の墳丘をもつ古墳であることを明らかにすることができた。

一方、古墳の時期については、石棺内流入土および石棺周辺から出土した製塩土器から推測するしかない。製塩土器は底部の破片のみが蓋石直上に現位置を保っている状態であったことから、他の口縁部の破片も蓋石直上にあったものが採石作業により散乱したものと考えられる。このことから、製塩土器が石棺に伴うものであり、当古墳の時期を6世紀中頃と推定している。

そして横立山東麓1号墳が製塩土器をもつことから、当古墳の被葬者が製塩集団の一員、あるいは製塩集団と何らかの関わりをもっている者と推測させられる。現在生島湾沿岸においては同時期の製塩土器が出土する遺跡は未確認である。もっとも近距離にあるのが、当古墳から北西4.5㎞の海岸にある小原遺跡であるが、出土している製塩土器は当古墳より新しく、報告者により7世紀前後から鎌倉時代ごろまでの年代が与えられている(4)。将来、生島湾沿岸において6世紀代の製塩遺跡が発見される可能性が考えられる。

第2節　横立山東麓1号墳の占める位置

横立山東麓1号墳のように箱式石棺の主体部をもつ積石墳で6世紀に属するものは、高松平野周辺において未確認である。讃岐の積石塚は4世紀が中心であり、5世紀初めを最後に積石塚は築かれなくなる。横立山東麓1号墳のある下笠居では、横立山経塚古墳が4世紀末～5世紀初めに築造されて以後積石塚の姿はなく、両者の間には大きな断絶がある。こういったことから、古墳時代前期の積石塚と、横立山東麓1号墳の積石とは系譜のつながらない、別のものと考えられる。ただし横立山東麓1号墳が、横立山経塚古墳の位置する横立山を見上げる場所にあり、直線距離にしてわずか400ｍの所にあることを考えると、積石の系譜とは別にして、両者の間に何らかの関係が存在する可能性は高いであろう。

横立山東麓1号墳と似た特徴をもつ古墳としては、香川県小豆郡内海町にある弁天島古墳群をあげることができる(5)。組合せ箱式石棺を主体部として8基ほどで構成されており、その内の1基が流紋岩塊の積石塚であるという。長径4ｍ、短径1.70ｍの楕円形で高さ80㎝を測り、須恵器と土師器が出土している。詳しい時期は不明であるが、古墳時代後期に属するらしい。

積石の墳丘をもつことと、時期が古墳時代後期に属することで共通している。

兵庫県相生市の壷根古墳群は相生湾の西岸にあり、箱式石棺を主体部として10基で構成されている(6)。その内の10号石棺の周りにはU字型礫群が巡っており、積石塚と考えられている。この古墳群の造営時期は5世紀中頃以降から6世紀を通じてと考えられている。兵庫県内の海岸近く、島には、赤穂市高取山古墳群(7)や飾磨郡家島町マルトバ古墳群(8)といったように箱式石棺を主体とし、石棺を積石で覆う一群が存在している。

香川県下でも香川郡直島町の葛島では、40基以上の古墳が3群に分かれ群集しており、3基の竪穴式石室をのぞいてすべて箱式石棺を主体としている(9)。墳丘に積石を用いていないが、箱式石棺を主体部にしている点は注目される。5世紀末から6世紀の年代が与えられている。また葛島の北方約4kmの喜兵衛島にある古墳群は、横穴式石室を主体とするが、海岸には4カ所の製塩遺跡が存在し、被葬者はこれら製塩に従事した集団であると考えられている(10)。

以上、瀬戸内海沿岸における幾つかの古墳群に触れてみたが、横立山東麓1号墳とこれら古墳群が共通しているのは、海に面していることはもちろんだが、その立地が大きな農業生産力をもつ沖積平野ではなく、狭小で農業等に適さない場所であることである。これらの古墳群の被葬者は、喜兵衛島古墳群、横立山東麓1号墳なら製塩集団であるように、海に生活の基盤を求めた集団ではないであろうか。この考えはすでに指摘されており、壷根古墳群、葛島の調査報告者はこういった古墳群の被葬者を海人・海人部と想定して、畿内大和政権の瀬戸内航路の掌握との関係を述べている。

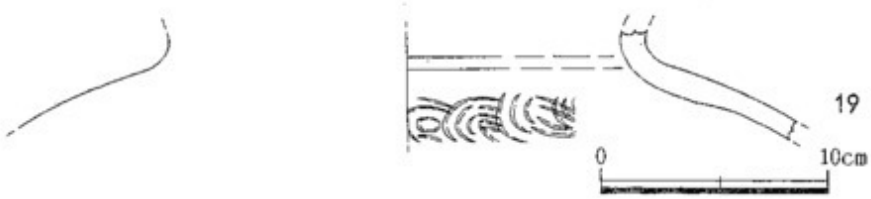
さて順序が逆になったかもしれないが生島湾周辺にもう一度目をもどし、この地の古墳時代後期の状況について触れてみたい。横立山東麓1号墳と同じ構造をもつ可能性がある古墳として、横立山東麓1号墳から北東500mの所にあった木野戸古墳が挙げられる。この古墳が破壊されたとき、積石を除去すると箱式石棺が出土したという。遺物の出土はきいていない。また『下笠居村史』によれば、中学校南積石墳(現存せず)から須恵器が出土したという記載がある。下笠居中学校に遺物を保管していたらしいが、現在は散逸して不明である。これら積石墳は住吉川を東限として、生島湾に面する丘陵上に分布する。実際、横立山東麓古墳群を含め、丘陵上の果樹園内には積石の残骸を今でも見受けることができる。一方積石墳の存在する丘陵の東側、住吉川によって形成された狭小の平地の周囲には、2基の土盛りの横穴式石室墳が存在する。弾正原古墳・桑崎古墳である。それぞれの詳細は第2章で述べたのでここでは触れない。ともかく箱式石棺を主体とした積石の古墳群のある丘陵と接して、狭いながらも水田耕作の行える平地周辺で横穴式石室墳を造墓していることは注目される。ここで住吉川が生島湾に注がず、串ノ山の南麓で90度東に折れ、そのままま っすぐ串ノ山の東で海に注ぐ点にも留意しなくてはならないだろう。この違いが、集団の生活基盤の違いからくるのか、時期の違いによるも

のかは現在の資料では明らかにすることができないが、今後この地域の発掘調査が進めば明らかにできるであろう。

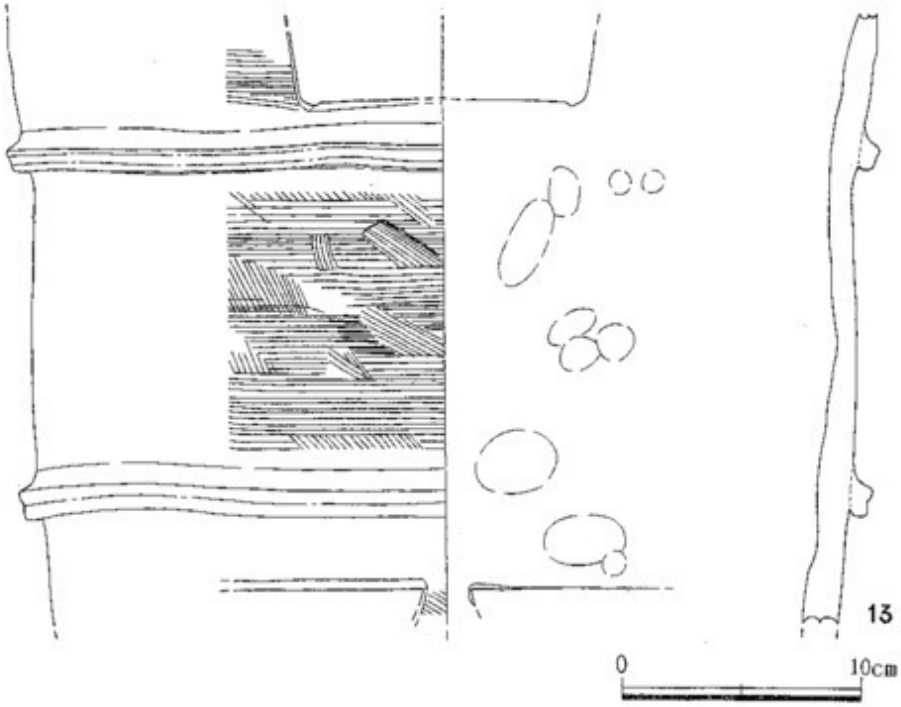
第３節　下笠居中学校保管の周辺遺跡出土遺物

地元の下笠居中学校には、周辺の遺跡から出土した遺物が保管されている。その中には横立山東麓１号墳のある下笠居地区の歴史を考える上で貴重なものもあり、今回その一部を紹介するものである。

第12・13図は横立山経塚古墳出土の円筒埴輪の破片である。横立山経塚古墳についてはすでに第２章で触れたので古墳の説明は省く。円筒埴輪の破片はすべて体部の破片である。方形のスカシ穴が穿たれており、13には逆三角形のスカシ穴と考えられるものもある。タガの突出は１㎝と高く、形態は方形または台形で、端面に凹面が認められるものもある。外面の１次調整はタテまたはナナメ方向のハケであり、タガを付けた後の２次調整はタテまたはナナメ方向のハケの他に、ヨコ方向のハケを施すのもある。内面にはユビオサエの痕跡が見られ、ナナメまたはヨコ方向のハケを施すものがある。外面には黒斑があり、丹塗りも認められる。胎土は角閃石を含み褐色を呈する。川西編年のⅠ期に属すると考えられるが、ヨコハケを施すものもあることから、Ⅰ期からⅡ期の過渡的なものとしておきたい。(1)



第11図　弾正原古墳出土須恵器実測図

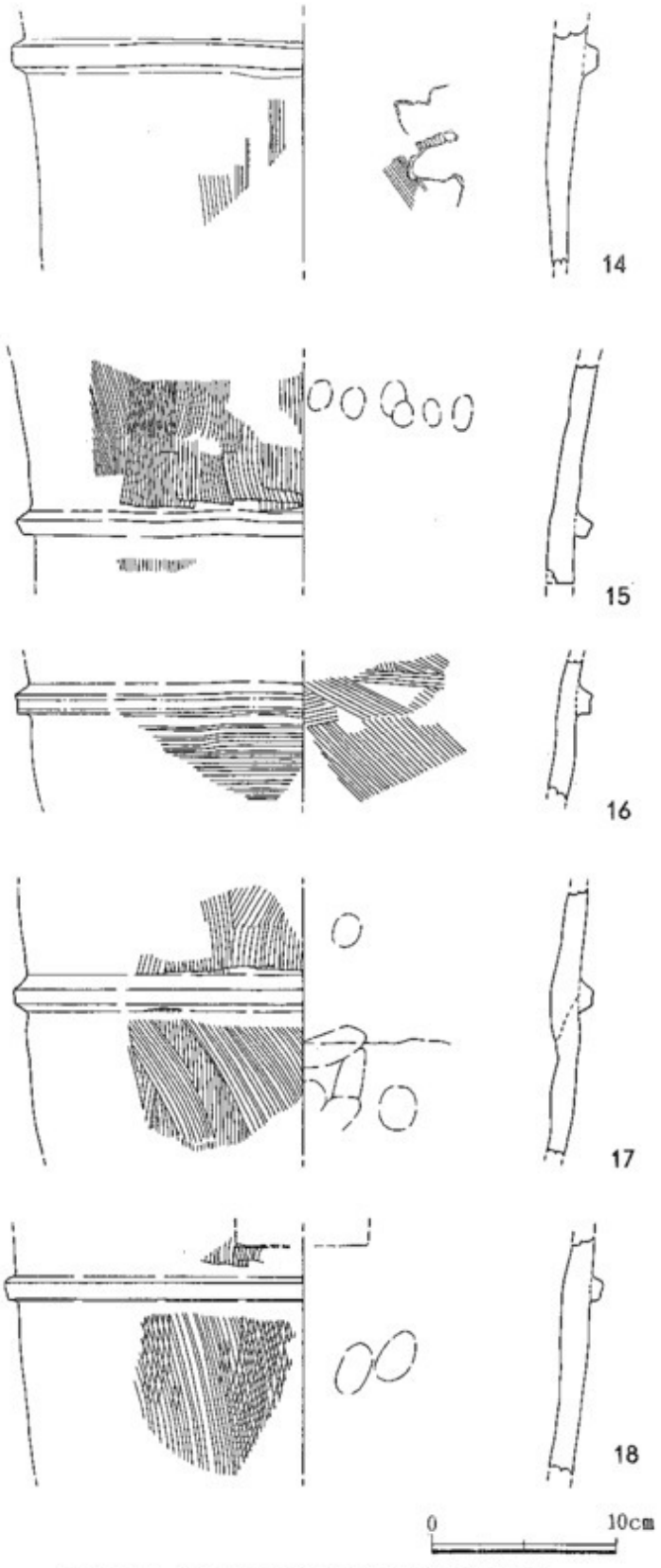


第12図　横立山経塚古墳出土円筒埴輪実測図

第11図は弾正原古墳出土の須恵器壺あるいは甕の頸部の破片である。弾

正原古墳についても古墳の説明は第２章で触れた。須恵器外面には格子目の叩き痕、内面には同心円文の当て痕が残っている。また外面には濃緑色の自然釉がかかり、格子目の叩き痕を不明瞭にしている。弾正原古墳からは他に、中世の時期と考えられる土師器椀底部も出土している。

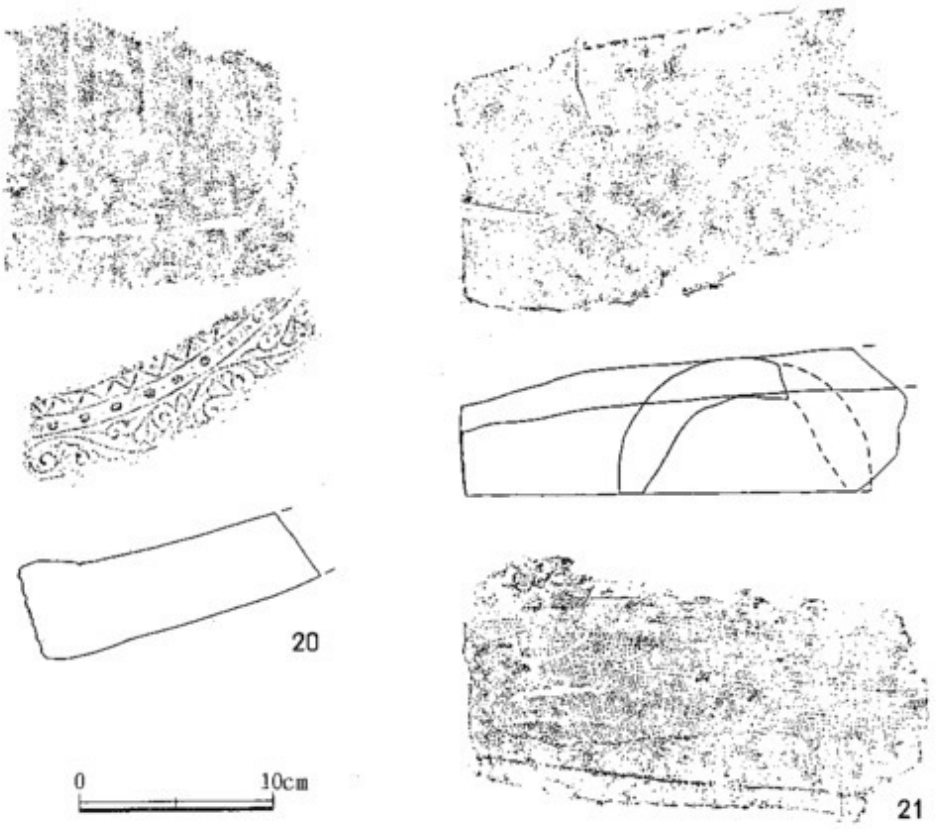
第14図は勝賀廃寺から出土した軒平瓦と丸瓦である。勝賀廃寺は瓦が出土しているものの、調査はされておらず伽藍配置等は不明な遺跡である。20は変形唐草文軒平瓦で上段に鋸歯文、中段に珠文、下段に唐草文を配している。顎の形態は直線顎である。凹面にはやや粗い布目痕が残っているが、凸面は摩滅が著しく調整は不明である。胎土は粗く小石を含み、土師質である。白鳳時代に属するものであろう。21は行基葺式丸瓦で、凹面はやや粗い布面痕が残っているが、凸面は丁寧にナデ消したためか叩き痕は認められない。凹面も布目が一部消されている。凸面



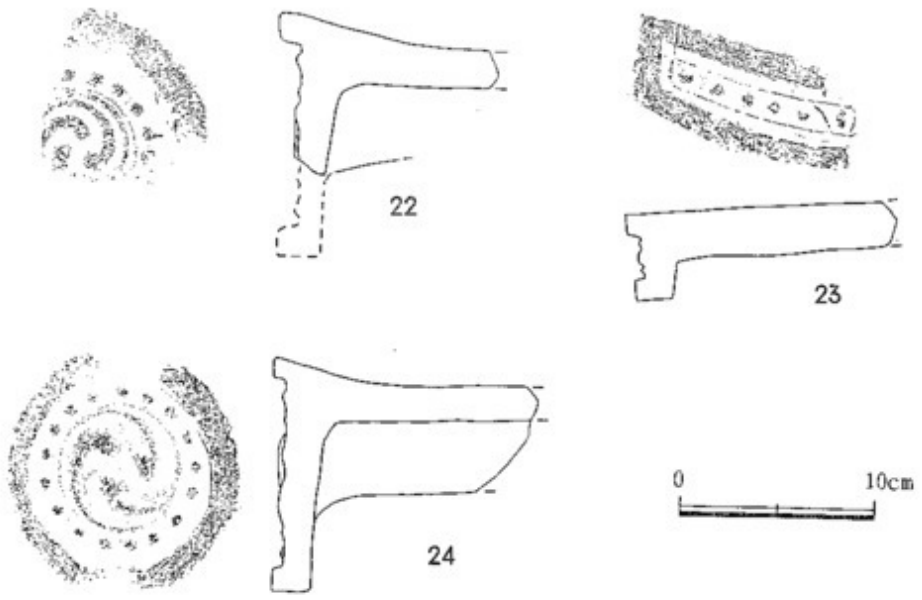
第１３図　横立山経塚古墳出土円筒埴輪実測図

には焼成時に生じたひび割れが見られる。胎土は精緻で細かい砂粒を含む。

第15図は根来寺、香西寺出土の軒丸瓦・軒平瓦である。根来寺は四国霊場八十八箇所巡りの内、第八十二番の寺であるが、創建年代等は不明である。22は左巻き三ツ巴文軒丸瓦で凹面はナデ、凸面はヘラナデを施している。瓦質。23は軒平瓦で、内区に珠文を配していて中心に枝葉が見られる。段顎で、凹面には細かい布目が残っている。須恵質で、いぶしがわずかに残っている。24は香西寺出土の左巻き三ツ巴文軒丸瓦である。香西寺は中世において活躍した香西氏の氏寺である。軒丸瓦の巴文は尾が長く、17個の珠文がある。凹面には細かい布目が残っており、凸面はヘラナデが施されている。胎土が粗い瓦質である。



第14図　勝賀廃寺出土瓦実測図



第15図　根来寺・香西寺出土瓦実測図

参　考　文　献

(1) 『下笠居村史』下笠居村史編集委員会　1956

(2) 『勝賀城跡』高松市教育委員会　1979

『勝賀城跡Ⅱ』高松市教育委員会　1980

(3) 大山真充「大浦浜遺跡における製塩土器編年」

「大浦浜遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ』

香川県教育委員会・本州四国連絡橋公団　1988

(4) 牟礼良典「香川県高松市の小原遺跡について」

『香川県自然科学館研究報告5』香川県自然科学館　1983

(5) 「弁天島古墳群」『新編・香川叢書』考古編　香川県教育委員会　1983

(6) 『壷根古墳群』相生市史編纂室　1983

(7) 『赤穂市史』第1巻　赤穂市編さん委員会　1981

(8) 『家島群島』家島群島総合学術調査団　1962

(9) 『嶌島』香川県教育委員会　1974

(10) 喜兵衛島調査団「謎の師楽式」『歴史評論』第72号　1956

(11) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号　1978

円筒埴輪（横立山経塚古墳）

番号	部位	法量（cm）	特徴	備考
13	体部	最大径※36.3 タガ高 1.0 器高 (27.0)	1／4残存。破片の上段には方形スカシ穴、下段には三角形と考えられるスカシ穴がある。タガは方形で、端面に凹面がある。外面の1次調整はナナメハケ、2次調整はヨコハケである。ハケの単位は1cm当たり5条。タガの部分はヨコナデである。内面調整はナデで、指頭圧痕が明瞭に残る。外面には黒斑があり、朱が付着していた痕跡が認められる。胎土はやや粗く2㎜以下の石英・長石・砂粒を含む。また赤色の小粒を含んでおり、角閃石を含む。色調は暗褐色。	焼成良好
14	体部	最大径※30.6 タガ高 0.9 器高 (13.0)	1／6残存。タガは台形。摩耗が著しく、外面には2次調整のものと考えられるタテハケがわずかに残る。タガの部分はヨコナデ。内面にはナナメハケが粘土充填により一部が消えている。胎土はやや粗く10㎜以下の石英・長石・砂粒を含む。また赤色の小粒を含んでおり、角閃石を含む。色調は暗褐色。	焼成良好
15	体部	最大径※33.6 タガ高 0.9 器高 (12.3)	1／7残存。タガの下には方形のスカシ穴の痕跡が見られる。タガは方形である。外面には2次調整のタテハケが整然と残る。1次調整との区別は困難。ハケの単位は1cm当たり5条である。タガの部分はヨコナデを施している。内面はナデで指頭圧痕が残る。胎土はやや粗く2㎜以下の石英・砂粒を含む。また赤色の小粒を含んでおり、角閃石を含む。色調は暗褐色。	焼成良好
16	体部	最大径※30.4 タガ高 0.9 器高 (7.9)	1／6残存。タガは方形で、端面に凹面がある。外面の1次調整はタテハケ、2次調整はヨコハケである。ハケの単位は1cm当たり5条。タガの部分はヨコナデである。内面には不定方向のハケが、1cm当たり5条の単位で施されている。外面には朱が付着している。胎土はやや粗く2㎜以下の石英・長石・砂粒を含む。また赤色の小粒を含んでおり、角閃石を含む。色調は暗褐色。	焼成良好
17	体部	最大径※31.0 タガ高 0.8 器高 (14.4)	1／9残存。タガは台形。外面の1次調整はタテハケ、2次調整はナナメハケで、ハケの単位は1cm当たり5条。タガの部分はヨコナデである。内面はナデで指頭圧痕が残る。胎土はやや粗く2㎜以下の長石・砂粒を含む。また角閃石も含む。色調は暗褐色。	焼成良好
18	体部	最大径※31.5 タガ高 0.8 器高 (13.0)	1／12 残存。タガの下には方形のスカシ穴の痕跡が見られる。タガは方形である。外面には2次調整のタテハケが整然と残る。1次調整との区別は困難。ハケの単位は1cm当たり5条。タガの部分はヨコナデである。内面はナデで指頭圧痕が残る。外面には朱が付着していた痕跡が認められる。胎土はやや粗く2㎜以下の石英・長石・砂粒を含む。また角閃石も含む。色調は暗褐色。	焼成良好

須恵器（舞正塚古墳）

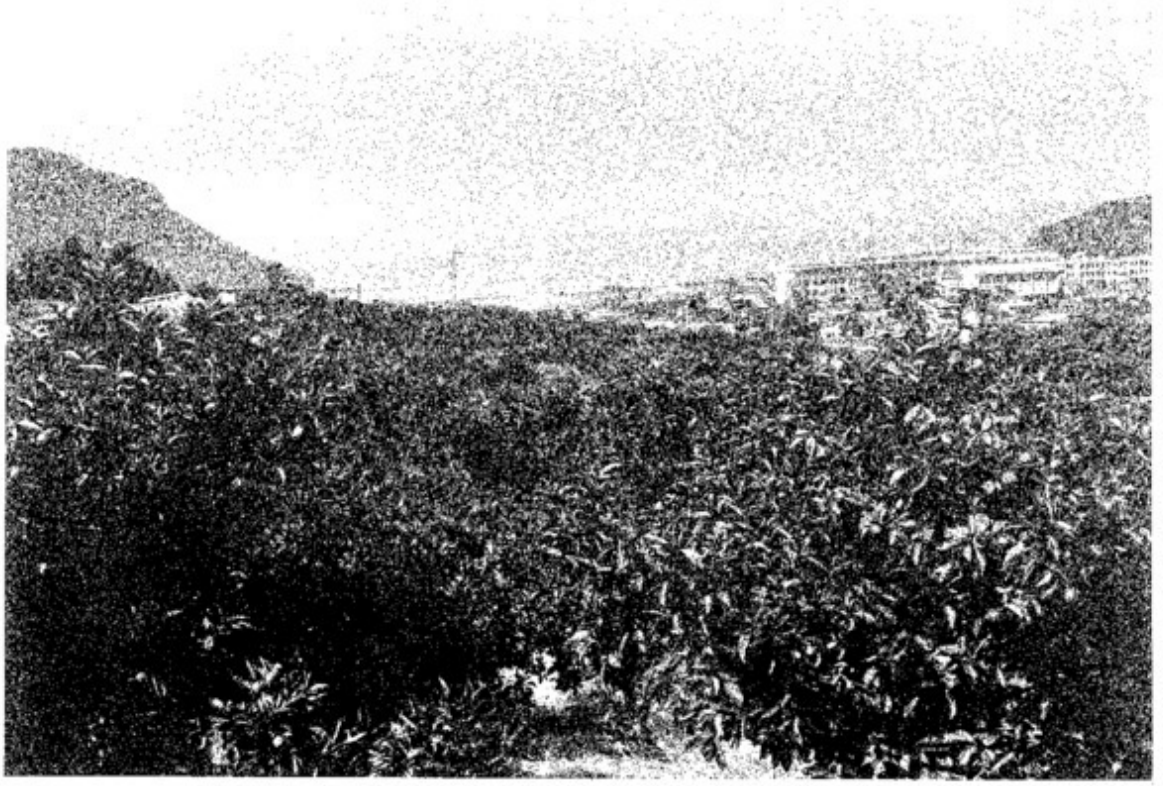
番号	部位	法量（cm）	特徴	備考
19	頸部	頸部径※20.0 器高 (3.9)	壺または甕の破片である。体部の外面には格子の叩き痕、内面には同心円文の当て痕が残っている。頸部付近は内外面とも回転ナデ。また外面には濃緑色の自然釉がかかり、格子の叩き痕を不明瞭にしている。胎土は精緻で1㎜以下の砂粒を含む。色調は暗灰色。	焼成良好

瓦（勝賀廃寺・根来寺・香西寺）

番号	器種	出土遺跡	法量（cm）	特徴	備考
20	軒平瓦	勝賀廃寺	全長 (15.0)	変形唐草文軒平瓦。上段に鋸歯文、中段に珠文、下段に唐草文を配している。顎の形態は直線顎である。凹面にはやや粗い布目痕が残っているが、凸面は摩滅が著しく調整は不明である。瓦当も摩滅を受けている。凹面の瓦当から3cmの所には、瓦当に沿って浅い凹みが見られる。胎土は粗く12㎜以下の小石・長石・石英を含む。褐色を呈する。	焼成良好 土師質
21	丸瓦	勝賀廃寺	全長 (23.0)	行基葺式丸瓦。凹面はやや粗い布目痕が残っているが、凸面は丁寧にナデ消したためか叩き痕は認められない。凹面も布目が一部消されている。凸面には焼成時に生じたひび割れが見られる。胎土は精緻で3㎜以下の長石・砂粒を含む。色調は明褐色。	焼成良好 土師質
22	軒丸瓦	根来寺	全長 (11.5) 瓦当径※12.4	1／4残存。瓦当文様は内区に左巻き三ツ巴文、外区に連珠文を配し、内区と外区を分ける圏線が存在する。巴の頭部と尾の境はくびれ、尾は長いが圏線とは接しない。凹面は縦方向のナデ、凸面は縦方向のヘラナデである。瓦当裏側は不定方向のナデ。胎土はやや粗く4㎜以下の小石・砂粒を含む。色調は灰色を呈する。凸面にいぶしが残る。	焼成良好 瓦質
23	軒平瓦	根来寺	全長 (14.0) 瓦当幅 4.5	瓦当文様は連珠文で、中心部分に枝葉が見られる。連珠文の周りに圏線が巡る。顎は段顎である。凹面には細かい布目が残っている。凸面はナデ。胎土はやや粗く3㎜以下の長石・石英・砂粒を含む。色調は暗灰色を呈する。瓦当の一部にいぶしが残る。	焼成良好 須恵質
24	軒丸瓦	香西寺	全長 (13.8) 瓦当径※12.0	瓦当文様は内区に左巻き三ツ巴文、外区に珠文を17個配する。内区と外区をわける圏線はない。巴の頭部は大きく、頭部と尾の境はくびれている。尾は長く、他の巴の尾に接している。凹面は細かい布目が残っていて、斜めに条線が走る。凸面は縦方向のヘラナデを施している。瓦当裏面と瓦当との接合部分は丁寧なナデ。胎土は粗く5㎜以下の小石・砂粒を含む。色調は灰色。全面にいぶしが残る。	焼成良好 瓦質

※は復元値、（）は残存地

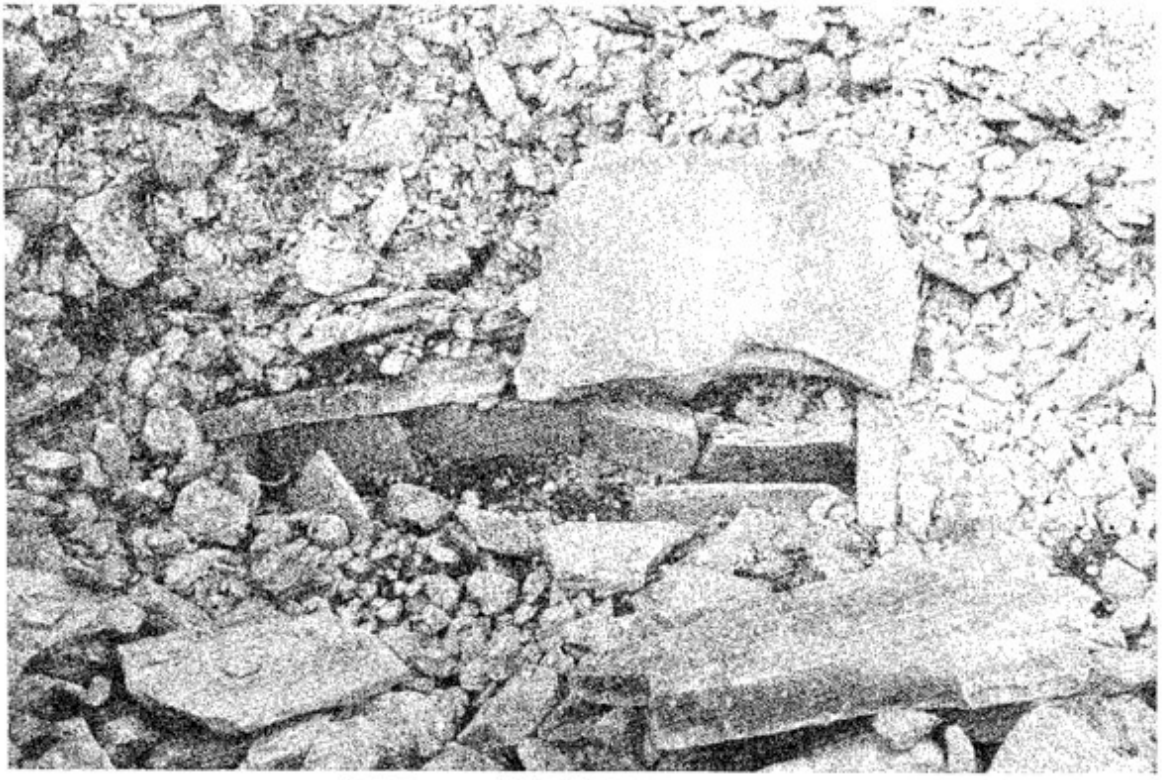
図　　版



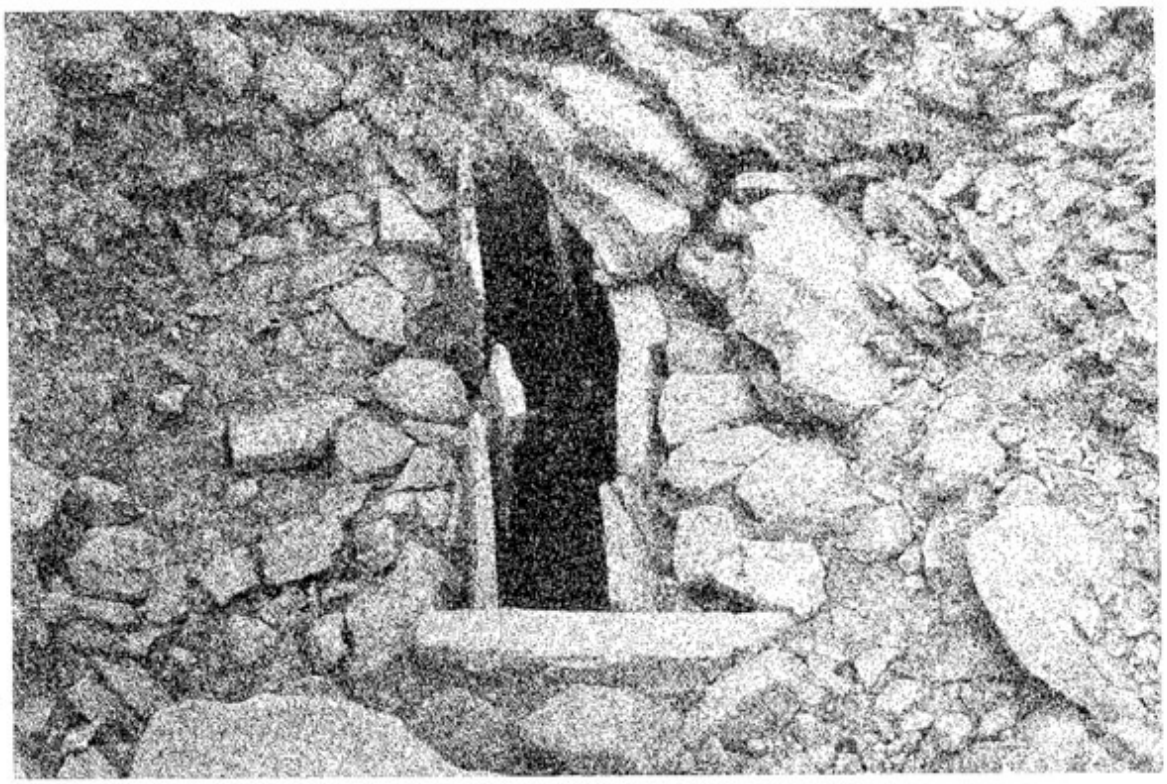
図版１－１　調査地遠景

図版１－２　調査地付近風景

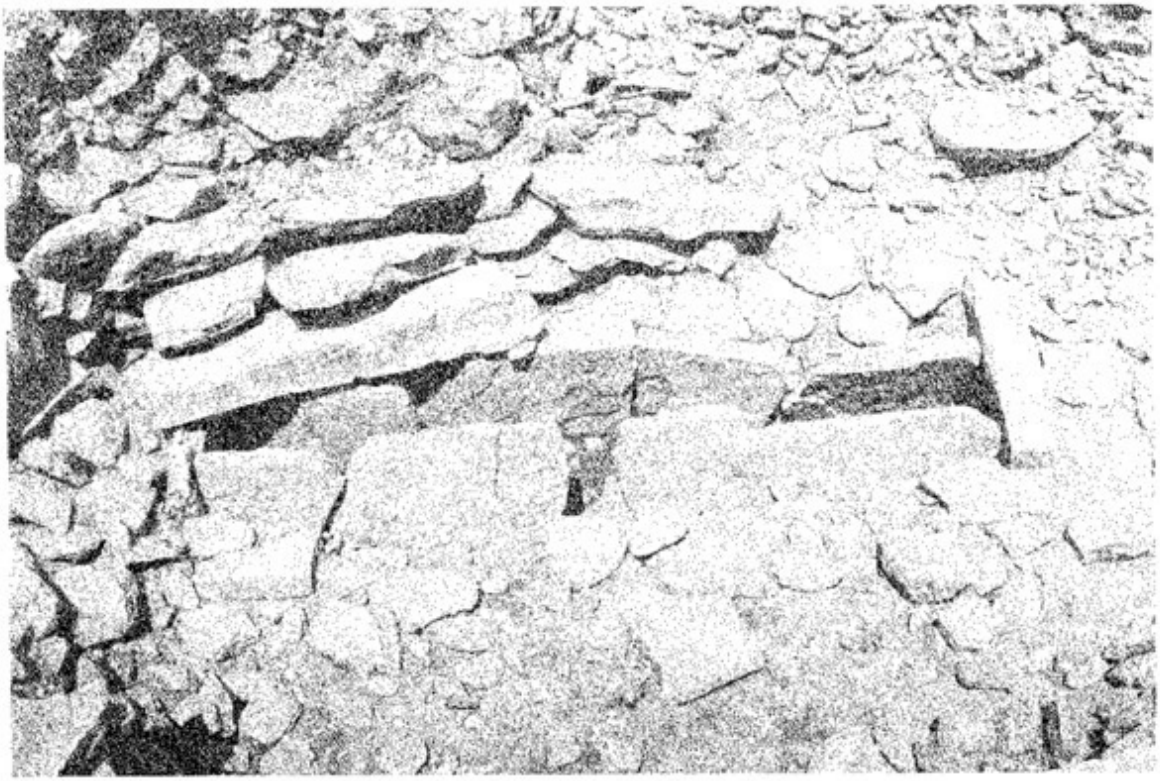
図版２－１　積石調査前風景



図版２－２　箱式石棺調査前風景



図版３－１　箱式石棺（南東から）



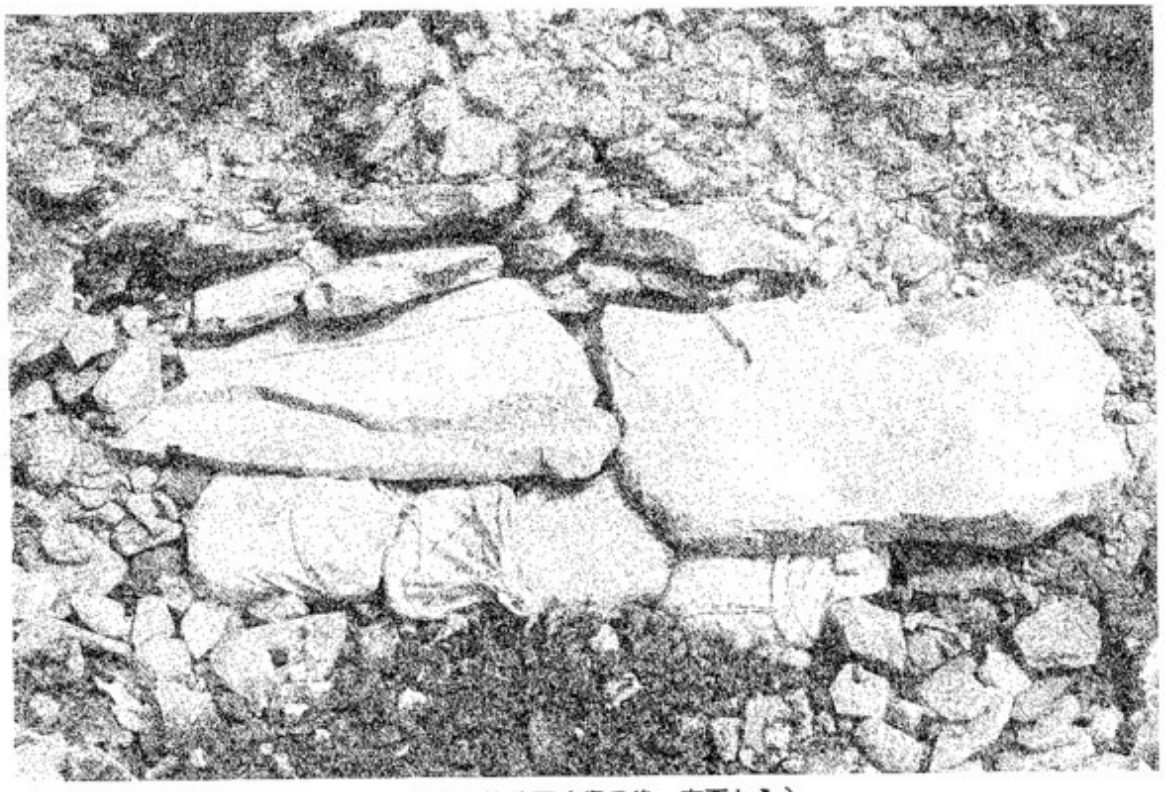
図版３－２　箱式石棺（南西から）

図版４－１　箱式石棺（北西から）

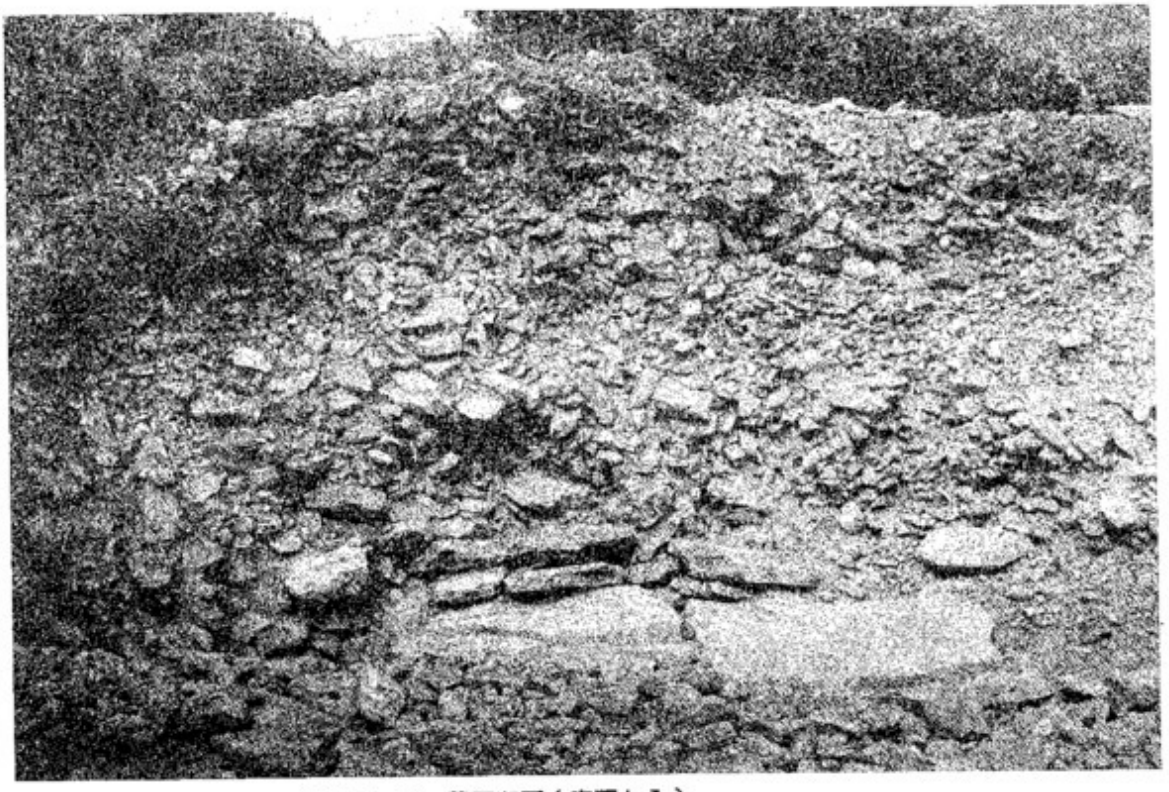
図版４－２　北西トレンチ（東から）

図版５－１　南々東トレンチ（西から）

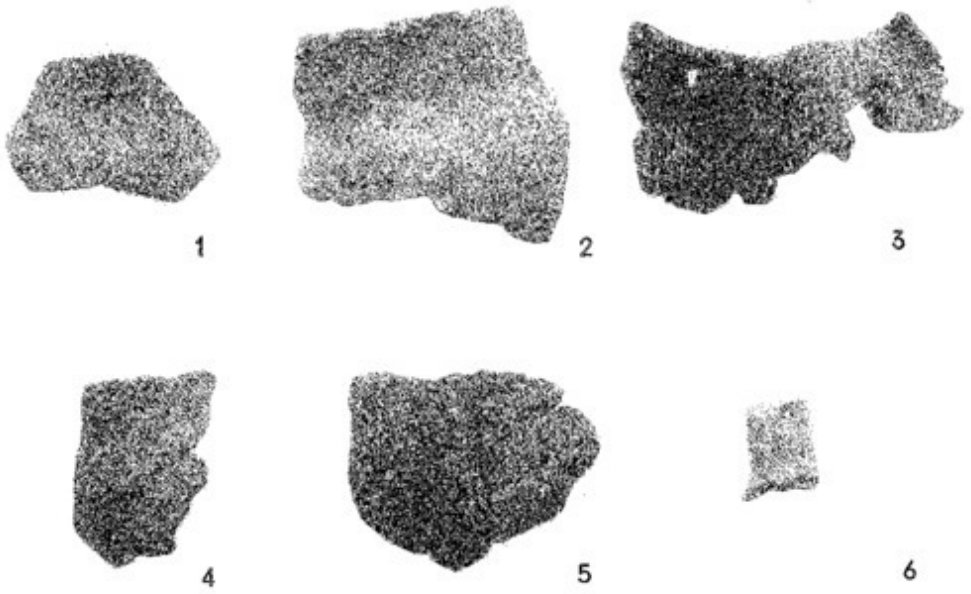
図版５－２　南々東トレンチ（北から）



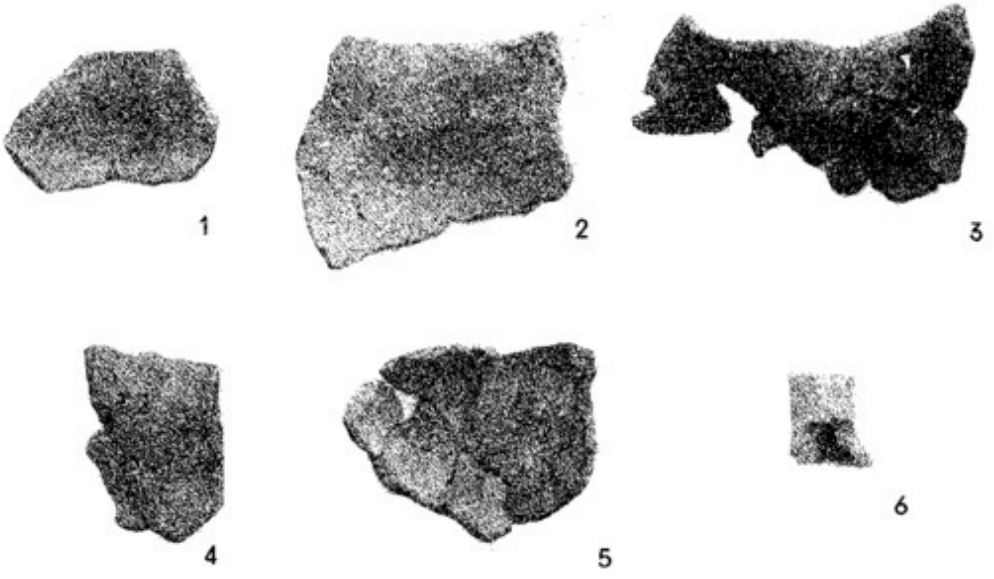
図版６－１　箱式石棺蓋石（復元後、南西から）



図版６－２　積石断面（南西から）



図版７－１　出土製塩土器等（表）



図版７－２　出土製塩土器等（裏）

13

図版８－１　横立山経塚古墳出土円筒埴輪

14

15

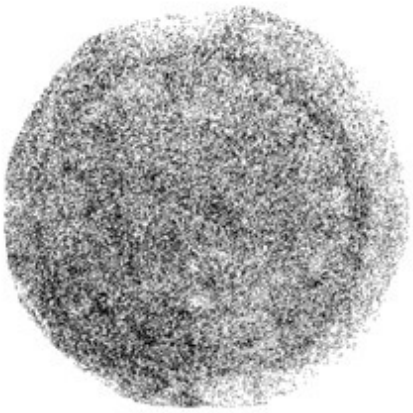
16

17

18

図版８－２　横立山経塚古墳出土円筒埴輪

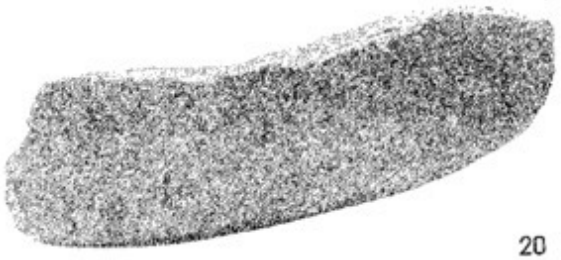
22



24

23

21



20

図版 9　勝賀廃寺・根来寺・香西寺出土瓦

史跡高松城発掘調査報告書

―玉藻公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―

例　　言

1. 本書は、高松市都市開発部公園緑地課によって計画された玉藻公園整備事業にともなう発掘調査の報告書である。

2. 調査の検証にあたっては、文化庁記念物課　服部英雄　文化財調査官のご指導をいただいた。

3. 調査関係者は次のとおりである。

教育長	三木　義夫	文化振興課文化財係長	藤井　雄三
教育部長	多田　　孜	文化振興課主事	山本　英之
教育部次長	増田　昌三	文化振興課主事	川畑　　聰
文化振興課長	多田　恒男	文化振興課事務員	山元　敏裕
文化振興課長補佐	亀井　　俊	文化振興課非常勤嘱託	中西　克也

4. 発掘調査の実施にあたっては、香川県教育委員会文化行政課・高松市公園緑地課の援助を賜った。

5. 現地調査は、藤井指導のもと、山元、中西があたった。

6. 整理作業は、藤井指導のもと、山元、中西があった。

7. 本報告書の執筆は、山元が担当し、編集も行った。

8. 遺物写真は、山元による。

9. 挿図中の一部に建設省、国土地理院発行の 50,000 分の 1 地形図を使用した。

10. 発掘調査および報告書作成時において、以下の方々からご教示を得た。（敬称略）
大山真充、廣瀬常雄、渡部明夫、片桐孝浩、岡田静明、森格也、宮崎哲治、和田素子

目　　次

第1章　調査の経緯
　第1節　調査に至る経緯 …… 1
　第2節　調査の経過 …… 1
　　調査日誌抄 …… 1

第2章　立地と歴史的環境 …… 2

第3章　層位と遺構
　第1節　層　　位 …… 5
　第2節　遺　　構 …… 5

第4章　遺　　物
　第1節　陶　磁　器 …… 14
　第2節　瓦 …… 22
　第3節　金　属　器 …… 23

第5章　ま　と　め …… 33

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置および周辺の遺跡 …… 3
第２図　史跡高松城位置図 …… 4
第３図　調査区位置図 …… 5
第４図　試掘調査時検出石群および土層図 …… 6
第５図　Ⅰ区土層図および石垣立面図 …… 6
第６図　Ⅱ区水手御門前階段平・立面図 …… 7～8
第７図　Ⅱ区南東隅　褐色砂層上面地形測量図 …… 9
第８図　Ⅲ区深掘り第１トレンチ　石垣立面図および土層図 …… 12
第９図　Ⅲ区深掘り第２トレンチ　石垣立面図および土層図 …… 12
第10図　Ⅲ区深掘り第３トレンチ　石垣平・立面図 …… 13
第11図　肥前系磁器実測図（１） …… 15
第12図　肥前系磁器実測図（２） …… 16
第13図　肥前系磁器実測図（３） …… 17
第14図　肥前系磁器実測図（砥部焼）実測図（４） …… 18
第15図　瀬戸・美濃系陶器実測図 …… 19
第16図　瀬戸・美濃系陶磁器実測図 …… 20
第17図　備前焼実測図 …… 20
第18図　その他の陶磁器実測図 …… 21
第19図　瓦実測図（１） …… 24
第20図　瓦実測図（２） …… 25
第21図　金属器実測図 …… 26

挿　表　目　次

第１表　銅銭計測表 …… 23
第２表　出土陶磁器観察表 …… 27～31
第３表　出土瓦観察表 …… 32

図　版　目　次

図版１－（１）　Ⅰ区　調査前状況

－（２）　Ⅳ区　調査前状況

図版２－（１）　Ⅰ区　調査前状況

－（２）　Ⅲ区　調査前状況

図版３－（１）　Ⅱ区　完掘状況（南から）

－（２）　Ⅱ区　土層

図版４－（１）　Ⅱ区　水手御門前階段　完掘

－（２）　同　上　拡大

図版５－（１）　Ⅱ区　水手御門前階段北側

－（２）　同　上　南側

図版６－（１）　Ⅱ区　水手御門前階段排水路下（北から）

－（２）　同　上　（南から）

図版７－（１）　Ⅰ区　完掘状況

－（２）　Ⅲ区　試掘調査時検出石群（北から）

図版８－（１）　Ⅲ区　深掘り第１トレンチ完掘状況（北から）

－（２）　同　上　土層（東から）

図版９－（１）　Ⅲ区　深掘り第２トレンチ完掘状況（東から）

－（２）　同　上　土層（東から）

図版10－（１）　Ⅲ区　深掘り第３トレンチ完掘状況（西から）

－（２）　同　上　土層（東から）

図版11－（１）　Ⅴ区　完掘状況（北から）

－（２）　同　上　土層（西から）

図版12－（１）　Ⅲ区　完掘状況（西から）

－（２）　Ⅲ区埋戻し状況（東から）

図版13－（１）　肥前系磁器（１）　表

－（２）　同　上　裏

図版14－（１）　肥前系磁器（２）　表

－（２）　同　上　裏

図版15－（１）　肥前系磁器（３）　表

－（２）　同　上　裏

図版16－（１）　肥前系磁器（４）　（碪部焼）　表
　　－（２）　同　上　裏
図版17－（１）　瀬戸・美濃系陶磁器　表
　　－（２）　同　上　裏
図版18－（１）　瀬戸・美濃系陶器　表
　　－（２）　同　上　裏
図版19－（１）　備前焼

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

本調査は、高松市によって計画された玉藻公園整備事業の施工前に遺構・遺物の確認を目的に実施されたものである。調査対象地域は、整備工事域に含まれる史跡高松城跡の北側で、石垣の外側裾廻りの部分である。本来は海水が直接当たっていた石垣で、水城、高松城跡の最も特徴的な箇所であったが、明治37年の埋立によって旧状を変えてしまった場所でもある。

第２節　調査の経過

調査は、公園整備事業の範囲７千㎡を調査対象範囲とし、まず平成2年3月15日～22日にわたって試掘調査（第一次調査）を実施した。その結果、遺物および遺構が確認された地区について調査区を拡大した発掘調査（第二次調査）を実施した。調査期間は平成２年５月14日～６月５日までである。

調査日誌抄

5月14日　本日より調査を開始する。月見櫓・水手御門前を重機により埋立土を除去する。
5月15日　水手御門より南において褐色砂層を検出した。埋立前の砂浜と考えられる。
5月16日　褐色砂層の検出の継続、水手御門前面において礫群を検出する。
5月17日　水手御門前面において、階段状石段らしきものを確認。検出の継続を行う。
5月18日　雨天により作業員による作業を中止し、重機による埋立土を除去。第一次調査において検出した石群を確認。３区において、３カ所深掘りを行った。
5月19日　香川県教育委員会文化行政課、大山係長・北山技師来見。今後の調査について協議。
5月21日～23日　階段状遺構検出作業。
5月24日　階段状遺構検出状況写真撮影。
　香川県教育委員会　大山係長来見。
5月25日　階段状遺構の平面実測開始。
5月28日　平面図のレベルおとし、階段状遺構の横断面図作成。
5月29日　階段状遺構立面図作成。Ⅲ区深掘りトレンチ土層写真、土層図作成。
5月31日　Ⅲ区深掘り第３トレンチ、褐色砂層中より石群を確認。広がりは不明。
6月１日　検出した石群にまとまりはみられず、捨石のようである。
6月２日　調査区西側完掘状況写真撮影。
6月４日　水手御門前（Ⅱ区）完掘状況写真撮影。
6月５日　排水溝の下にあって検出できなかった階段状遺構を検出。写真撮影の後、平面図等補足実測。階段状遺構については土嚢・シートによる養生を行い、埋め戻しを行った。本日にて調査を終了する。

第２章　立地と歴史的環境

高松城が立地する高松平野は、香東川を主体として本津川・春日川・新川によって運搬された堆積物によって形成された扇状地である。現在の高松市街地は東に屋島、西に石清尾山塊を望み、高松城の城下町として発展してきた。ここ数年の都市化の波に市街地は郊外に広がり、道路網の整備等、内陸部にも開発の区域が広がってきている。

高松平野で現在、知られている最古の遺跡の例として大池遺跡[註1]で採集された有舌尖頭器がある。縄文時代にはいると、わずかながら遺跡数が増加する。最近の例として、縄文晩期の土器に木製農耕具が共伴して出土した、林・坊城遺跡[註2]、浴・長池遺跡[註3]等がある。弥生時代では、さらに数が増加して、弥生前期・後期末の天満・宮西遺跡[註4]、弥生後期の上天神遺跡[註5]等、最近まで不明であった平野部の弥生時代の様相がわかり始めたところである。古墳時代では、前期の積石塚である石清尾山古墳群[註6]等が有名である。

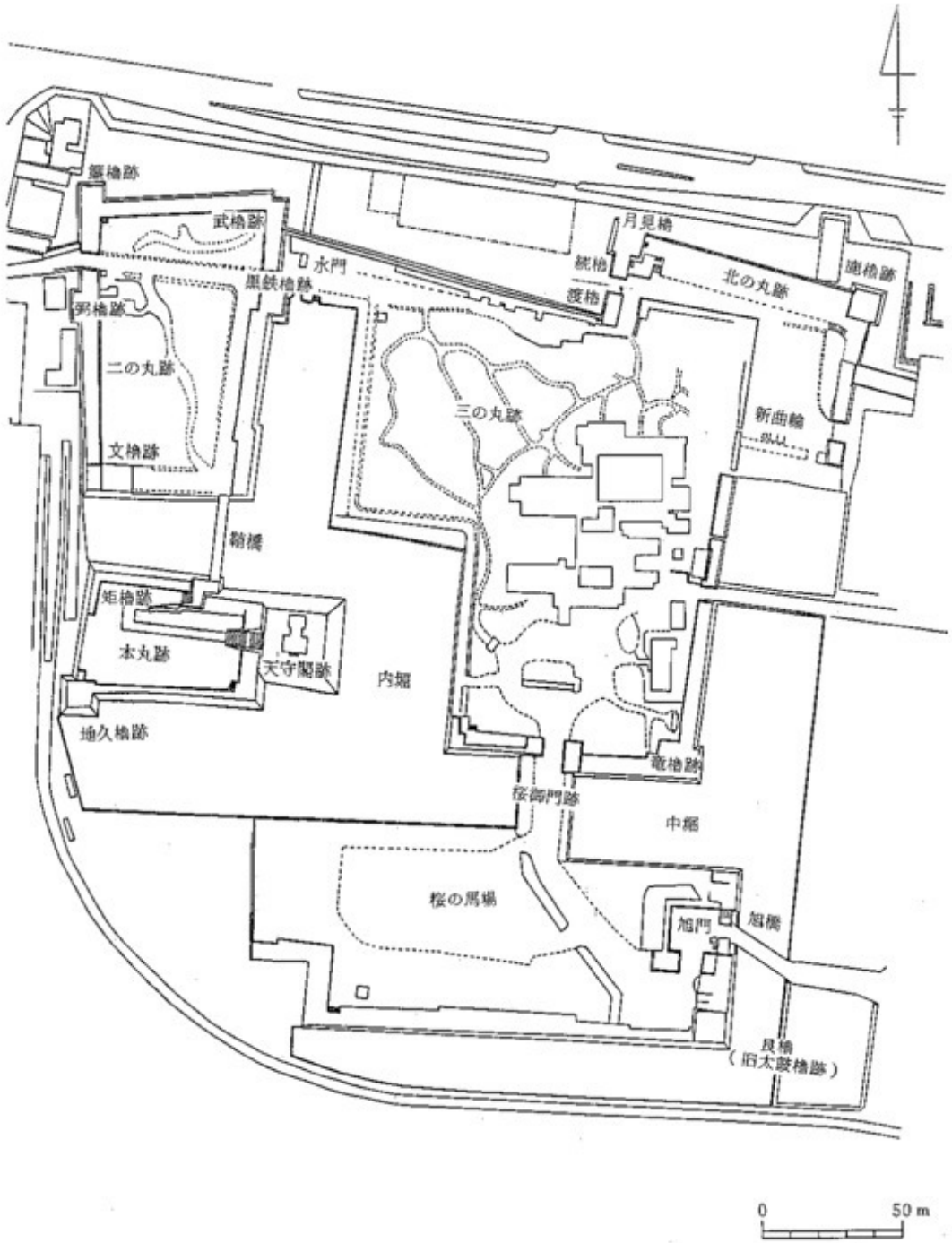
古代から中世にかけての遺跡は、前田東・中村遺跡[註7]で奈良から平安時代にかけての自然河川から、人形、斎串などを検出している。東山崎・水田遺跡[註8]では、中世前半から近世にかけての遺構を検出している。中でも濠によって取り囲まれた近世の屋敷跡と考えられるものも確認されている。また、高松市教育委員会が行った調査においては、条里制遺構と考えられる溝等[註9]も検出している。

高松城は、天正15年（１５８７）生駒親正が入封し、翌天正16年（１５８８）から築城を開始し、数カ年を要して完成させた大規模な水城である。寛永19年（１６４２）には生駒氏に代わって讃岐に入封した松平頼重が、城郭の改修・新築を行っている。これらの造成によって三の丸は北と東へ拡張し、東の丸が造成された。この造成によってできたのが月見櫓・続櫓・水手御門・渡櫓等であり、水手御門からは直接海への出入りができるようになっていた。しかし、明治37年（１９０４）の埋立によって、高松城の北側は海から離れてしまうという現在の状況になった。

高松城周辺の発掘調査は、調査例が少ないが、県民ホール建設にともなう東の丸の発掘調査[註10]、高松市美術館建設による紺屋町遺跡の発掘調査の２例がある。前者は発掘調査によって、生駒～松平時代の遺構、遺物等が検出されている。後者は、発掘調査によって18世紀を中心とする陶磁器が多量に出土し、加えて木製品の量も豊富である。城下の町屋の一端を知るうえで貴重な資料である。

1. 調査区 } 高松城
2. 東ノ丸 }
3. 紺屋町遺跡
4. 北大塚古墳
5. 鏡塚古墳
6. 石船塚古墳
7. 稲荷山姫塚古墳
8. 姫塚古墳
9. 鶴尾神社４号墳
10. 猫塚古墳
11. 摺鉢谷遺跡
12. 浄願寺山古墳群
13. 南山清古墳群
14. 坂田廃寺
15. 上天神遺跡
16. 太田下・須川遺跡
17. 天満・宮西遺跡
18. 大池遺跡
19. 溜・長池遺跡
20. 凹原遺跡
21. 林・坊城遺跡
22. 東山崎・水田遺跡
23. 前田東・中村遺跡
24. 久米山古墳群
25. 久米池南遺跡
26. 高松市茶臼山古墳
27. 久本古墳
28. 山下古墳
29. 岡山小古墳群
30. 大空遺跡
31. 屋島城
32. 長崎鼻古墳

第１図　遺跡の位置および周辺の遺跡



第２図　史跡高松城位置図

第３章　層位と遺構

第１節　基本層序

今回の調査における基本層序は、第１層　灰色砂層（明治三七年の埋立による盛土）、第２層　灰色砂層（水の影響によるラミナ状の堆積）、第３層　褐色砂層である。深掘り第３トレンチにおいて第２層と第３層の間に炭層が入る。第３層が幕末から明治頃の砂浜であると思われる。

第２節　遺　　構

(1)　Ⅰ　区

第一次調査において調査を実施した区域である。

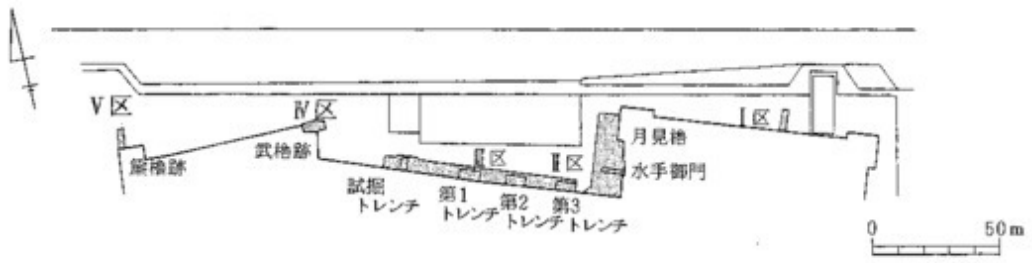
北の丸北側の石垣のほぼ中央付近に直行するようにトレンチを設定した。トレンチの長さは8.3ｍ、幅2.5ｍで設定したが、近現代の攪乱が広範囲におよんでいるため、長さ8.3ｍ、幅1.5ｍの範囲のみを掘り下げるにとどまった。面積は12.45 ㎡で、現在の地表面より１３０cmまで掘り下げることができた。現地表より70cmほどまでは攪乱がおよんでいる。

トレンチ中央部分からは井戸が検出された。井戸は素焼きの井戸枠を継ぎ重ねたもので、継ぎ目は漆喰をつめている。発掘範囲が狭いため、井戸全体の検出はしていないが、当該地が埋め立てられた明治期以降のものとしてまちがいない。

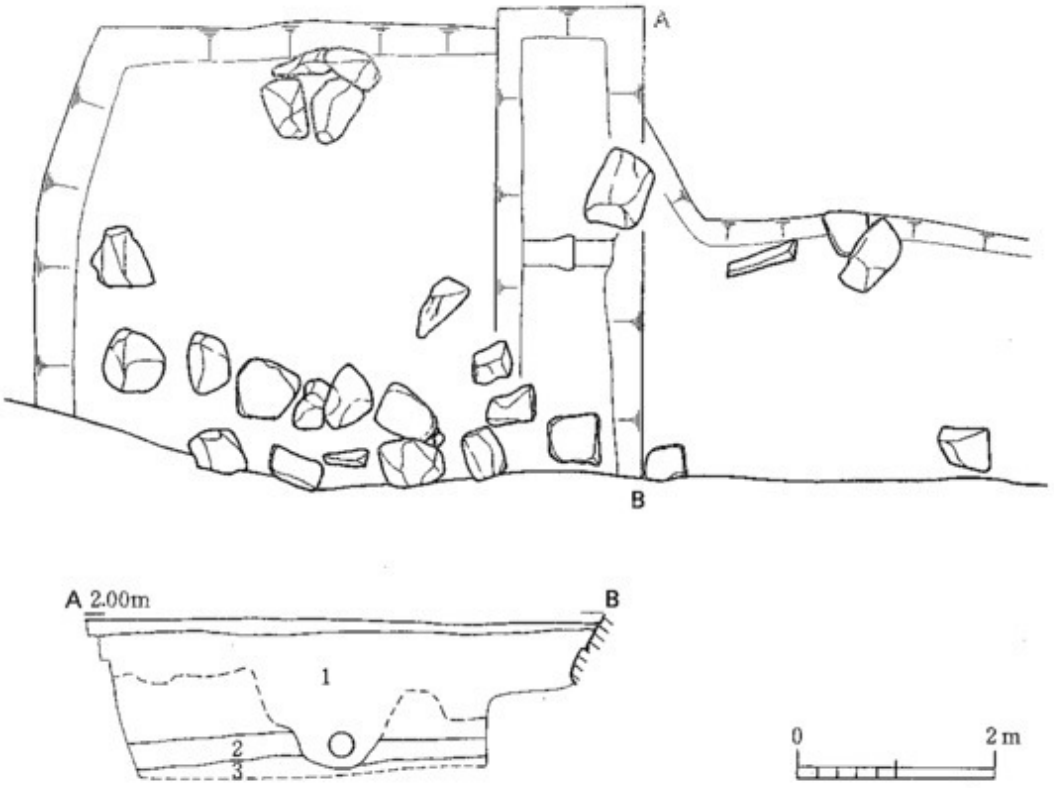
出土遺物は、第１層中位より多量の丸瓦・平瓦・漆喰が層になって出土した。また、第１層下位の灰色砂層より、若干の瓦片・陶磁器片・鉄片が出土した。

(2)　Ⅱ　区

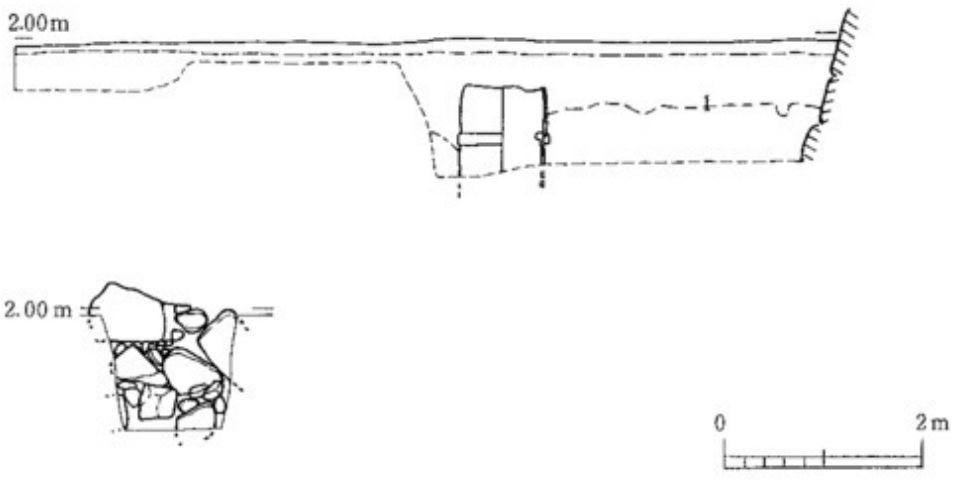
試掘調査で集石が検出されたため、調査区域を拡大して本調査を実施した。調査面積は約268㎡である。基本土層は、第１層灰色砂層が40cm、第２層灰色砂層が５cm、第３層は褐色砂層である。第３層は調査区の南から北西方向に向かって傾斜し、他にⅢ区深掘り第３トレンチ以外には見られない砂層である。



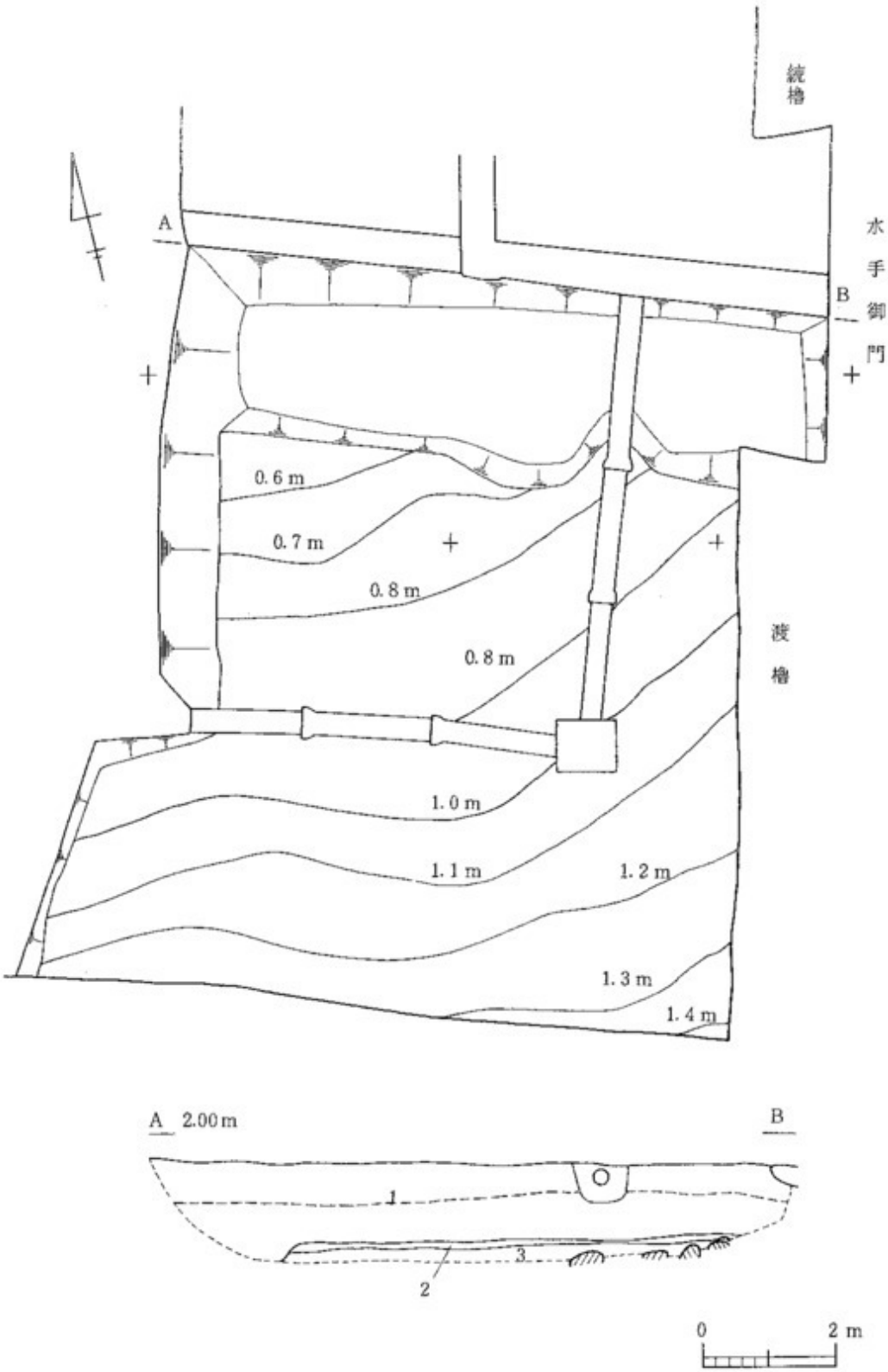
第３図　調査区位置図



第4図　Ⅱ区試掘調査時検出石群および土層図



第5図　Ⅰ区土層図および石垣立面図



第7図　Ⅱ区南東隅　褐色砂層上面地形測量図

検出した遺構は、水手御門から海に出る階段である。階段の大半は取り外されて現存しないが、最下段（１段目）とその１段上（２段目）の計２段と裏込めに使われた栗石を検出した。１段目の石列は５石で構成され、長さは約3.2ｍ、蹴上高15～20㎝、踏面は60㎝である。２段目の石列は６石で構成されている。長さは約4.2ｍで、蹴上高は50㎝、踏面は60㎝である。

２段目の上面が奥に向かって傾斜していること、蹴上が50㎝と高いことから、最下段の石列の上に小さな石が置かれていた可能性がある。使用されていた石材は花崗岩の自然石で、加工等は見られなかった。続櫓および渡櫓から続いてくる石垣が門の前で石が両側から突出する部分があり、これが階段の標式となっていたのではないか。また、門下の状況を見てみると、現水手御門礎石下に礎石らしい石を検出した。水手御門解体修理時（昭和30・31年度）の調査において、この石の上部にほぞ穴が確認されている。このことから解体修理報告書では、現在の水手御門が再建であると指摘している。[註11]

また、調査によって散乱した状況で検出された石材の中には、階段の石材と考えられるものはない。

遺物については、第三層から巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦、18世紀後半以降の染付、銅製銙が確認された。なお、第１層から確認された遺物には、現在のガラス瓶を含んでおり、第２層からは遺物が全く確認できなかった。

(3) Ⅱ 区

試掘調査において石材の集まりを検出したため、調査区を拡張して発掘した結果、石材の広がりを確認した。石群は東西10ｍ、南北５ｍの範囲に約60㎝大の自然石が30個ほど散乱していた。石群の検出面は第１層で現地表下50㎝である。この石群を包含する土層が明治期の埋立土であるので、直接城に関係する遺構等ではないと判断することができる。

この調査区では、石垣下部の状況を確認するために３カ所において深掘りを行った。基本土層は、Ⅱ区と同様の堆積を示す。現地表下から約２ｍの深さまで掘り下げた深掘り第１・第２トレンチでは、湧水が著しくなり掘り下げを中止したが、ピンポールによる確認では、これよりさらに約１ｍ下で巨石らしいものを確認した。香川県県民ホール敷地内で検出された下層石垣の根石が、ほぼ同じ標高（－0.5～１ｍ）であることからも基底石・根石である可能性が高い。

深掘第３トレンチでは、海抜0.4ｍの高さで石群を確認した。これらの石群は、第３層である褐色砂層の上層部を除去した段階で確認できる。検出した石は、最大で１×0.8ｍ、標準は0.6×0.25ｍの大きさで、約20個散乱していた。

これらの石と石垣の石材とを比較してみると次のようになる。石垣下部の石は１ｍ以上ある自然石を用いているが、上部の石材は下部のものに比べ小さく、方形に整形されたものなどを

用いる。本地点に散乱していた石材は、石垣上部に使用されている石材ににており、もとは石垣に使用したものであろう。

本調査区の遺物は、深掘第3トレンチの第3層中から唐草文軒平瓦、18世紀後半以降の染付が出土している。

(4) Ⅳ 区

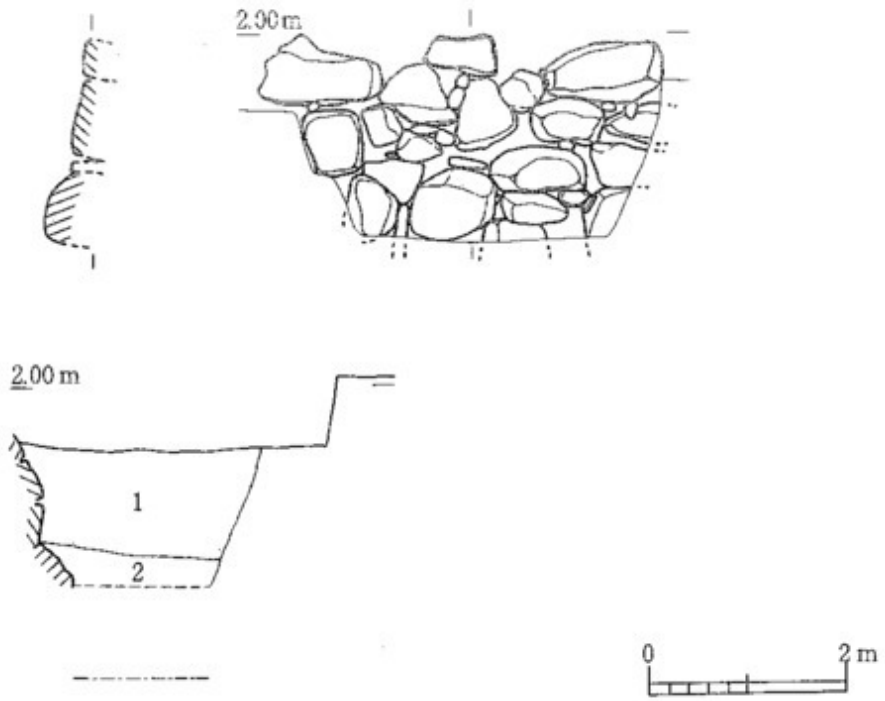
武櫓台の台東に設定した調査区である。この箇所は公園整備事業で掘削がおよぶ計画になっているため、遺構・土層の確認のための調査を実施した。9.5×4.5mの範囲を現地表下から80cmほど掘り下げたが、すべてが明治時代以降の攪乱土である。石垣以外の遺構は確認できず、ピンポールによる確認によっても石材の存在は認められなかった。遺物も出土していない。

(5) Ⅴ 区

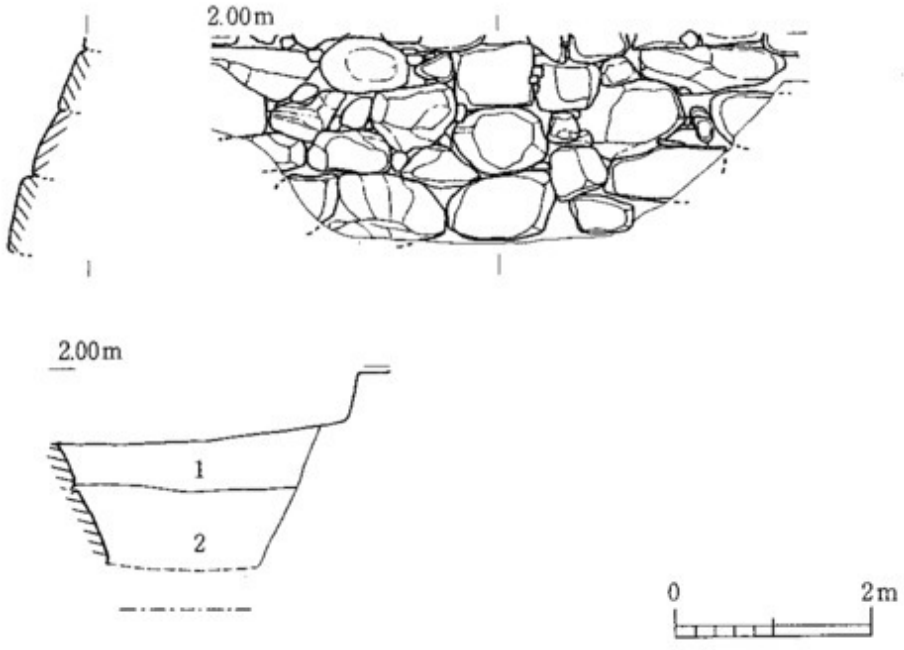
二の丸北西端、櫓攪台直下において南北方向にトレンチを設定した。当初は、長さ6.9m、幅2.5mで設定したが、近現代の攪乱が著しく範囲内にコンクリート片、大形の石材、木材等が散乱しているため、長さ5.3m、幅1.5mの範囲の調査にとどまった。調査面積は7.95㎡である。現地表面より150cmまで掘り下げた。

近現代の攪乱が、かなり深くまでおよんでいるとともに、トレンチ南端にはコンクリート基礎が残っていたため、石垣の検出までには至らなかった。トレンチの下部では、北方向に緩やかに傾斜する白灰色砂層の堆積状況が確認できた。

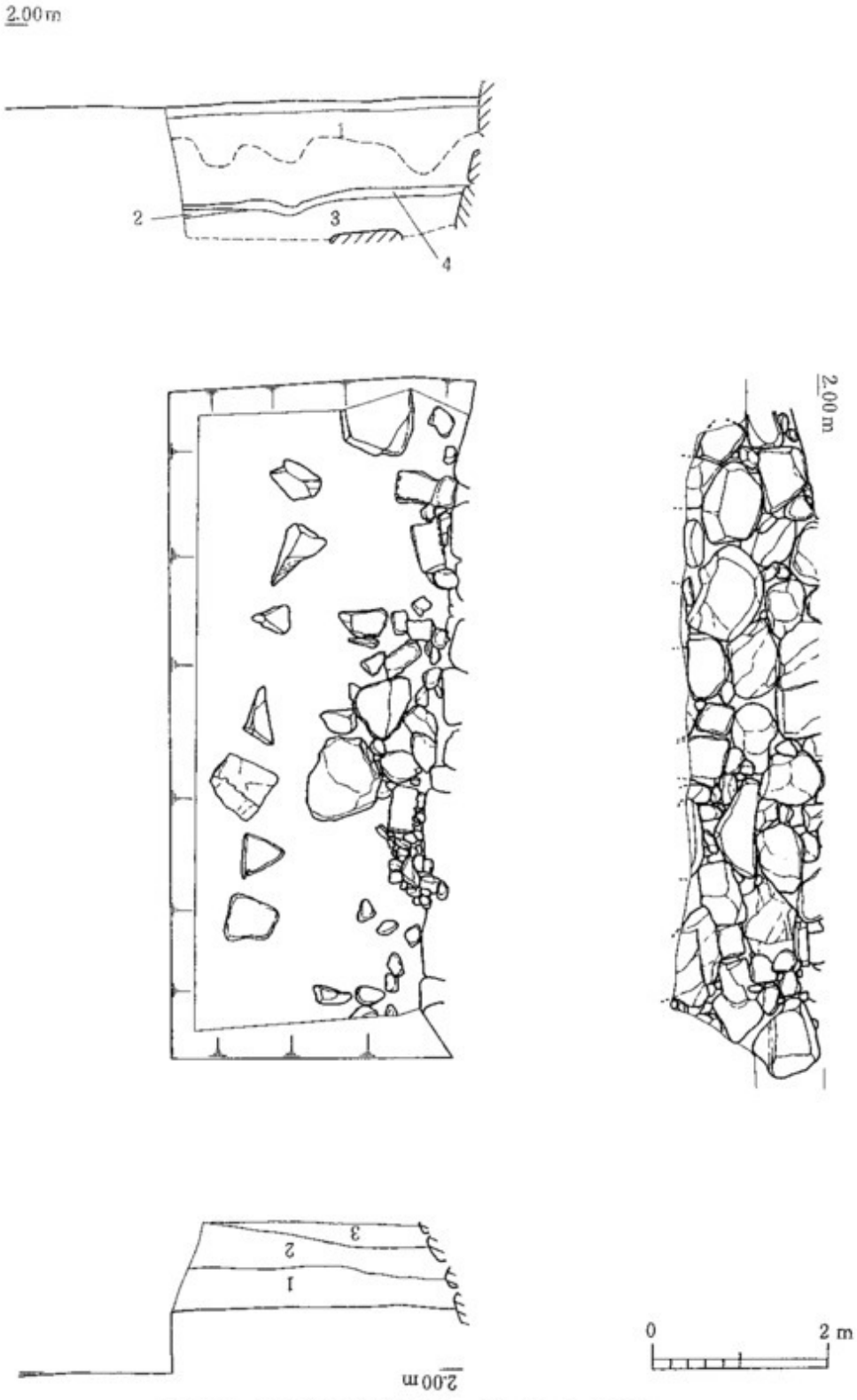
出土遺物は非常に少なく、瓦・染付の陶磁器片の数点のみである。



第8図　Ⅱ区深掘り第1トレンチ石垣立面図および土層図



第9図　Ⅱ区深掘り第2トレンチ石垣立面図および土層図



第10図　Ⅱ区深掘り第3トレンチ石垣平・立面図

第4章　出土遺物

今回の調査において出土した遺物は、18リットル入コンテナ8箱分であり、陶磁器、瓦、銅製品等が見られる。これらの出土遺物の大半は陶磁器である。

(1) 陶磁器には、肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、備前焼、西播系陶器、その他の焼物に分かれる。出土比率は、肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、備前焼、西播系陶器、その他の焼物に分かれる。出土比率は、肥前系磁器と瀬戸・美濃系 陶磁器がほぼ同数で備前焼、西播系陶器が若干量である。

① 肥前系磁器（砥部焼を含む[註12]）

器種としては、碗、皿、壷、猪口、鉢等がある。

碗　端反り碗が大半を占める。模様は、外面には、梅、菊、松、草などが描かれており、内面には界線を描くものと、雷文を描くものがある。菊、松、草などを描いている碗については、呉須の発色が鮮やかなのに対して、梅花を描く（38～42・44・45）碗については呉須の発色が一定ではない。

皿　口径により2種類に分かれる。口径の大きな皿（18～24）は、口縁部が輪花状になり、口縁部には口紅が施され、高台は蛇の目凹型高台になる。口縁の小さな皿（35・36）についても、口縁部は輪花状になっている。内面見込には松等の文様が描かれている。

瓶　頸部に山水文、胴部には草花文が描かれている。

油壷　外面に蛸唐草の文様をもち、内面には轆轤痕が顕著に残る。

猪口　外面に草文をもつそば猪口（32）、外面に鹿子文、蓮弁文、高台に「成化年製」の銘をもつ豆猪口（31）がある。

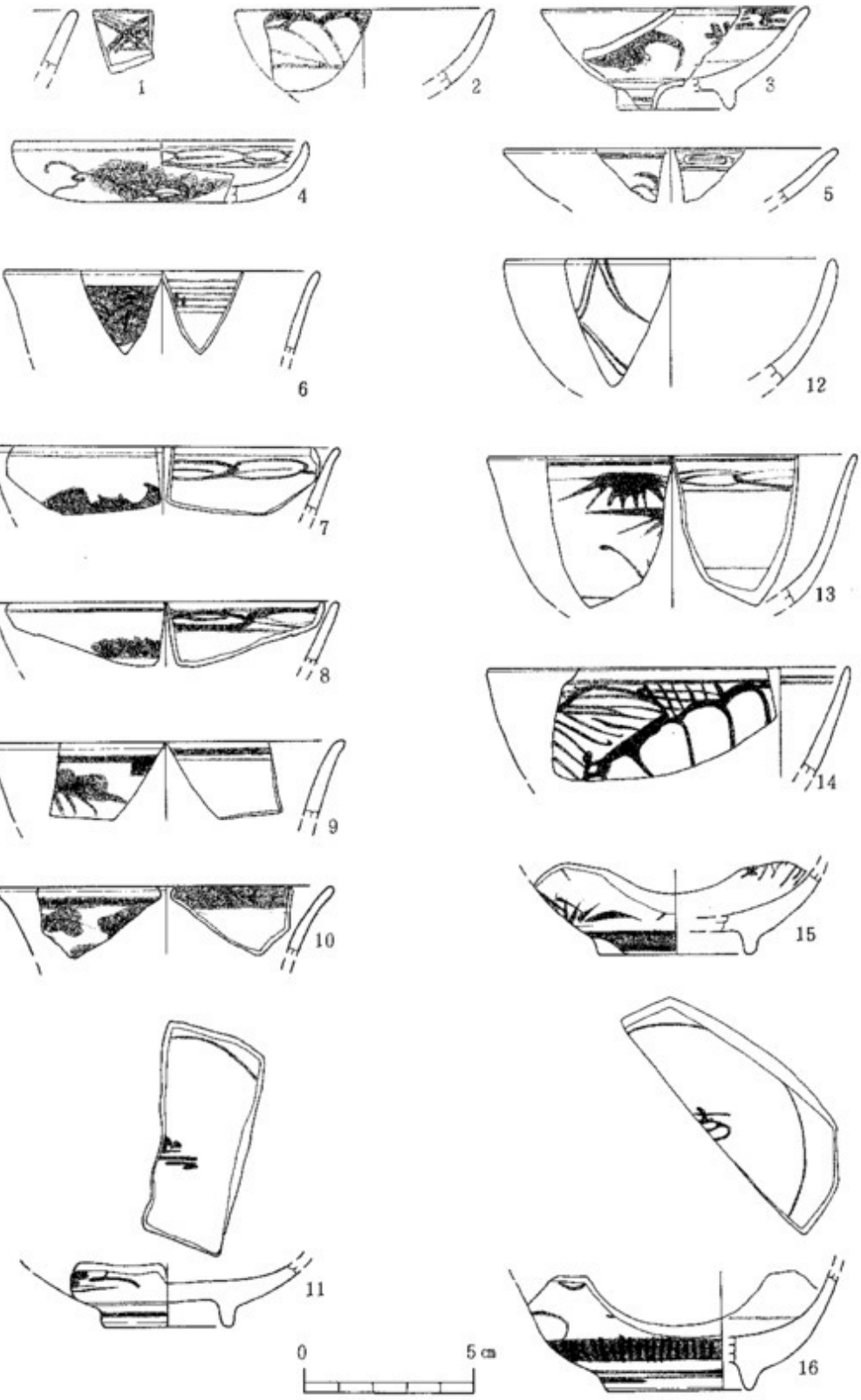
鉢　内外面に雷文をもつもの（32）、外面に○×文をもつ（25）ものがある。

香炉　（37）は青磁の香炉である。外面と口縁部内面に灰緑色釉を施す。

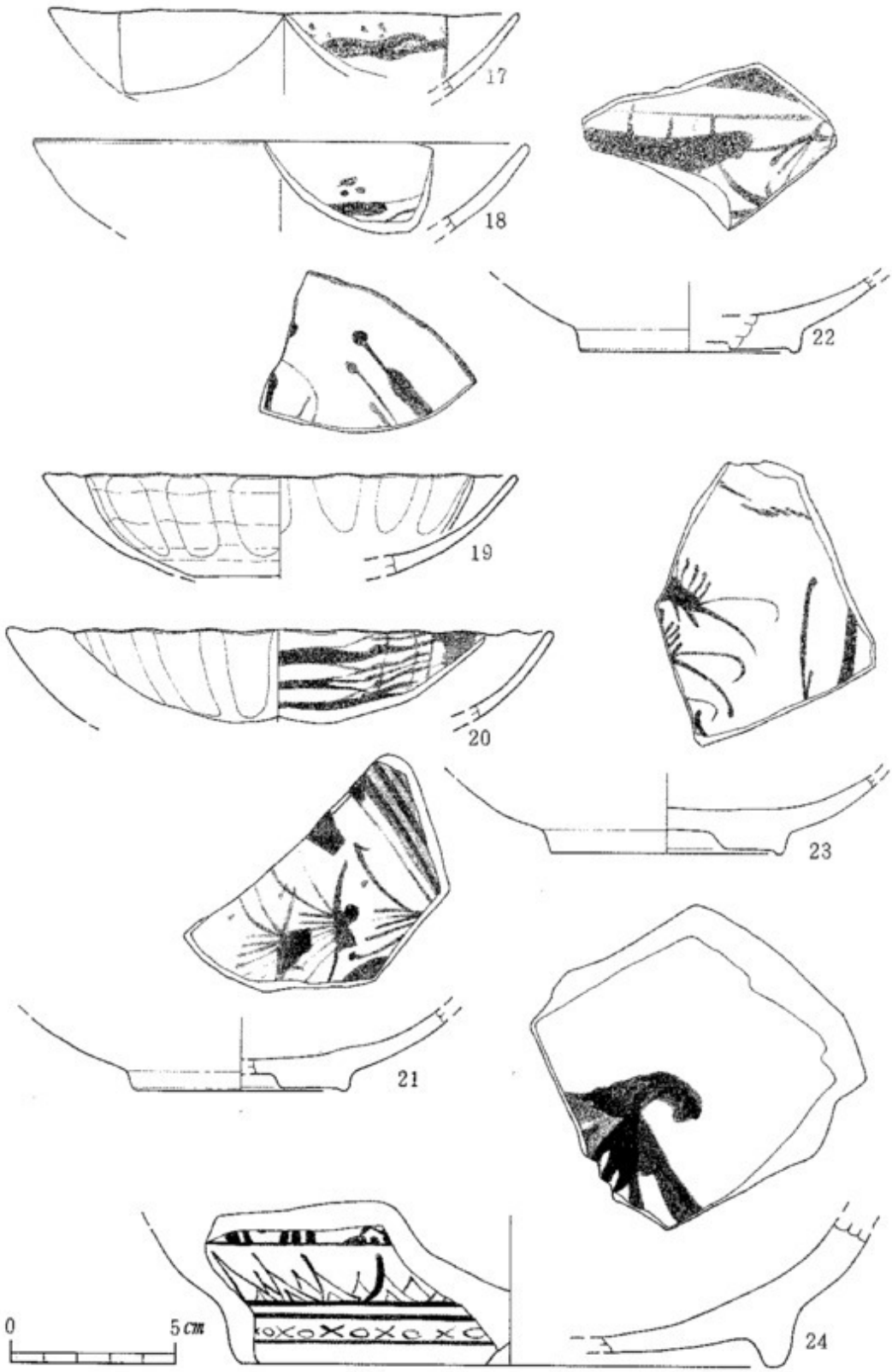
② 瀬戸・美濃系陶磁器

瀬戸・美濃系陶磁器には、皿、壷、小杯等が出土している。中でも（53～63）に図化した陶器の皿が多量に出土している。特徴として、口縁部がわずかに外反し、内外面に轆轤痕を残し、釉は淡黄褐色と濃緑褐色の部分に分かれ、貫入が見られる。他に（51・52）のような陶胎染付もみられる。

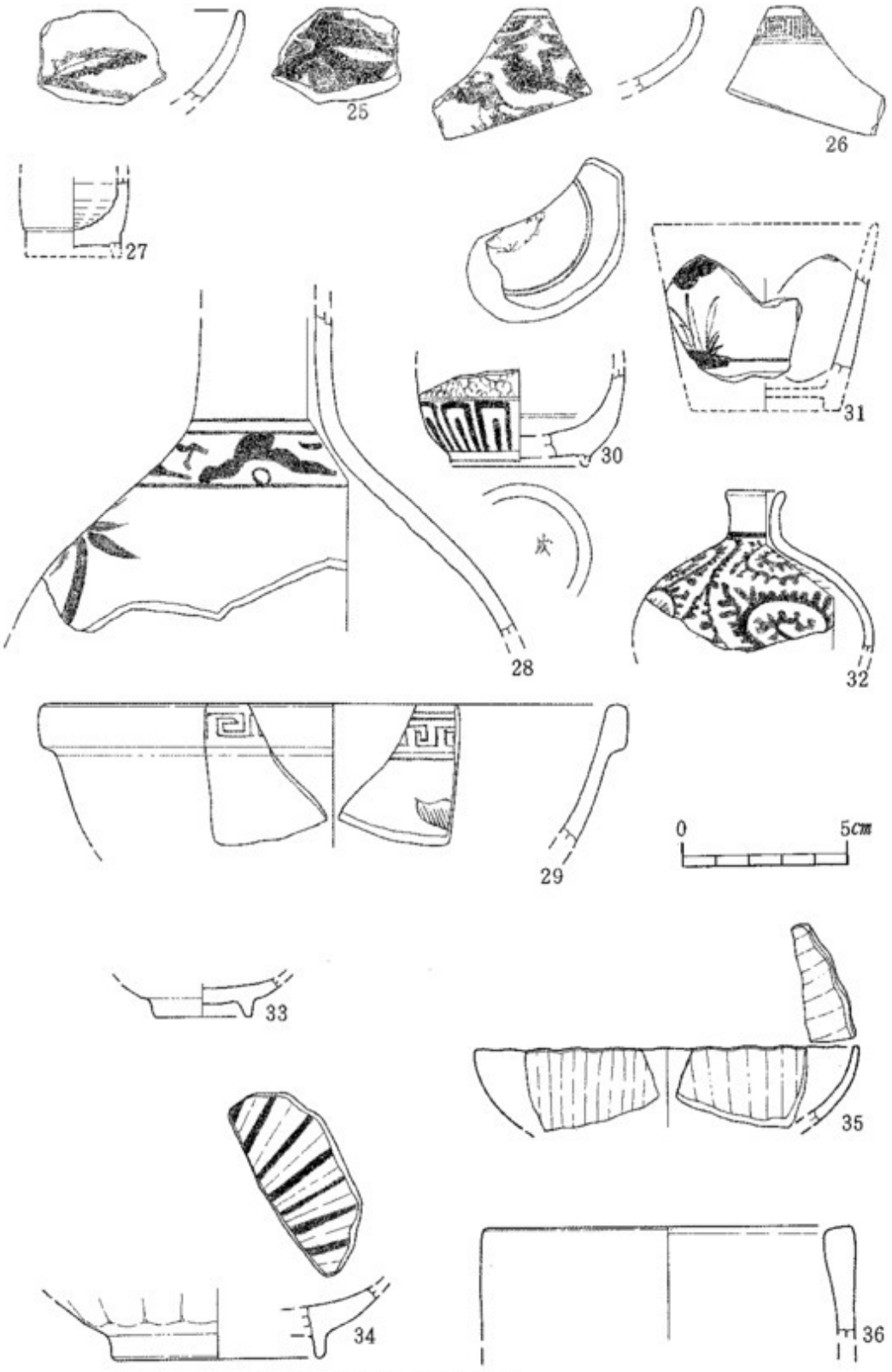
③ 備前焼



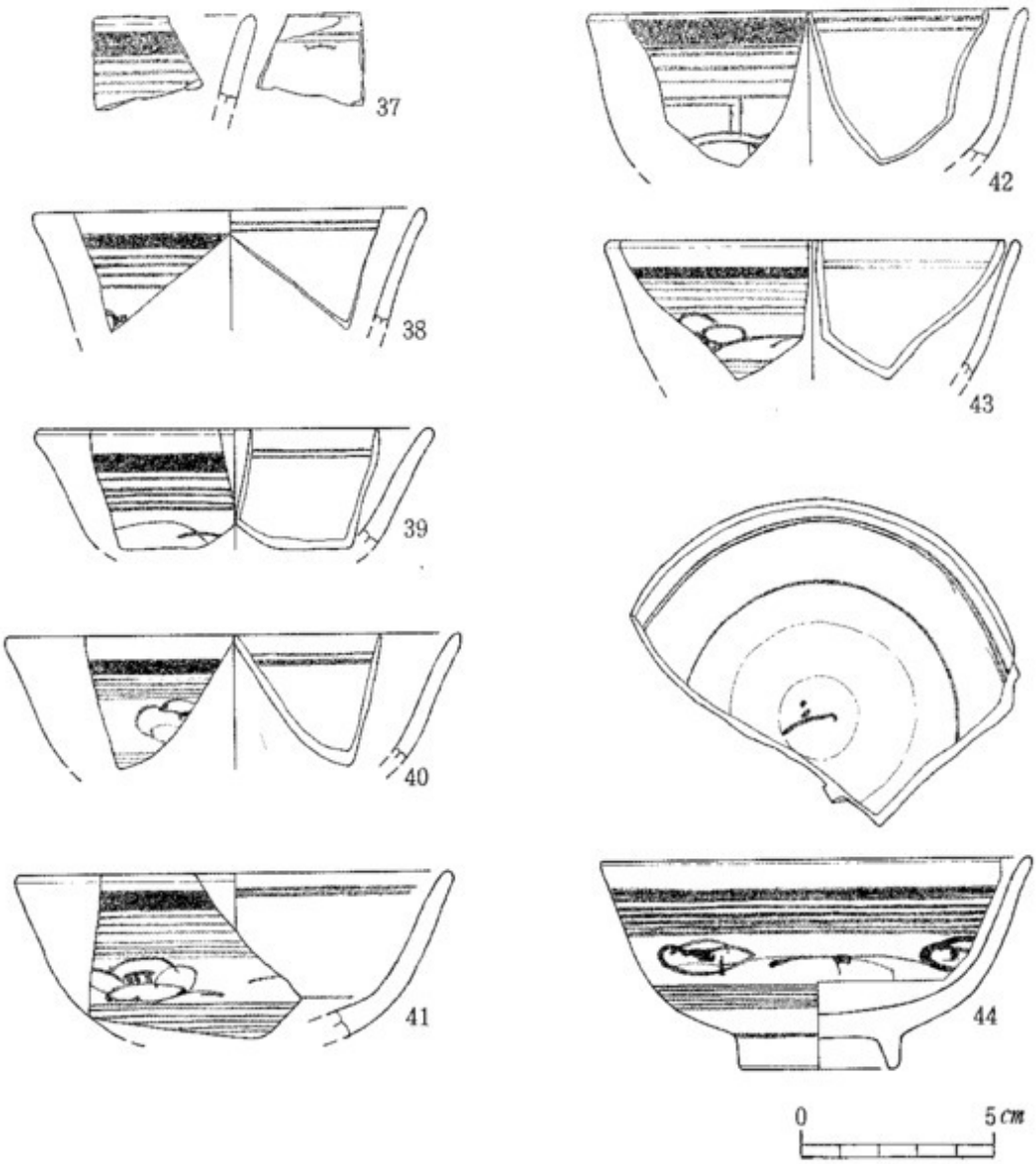
第 11 図　肥前系磁器実測図(1)



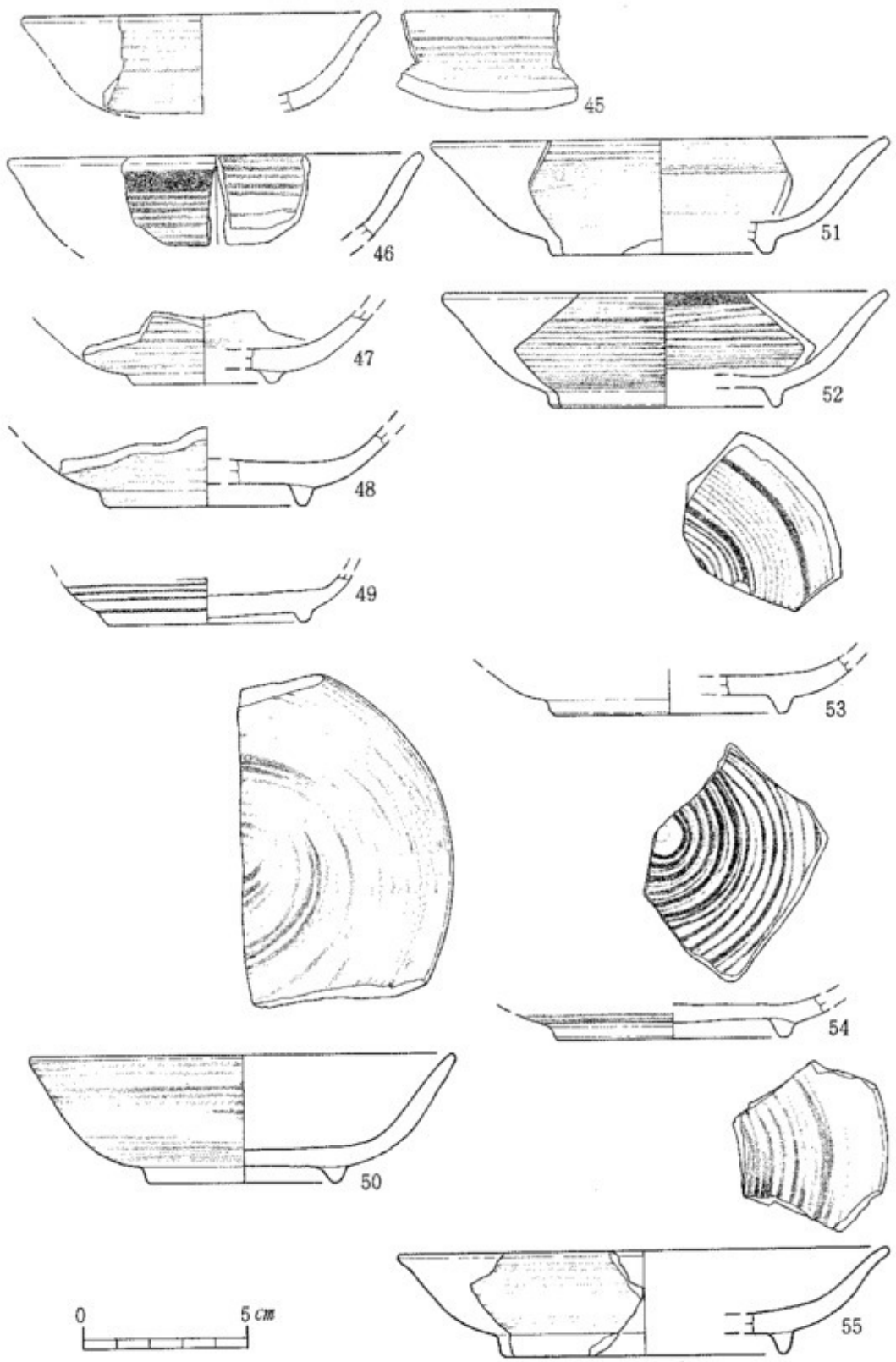
第12図　肥前系磁器実測図(2)



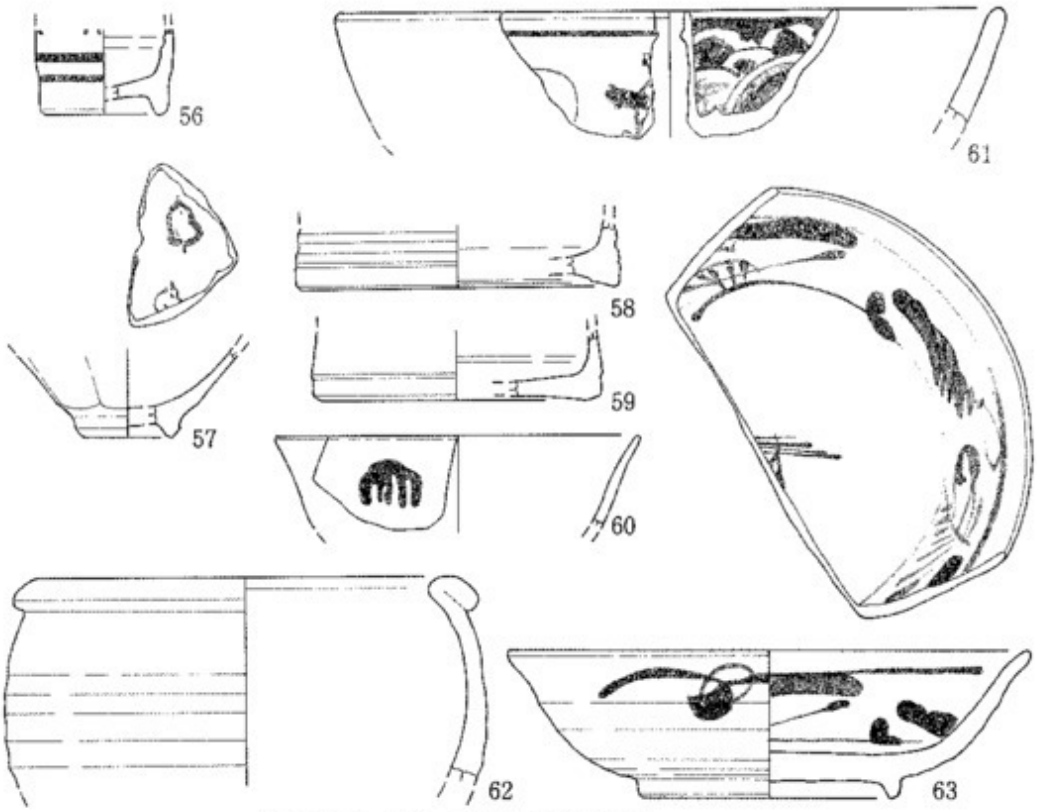
第13図　肥前系磁実測図(3)



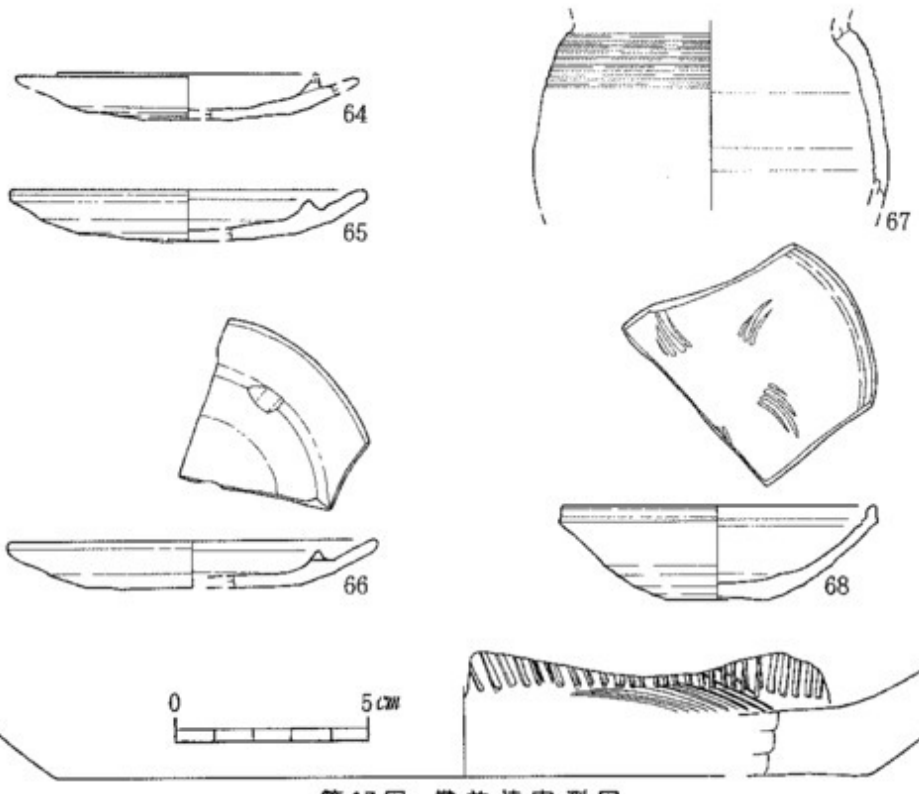
第 14 図　肥前系磁器（砥部焼）実測図(4)



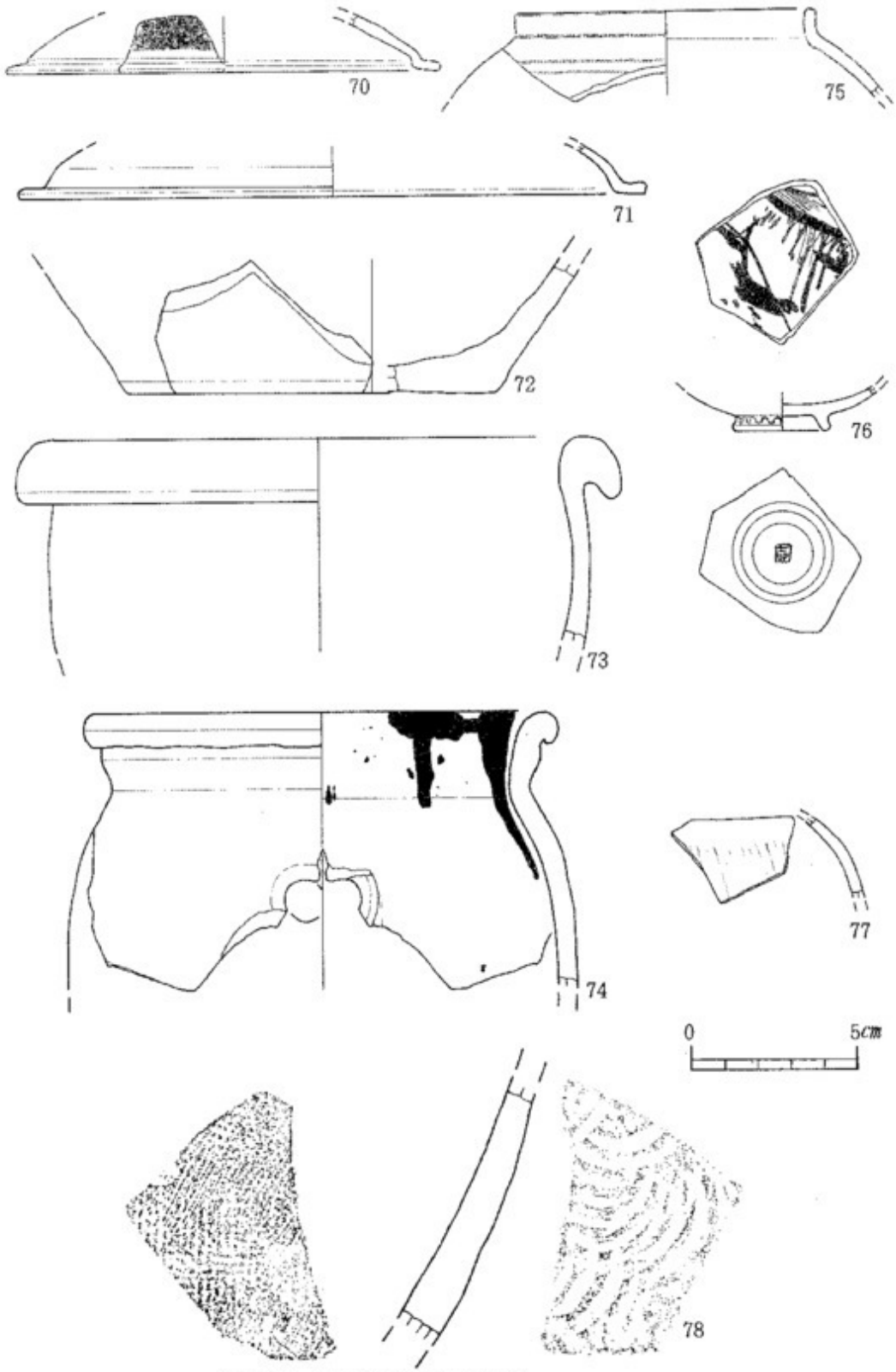
第 15 図　瀬戸・美濃系陶器実測図



第16図　瀬戸・美濃系陶磁実測図



第17図　備前焼実測図



第18図　その他の陶磁器実測図

備前焼には、皿（灯明皿）、壷、擂鉢等が出土している。灯明皿は4点出土しており、内面に低い凸帯をもつもの（64・66）と、内面にカキ目を入れるもの（68）がある。

④ 西播系陶器[註13]

西播系陶器と呼ばれるものの甕が2点出土している。破片が小さく、全体像は不明であるが、外面にはトビガンナを行い、褐色の釉を環状にめぐらす。

⑤ その他の陶磁器

外面に櫛目文をもつ磁器（72）、白色の釉に界線をもつ壷（73）や壷の底部（74）が出土している。

高松城以前の遺物

(78) は須恵器の甕の体部片である。外面は不鮮明な格子目叩き、内面は同心円である。色調は青灰色である。他の場所からの混入遺物であると思われる。

第2節 瓦

瓦は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・小菊瓦・塀瓦・桟瓦・不明瓦等が出土している。全体に摩耗が著しく、全体の様相がわかるものは少ない。ここでは代表的なもののみ取り上げて特徴を挙げてみたい。

① 軒丸瓦

2点を図化した。いずれも巴文軒丸瓦である。(7)は珠文が、復元では12存在すると思われ、尾が長く伸びるものである。(8)も同様に復元で、珠文が12存在すると思われ、尾はより太く短い。

② 軒平瓦

4点を図化した。瓦頭の文様はすべて唐草文であるが、(10)が囲み線で文様が形成されているのに対し、(9・11)はしっかりした線で、唐草は短く・文様を形成している。

③ 丸瓦

4点を図化した。いずれも小片である。外面は篦によるナデ調整を行い、内面は粗い布目痕が顕著に残る。一部(14)のように布目痕を切るようにして、内叩き痕が入るものも見られる。

④ 小菊丸

6点を図化した。（1～3）は16葉、（4～6）は12葉の花弁をもつ。花弁の形態は、連なるものは（6）のみで、他は単弁である。また、花弁は16葉のものと12葉のもので形態が異なり、16葉のものの方が細い文様となっている。

第3節　金属器

出土している金属製品は、銅製品・鉄製品である。量は多くない。

①　銅製品

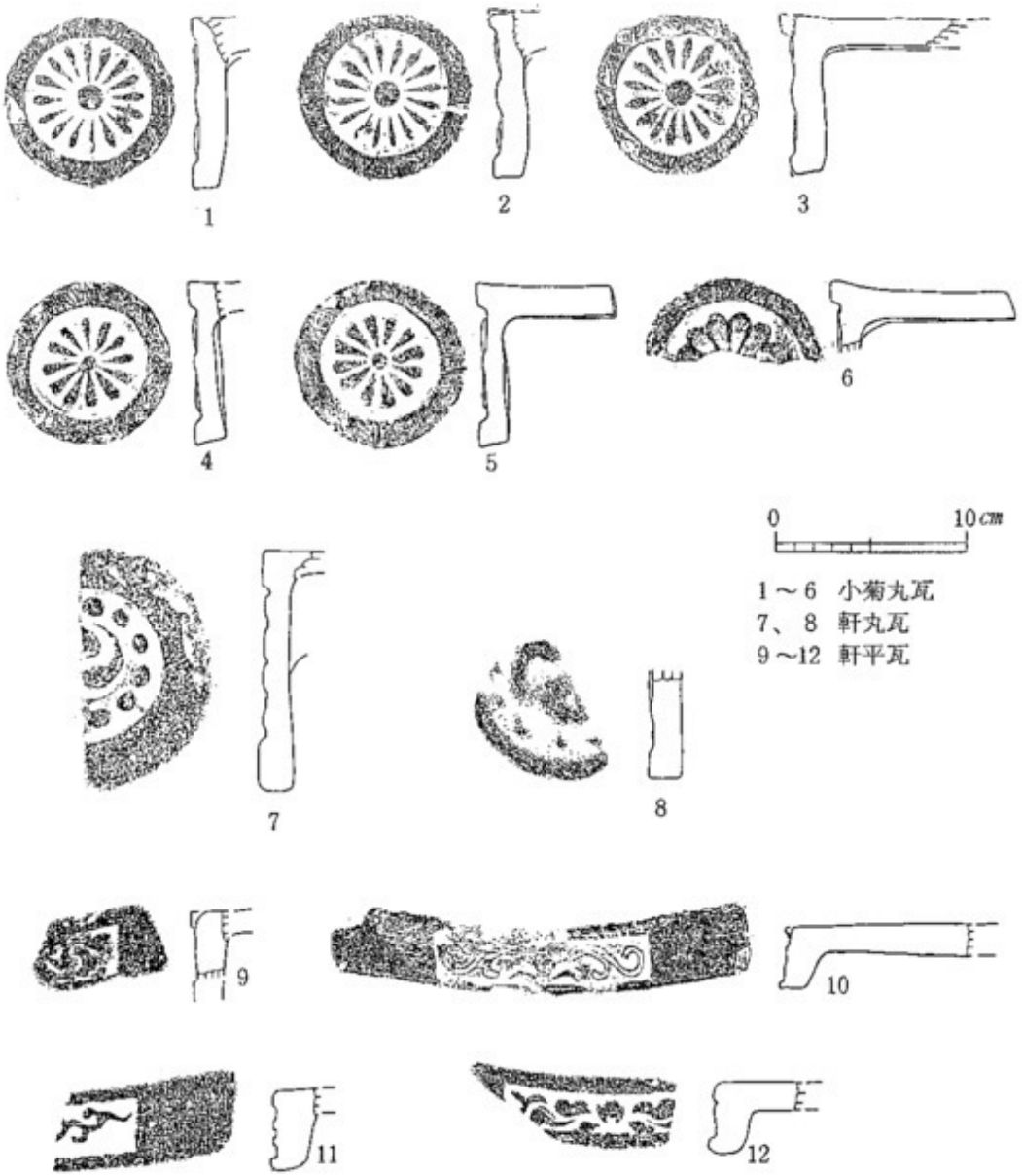
出土した銅製品は、水手御門周辺に限られる。もとは水手御門に使用されていたものと思われる。銅製品の大半は鋲である。鋲の形態的な特徴は、鋲の横断面が正方形を呈することである。以下に鋲の計測値を示す。

番号	全長（残存長）	番号	全長（残存長）	番号	全長（残存長）	番号	全長（残存長）	番号	全長（残存長）
1	2.5cm	2	3.0cm	3	—	4	3.15cm	5	（3.2cm）
6	（3.65cm）	7	4.3cm	8	（3.4cm）	9	（4.25cm）	10	（4.3cm）

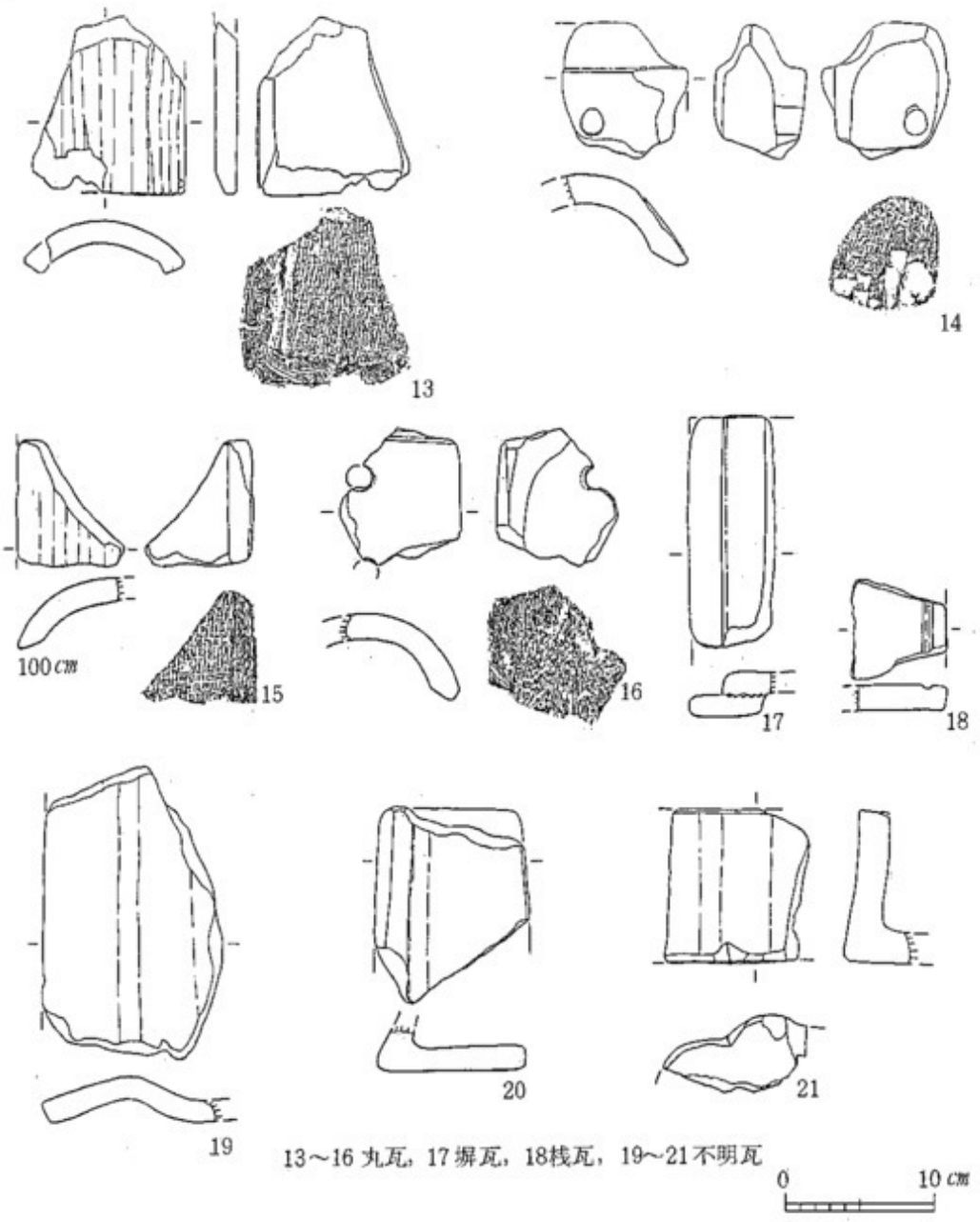
第1表　銅鋲計測表

②　鉄製品

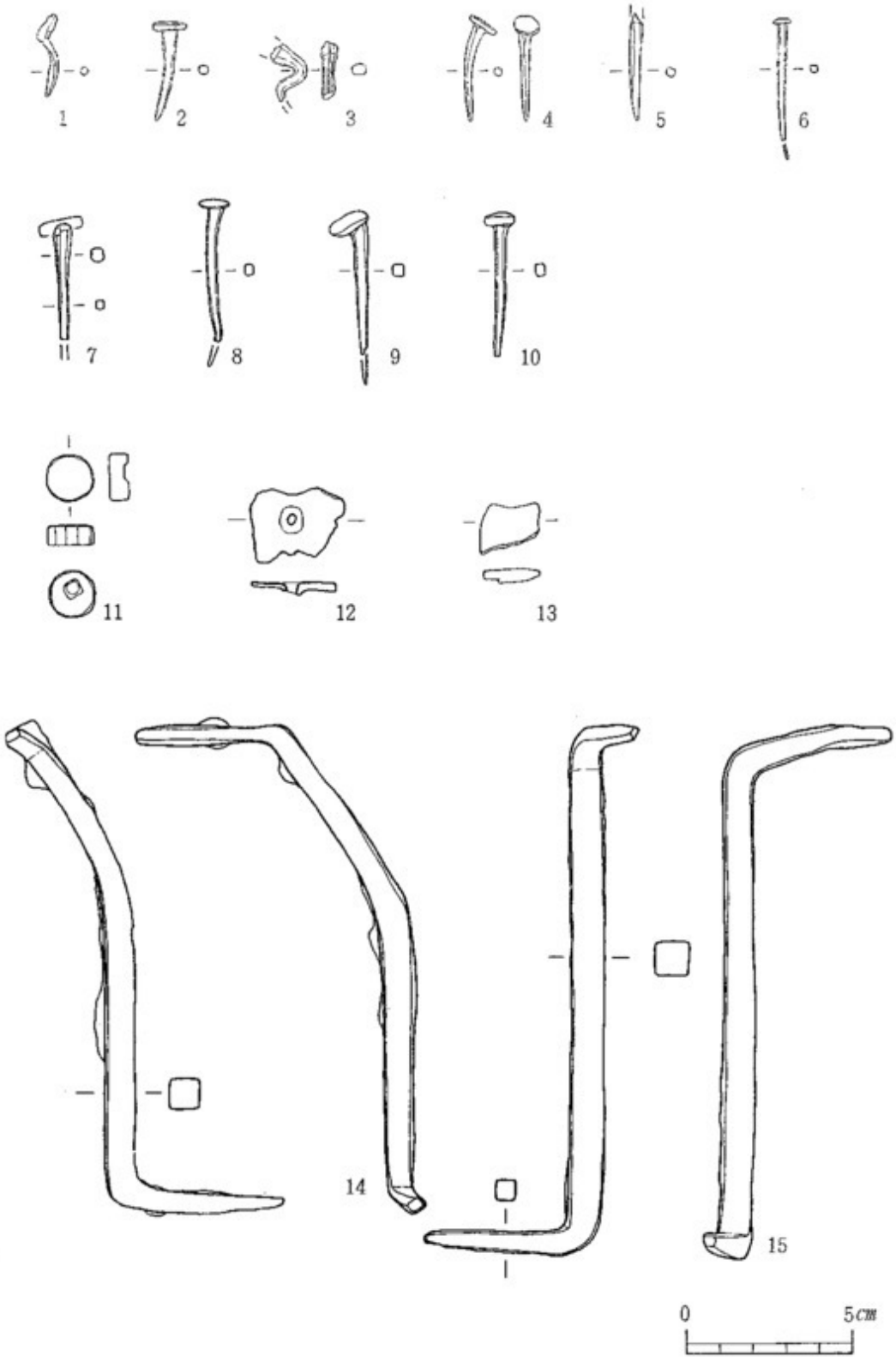
出土している鉄製品は、鏃2点である。いずれも水手御門前からの出土である。錆による腐食が著しい。前述の銅製品同様、水手御門に使用されていたものであろう。



第19図　瓦実測図(1)



第20図　瓦 実 測 図 (2)



第21図　金属器実測図

第2表　出土陶磁器観察表

肥前系陶磁器

番号	器種	法量 ( )cm	形態等	文様・施釉・色調等
1	青磁染付碗			内面：四方襷文 釉：淡緑色 素地：淡灰白色　18C後半
2	染付磁器碗		腰部から丸みをもってたちあがり、口縁部は海手となる。	外面：菊花散らし文 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色　18C後半
3	染付磁器碗蓋	口径(7.8) 底径(3.2) 器高(3.0)	腰部から丸みをもってたちあがり、口縁部は端反りする。	外面：口縁部1条、腰部3条の界線を引き、中に鎧の模様がみられる。 内面：見込に1条の界線、口縁部にくずれた雷文帯を描く。 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色
4	染付磁器碗蓋	口径(8.6) 残存高(1.8)	腰部から丸くたちあがる口縁である。	外面：口縁部に1条の界線を引き、龍の模様を描く。 内面：口縁に2条の界線、その間にくずれた雷文帯を描く。 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色
5	染付磁器小皿	口径(10.0) 残存高(1.6)	口縁部が端反りする	外面：口縁部に1条の界線、その下に不明模様 内面：口縁部に上・下2条の界線、その間に雷文帯 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色
6	染付磁器碗	口径(9.2) 残存高(2.45)	口縁部が端反りする	外面：くずれた矢羽根文？ 内面：口縁部6条の界線 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色
7	染付磁器碗	口径(10.3) 残存高(2.0)	口縁部が端反りする	外面：山水文？ 内面：口縁部に1条の界線、その下に、くずれた雷文帯 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色
8	染付磁器碗	口径(10.0) 残存高(1.9)	口縁部は、丸みをもってたちあがる	外面：口縁部に1条の界線、その下に不明模様 内面：口縁部に2条の界線、その間に、くずれた雷文帯 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色
9	染付磁器碗	口径(10.4) 残存高(2.3)	口縁部が端反りする	外面：口縁部に1条の界線、その下に笹の模様 内面：口縁に2条の界線 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色
10	染付磁器碗	口径(10.0) 残存高(2.1)	口縁部が端反りする	外面：口縁部に1条の界線、その下に松の模様？ 内面：口縁部にやや太い1条と細い1条の界線 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色
11	染付磁器碗	残存高(1.9) 底径(3.6)	腰部から丸みをもってたちあがる	外面：高台に1条、腰部に2条の界線、胴部に草花文？を描く。 内面：見込に1条の界線および不明模様を描く 釉：淡灰青色 素地：淡灰白色
12	染付磁器碗	口径(9.6) 残存高(3.8)	腰部から丸みをもってたちあがり、口縁部は丸くおわる	外面：二重網目文を描く。 釉：灰黄色 素地：灰白色　18C後半
13	染付磁器碗	口径(10.8) 残存高(4.4)	腰部から丸みをもってたちあがり、口縁部は端反りする	外面：口縁部に1条の界線、胴部に松の模様を描く。 内面：口縁部に2条の界線、その間にくずれた雷文帯 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色
14	染付磁器碗	口径(10.6) 残存高(3.3)	腰部から丸みをもってたちあがり、口縁部は丸くおわる	外面：口縁部に1条の界線、胴部に菊花散らしを描く 内面：口縁部に2条の界線 釉：淡灰青色 素地：淡灰白色　19C前半
15	染付磁器碗	残存高(2.8) 底径(4.4)	腰部から丸みをもってたちあがる	外面：高台に1条、腰部に2条の界線、胴部に草文を描く。 内面：松葉？の模様を描く 釉：淡灰青色 素地：淡灰白色 高台畳付は無釉である。
16	染付磁器碗	残存高(3.5) 底径(4.2)	腰部から丸みをもってたちあがる	外面：高台に2条の界線、胴部に格地に梅花文を描く。 内面：見込に1条の界線、中心に寿銘を描く。 釉：淡灰青色 素地：淡灰白色　19C前半

番号	器種	法量（ ）cm	形態等	文様・施釉・色調等
17	染付磁器皿	口径（14.2） 残存高（2.5）	口縁部が輪花状になる	内面：遠山図を描く 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色 口縁部に口紅を施す
18	染付磁器皿	口径（15.0） 残存高（2.7）	口縁部が輪花状になる	内面：不明模様を描く 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色
19	染付磁器皿	口径（14.2） 残存高（3.1）	口縁部が輪花状になる	内面：不明模様を描く 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色 口縁部に口紅を施す
20	染付磁器皿	口径（16.4） 残存高（2.8）	口縁部が輪花状になる	内面：不明模様を描く 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色 口縁部に口紅を施す
21	染付磁器皿	残存高（2.2） 底径（6.4）	高台は蛇ノ目凹形高台であり、高台から内湾ぎみにたちあがる、厚手のつくりである	内面：見込に松の模様を描く 釉：淡灰青色 素地：淡灰白色 高台内側には釉がかからない
22	染付磁器皿	残存高（2.3） 底径（6.5）	高台は蛇ノ目凹形高台であり、高台から内湾ぎみにたちあがる、厚手のつくりである	内面：見込に不明模様を描く 釉：淡灰青色 高台内側には釉がかからない
23	染付磁器皿	残存高（2.4） 底径（6.4）	高台は蛇ノ目凹形高台であり、高台から内湾ぎみにたちあがる、厚手のつくりである	内面：見込に松葉の模様を描く 釉：淡灰青色 素地：淡灰白色 高台内側には釉がかからない
24	染付磁器鉢	残存高（4.9） 底径（16.0）	高台から内湾ぎみにたちあがる胴部をもつ厚手のつくりである	外面：高台と腰部に3条の界線、その間に、○×文　胴部に鋸歯文を描く 内面：波文？を描く 釉：灰青色 高台畳付は無釉である
25	染付磁器皿	——	口縁部は丸みをもってたちあがる	外面：波の模様？を描く 内面：木葉文を描く 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色　19C前半以降
26	染付磁器皿	——	口縁部は丸みをもってたちあがる	外面：松に唐子の模様を描く 内面：口縁部に雷文帯を描く 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色
27	染付磁器歯利	——	腰部から直立ぎみに立ちあがる 内面には、ロクロ痕が顕著に残る	外面：無地 釉：淡灰青色 素地：淡灰白色 神酒徳利？
28	染付磁器瓶	——	頸部～胴部にかけての破片である、内面にはロクロ痕が残る	外面：頸部に3条の界線、その間に山水文を、胴部に草花文？を描く 釉：淡灰青色 素地：淡灰白色
29	染付磁器鉢	口径（17.0） 残存高（4.3）	口縁部は玉縁状になる	外面：口縁部に雷文帯を描く 内面：口縁部、上下2条ずつの界線、その間に雷文帯を描く
30	染付磁器豆猪口	——	腰部から内湾ぎみにたちあがる胴部をもつ	外面：高台に1条の界線、胴部に2条の界線、その間に蕉弁文、その上に鹿子文を描く 内面：見込部に2条の界線、松竹梅文を描く高台裏には「成化年製」の銘をもつ 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色　19C
31	染付磁器猪口	——	腰部から直立ぎみにたちあがる胴部をもつ	外面：胴部に1条の界線、草文を描く 内面：上部に横様を描く 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色　19C前半
32	染付磁器油壷	口径（1.6） 残存高（4.8）	張りのある胴部から、急にすぼまり、頸部から直立にたちあがり、口縁部は玉縁状を呈する。内面は、ロクロ痕が顕著に残る。	外面：頸部に1条の界線、胴部にはたこ唐草文を描く 内面：無釉 釉：淡灰青色 素地：灰灰白色　19C前半以降
33	染付磁器白磁小皿	残存高（1.2） 底径（2.8）	三角形の高台をもち、大きく広がる口縁部をもつ	釉：淡灰青色 素地：淡灰白色 高台畳付は無釉である 紅皿の可能性がある
34	染付磁器白磁小皿	残存高（2.6） 底径（6.2）	菊花型打ちの小皿である	釉：淡灰青色 素地：淡灰白色

番号	器種	法量 ( )cm	形態等	文様・施釉・色調等
35	染付磁器 白磁小皿	口径(11.6) 残存高(2.4)	菊花型打ちの小皿である	釉：淡灰青色 素地：淡灰白色
36	染付磁器 青磁香炉	口径(11.0) 残存高(3.4)	口縁部がふくらむ香炉である	釉：緑灰色（外面は全面に施釉、内面は口縁部のみに施釉 素地：灰白色

肥前系磁器（磁郡焼）

番号	器種	法量 ( )cm	形態等	文様・施釉・色調等
37	染付磁器 碗	———	口縁部が端反りする	外面：口縁部に、やや太い1条と、4条の合計5条の界線 内面：口縁部に、2条の界線 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色 19C前半
38	染付磁器 碗	口径(10.0) 残存高(3.1)	口縁部が端反りする	外面：口縁部に、やや太い1条、細い4条の合計5条の界線、その下に梅花文？を描く 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色 19C前半
39	染付磁器 碗	口径(10.0) 残存高(3.1)	口縁部が端反りする	外面：口縁部に、やや太い1条、細い5条の合計6条の界線、その下に梅花文？を描く 内面：口縁部に、2条の界線 釉：淡灰青色 素地：淡灰白色 19C前半
40	染付磁器 碗	口径(11.6) 残存高(3.4)	口縁部が端反りする	外面：口縁部に、やや太い1条、細い5条、その下に3条の界線、界線と界線の間に梅花文を描く 内面：口縁部に、2条の界線 釉：淡灰青色 素地：灰白色 呉須の発色がやや悪い 19C前半
41	染付磁器 碗	口径(11.0) 残存高(4.2)	腰部は丸みをもち、口縁部にむかってたちあがり、口縁部が端反りする	外面：口縁部に、やや太い1条、細い7条、腰部に6条の界線、界線と界線の間に梅花文を描く 内面：口縁部に、2条、見込に1条の界線を描く 釉：淡灰青色 素地：灰白色 19C前半
42	染付磁器 碗	口径(11.2) 残存高(3.9)	腰部は丸みをもち、口縁部にむかってたちあがり、口縁部が端反りする	外面：口縁部に、やや太い1条、細い6条の界線、胴部に亀甲様文を描く 内面：口縁部に、2条の界線を描く 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色 19C前半
43	染付磁器 碗	口径(10.4) 残存高(3.6)	腰部は丸みをもち、口縁部にむかってたちあがり、口縁部が端反りする	外面：口縁部に、やや太い1条、細い6条の界線、その下に現存3条の界線、界線と界線の間に梅花文を描く 内面：口縁部に、2条の界線を描く 釉：淡灰青色 素地：灰白色 19C前半
44	染付磁器 碗	口径(11.0) 器高 (5.4)	高台は、小さめのシャープなもので、高台畳付は、両側から面取りしてある 腰部は丸みをもち、口縁部にむかってたちあがり、口縁部が端反りする	外面：口縁部に、やや太い1条、細い5条の界線、その下に6条の界線、界線と界線の間に梅花文、高台と腰部の境に1条の界線を描く 内面：口縁部に、2条の界線、見込に1条の界線、中心に意味不明の模様を描く 釉：淡灰青色 高台畳付は無釉、見込には蛇ノ目釉はぎを行う 素地：灰白色 内外面に貫入が著しい 19C前半

瀬戸・美濃系陶磁器

番号	器種	法量 ( )cm	形態等	文様・施釉・色調等
45	陶器 皿	口径(10.8) 残存高(3.0)	腰部は丸みをもち、口縁部にむかってたちあがり、口縁部が端反りする	釉：淡黄褐色と濃緑褐色の釉が縞状に分かれる 内面に貫入がみられる 素地：灰褐色
46	陶器 皿	口径(12.4) 残存高(2.7)	腰部は丸みをもち、口縁部にむかってたちあがり、口縁部が端反りする 内面にロクロ痕を残す	釉：淡黄褐色と濃緑褐色の釉が縞状に分かれる 内外面に貫入が著しい 素地：淡灰褐色

番号	器種	法量 ( )cm	形態等	文様・施釉・色調等
47	陶器 皿	残存高(2.1) 底径(4.4)	高台は低く丸い、腰部は丸みをもち、口縁部が端反りすると思われる。 高台は貼り付け高台で、高台内はヘラ削りを行う。	釉：淡黄褐色と濃緑褐色の釉が縞状に分かれる 内外に貫入が著しい 素地：淡灰褐色 高台畳付は無釉である　19C前半以降
48	陶器 皿	残存高(2.0) 底径(6.0)	高台は三角形で、腰部は丸みをもってたちあがる。 高台は貼り付け高台で、高台内はヘラ削りを行う	釉：淡黄褐色と濃緑褐色の釉が縞状に分かれる、 内外に貫入が著しい 素地：淡灰褐色 高台畳付は無釉である　19C前半以降
49	陶器 皿	残存高(1.4) 底径(6.0)	高台は三角形で、腰部は丸みをもってたちあがる。 高台は貼り付け高台で、高台内はヘラ削りを行う。	釉：淡黄褐色と濃緑褐色の釉が縞状に分かれる、 内外に貫入が著しい 素地：淡灰褐色 高台畳付は無釉である　19C前半以降
50	陶器 皿	口径(12.8) 器高(3.9) 底径(5.8)	高台は三角形で、腰部は丸みをもってたちあがり、口縁部は、端反りする。 高台はラフな貼り付け高台であり、高台内はヘラ削りを行う。	釉：淡黄灰色と淡黄褐色の釉が縞状に分かれる、 内外に貫入が著しい 素地：淡灰褐色 高台畳付は無釉である　19C前半以降
51	陶器 皿	口径(13.8) 器高(3.5) 底径(6.6)	高台は逆台形で、腰部は丸みをもち、口縁部が端反りする。 高台は貼り付け高台で、高台内はヘラ削りを行う。	釉：淡黄褐色と濃緑褐色の釉が縞状に分かれる、 内外に貫入が著しい 素地：淡灰褐色 高台畳付は無釉である　19C前半以降
52	陶器 皿	口径(13.4) 器高(3.5) 底径(6.8)	高台は三角形で、腰部は丸みをもち、口縁部が端反りする。 高台は貼り付け高台で、高台内はヘラ削りを行う。	釉：淡黄褐色と濃緑褐色の釉が縞状に分かれる、 素地：淡灰褐色 高台畳付は無釉である 19C前半以降
53	陶器 皿	残存高(1.8) 底径(6.8)	高台は逆台形で、腰部は丸みをもってたちあがる。 高台は貼り付け高台で、高台内はヘラ削りを行う。	釉：淡黄褐色と濃緑褐色の釉が縞状に分かれる 内外に貫入が著しい 素地：淡灰褐色 高台畳付は無釉である　19C前半以降
54	陶器 皿	残存高(1.2) 底径(7.0)	高台は逆台形で、腰部は丸みをもってたちあがる 高台は貼り付け高台で、高台内はヘラ削りを行う。	釉：淡黄褐色と濃緑褐色の釉が縞状に分かれる 素地：淡灰褐色 高台畳付は無釉である　19C前半以降
55	陶器 皿	口径(14.8) 器高(3.2) 底径(8.4)	高台は三角形で、腰部は丸みをもち、口縁部は、端反りする。 高台は貼り付け高台で、高台内はヘラ削りを行う。	釉：淡黄褐色と濃緑褐色の釉が縞状に分かれる 内外に貫入が著しい 素地：淡灰褐色 高台畳付は無釉である　19C前半以降
56	陶器 香利	残存高(2.2) 底径(3.0)	高台は逆台形で、畳付は丸い、腰部は丸みをもち口縁部にむかって直立ぎみにたちあがる 高台は貼り付け高台である。内面は、ロクロ痕が顕著に残る。	外面：腰部に2条の界線、その上に横様を描く 釉：灰白色の釉が外面全体に厚くかかっている 素地：淡灰白色 高台畳付は無釉である　神酒徳利？
57	陶胎染付小杯	残存高(2.3) 底径(2.3)	高台は、半円形の高台で、腰部で屈曲し、斜上方にのびる。胴部は8角形に面取りしてある。 高台は貼り付け高台で、高台外面と畳付は面取りしてある。	内面：青色の呉須で小鳥？を2羽描いてある 釉：外面には胴部に緑灰色の釉がかかり、内面には淡灰白色の釉がかかる 内面には貫入が著しい 素地：外面は灰褐色、断面は濁灰色 腰部から下は無釉である
58	陶器 壷底部？	残存高(1.6) 底径(8.0)	削り出しの高台から直立してたちあがる胴部をもつ、高台外面に2条の凹線がみられる。	釉：外面上部端に、淡緑灰色の釉がかかる他は無釉 素地：灰白色
59	陶器 壷底部？	残存高(1.8) 底径(6.8)	高台から直立してたちあがる胴部をもつ、高台は、内部が削りによって凹む高台である、内面はロクロ痕が残る。	釉：外面は、胴部に、濁灰青色の釉を、内面は透明の釉がかかる 素地：濁灰白色
60	染付磁器碗	口径(9.3) 残存高(2.4)	腰部は丸みをもち、口縁部は端反りする。	外面：不明模様を描く 釉：やや青味をもった灰色 素地：淡灰白色 口縁部に口紅を施す
61	陶胎染付皿or盤	口径(17.0) 残存高(3.3)	内湾ぎみにたちあがる口縁部で端部は丸くおわる。	外面：口縁部に1条の界線、胴部に模様を描く 内面：口縁部から胴部に波の模様を描く 釉：淡灰白色 内外面には貫入が著しい 素地：淡灰白色
62	灰釉陶器壷？	口径(10.3) 残存高(5.4)	胴部中央から内湾し、口縁は、外側に折返して玉縁状となる、外面、胴部にロクロ痕が残る。胴部下位はヘラ削りを行う。	釉：内外面に緑灰色の釉をかける 内外面は貫入が著しい 素地：濁灰白色(胎土は砂粒が粗い)
63	陶胎染付皿	口径(13.4) 器高(3.8) 底径(6.2)	三角形の高台から、丸みをもちながら腰部で屈曲し、口縁部は端反りする。高台は貼り付け高台で、高台内は蛇ノ目状にヘラ削りされている。腰部から胴部にかけて外面にロクロ痕が明瞭に残る。	外面：唐草文？ 内面：2条の界線、その間に不明模様、見込に寿？のくずれた模様が描かれている 釉：内外面に淡緑灰色の釉をかける 内外面には貫入が著しい 高台畳付は無釉である

備前焼

番号	器種	法量 ( )cm	形態等	文様・施釉・色調等
64	陶器 灯明皿		内面に凸帯をめぐらし、内面はナデ、外面はヘラ削りを施す。	素地：淡褐灰色 鉄釉を施す
65	陶器 灯明皿	口径(9.0) 器高(1.3)	内面に凸帯をめぐらし、内面はナデ、外面は、ヘラ削りを施す。	素地：淡褐灰色 胎土は細かい砂粒を含む 鉄釉を施す
66	陶器 灯明皿	口径(9.4) 器高(1.2)	内面には凸帯をめぐらし、凸帯上に抉り、外面は、ヘラ削りを施す。	素地：赤灰褐色 胎土は細かい砂粒を含む 鉄釉を施す
67	陶器 甕	———	甕の胴部片である、外面頸部ちかくに7条の沈線が入る。胴部下半ヘラ削り、内面ロクロナデを行う。	素地：淡褐灰色 胎土は細かい砂粒を含む 外面に鉄釉を施す
68	陶器 灯明皿	口径(8.0) 器高(2.4) 底径(2.6)	糸切り底の底部をもち、斜上方にたちあがる口縁部をもつ、内面見込には3条1単位のカキ目を5単位施す、内面にはロクロ成形を施す。	素地：淡褐灰色 無釉 外面底部近くに火襷が認められる
69	陶器 擂鉢	残存高(3.2) 底径(21.0)	底部から屈曲して斜上方にのびる体部をもつ、内面には細かいカキ目、見込にも、9条1単位のカキ目が観察される。	素地：赤灰褐色 胎土は細かい砂粒を多量に含む

その他の陶磁器

番号	器種	法量 ( )cm	形態等	文様・施釉・色調等
70	西播系陶器 蓋	口径(12.9) 残存高(1.7)	口縁部を外側に拡張する蓋である。 外面にはトビガンナによる陰刻がみられる。	素地：淡灰黄色 釉：外面に鉄釉を帯状に施す
71	西播系陶器 蓋	口径(19.0) 残存高(1.5)	口縁部を外側に拡張する蓋である。	素地：明灰褐色 釉：外面に鉄釉を帯状に施す
72	陶器 底部	残存高(4.0) 底径(11.0)	底部から斜方向にたちあがる胴部をもつ。	素地：茶褐色 釉：暗緑灰色の釉を外面に施す
73	陶器 鉢	口径(15.6) 残存高(6.4)	胴部は内湾ぎみにたちあがり口縁部で外側に折返す。	釉：内外面に淡緑灰色の釉を施す 素地：褐灰白色
74	土師器 蛸壺	口径(9.6)	胴部は内傾し、頸部は直立してたちあがり口縁部は端部で折返し玉縁状となる。 胴部中央より上に穿孔あり	色調：淡灰橙色 胎土：1～2㎜大の長石、石英粒を多量に含む 内面上部に墨付着
75	壺	口径(10.0) 残存高(2.0)	頸部から口縁部が直立してたちあがる壺	外面：黒緑色の3条の界線 釉：黄白色の釉を施す 素地：褐灰黄色
76	染付磁器 皿	残存高(1.2) 底径(2.6)	外側にふんばる小さな高台をもち、屈曲して斜横方向に開く	外面：高台に波文、高台内に「寿」銘を描く 内面：見込に風景図を描く 釉：青味をもった淡灰色 素地：淡灰白色
77	陶器 土瓶？	———	薄手で外面にトビガンナで櫛目文を施す。	釉：外面に淡緑灰色の釉を施す 素地：褐灰白色
78	須恵器 甕	———	甕の体部片である、外面には不鮮明な格子目叩き、内面は同心円文が残る	色調：暗灰青色 胎土：1㎜大の砂粒を含む

第3表　出土瓦観察表

小菊丸瓦

番号	直径・厚さ（　）cm	内　区（　）cm	外　区	周　縁（　）cm	成形・調整等	備　考
1	直　径9.1 厚　さ2.1	珠　径1.3	花弁数16	幅　1.0 高さ0.3	周縁部はナデ調整を施している。 裏面は、軽いナデ調整を施し、下方周縁部に半円状のナデ調整を施している。 瓦当と体部の接合部は、粘土を補充して接合し、後ナデ調整を施す。	色調　淡黒灰色 胎土　精良 焼成　良好
2	直　径9.0 厚　さ1.6	珠　径1.3	花弁数16	幅　1.2 高さ0.4	周縁部はナデ調整を施している。 裏面は、軽いナデ調整を施し、下方周縁部に半円状のナデ調整を施している。 瓦当と体部の接合部は、粘土を補充して接合し、後ナデ調整を施す。	色調　淡黒灰色 胎土　精良 焼成　良好
3	厚　さ1.8	珠　径1.4	花弁数16	幅　1.1 高さ0.3	周縁部は、ナデ調整を施している。 裏面は、軽いナデ調整を施し、下方周縁部に半円状のナデ調整を施している。 瓦当と体部の接合部は、下方からの粘土で接合し、後ナデ調整を施す。	色調　淡黒灰色 胎土　精良 焼成　良好
4	直　径8.5 厚　さ2.1	珠　径0.7	花弁数12	幅　1.2 高さ0.4	周縁部は、ナデ調整を施している。 裏面は、軽いナデ調整を施し、下方周縁部に半円状のナデ調整を施している。 瓦当と体部の接合部は、縦方向に櫛目を施し、下方からの粘土で接合し、後ナデ調整を施す。	色調　黒灰色 胎土　精良 焼成　良好
5	直　径8.6 厚　さ1.5	珠　径0.8	花弁数12	幅　1.2 高さ0.5	周縁部は、ナデ調整を施している。 裏面は、軽いナデ調整を施し、下方周縁部に半円状のナデ調整を施している。 瓦当と棒状の体部との接合部は、回りを多めの粘土で補充して接合し、後ナデ調整を施す。	色調　黒灰色 胎土　精良 焼成　良好
6	厚　さ0.9	——	花弁数12 （復元）	幅　1.0 高さ0.5	周縁部は、ナデ調整を施している。 裏面は、軽いナデ調整を施す。 瓦当と体部との接合部は、下方と横方向からの粘土で補充して接合し、後ナデ調整を施す。	色調　黒灰色 胎土　精良 焼成　良好

軒丸瓦

番号	直径・厚さ（　）cm	内　区（　）cm	外　区（　）cm	周　縁（　）cm	成形・調整等	備　考
7	直　径10.7 厚　さ1.8	径　4.4 巴巻　左 巴長　1/2周 巴頭径1.2	幅　1.7 珠数(復元)12 珠径　1.0	幅　2.7 高さ0.2	周縁部は、ナデ調整を施し、裏面は、軽いナデ調整を施す。	色調　黒灰色 胎土　精良 焼成　良好 全体に摩耗が著しい
8	厚　さ2.3	巴巻　左 巴長　1/3周 巴頭径1.0	幅　1.8 珠数(復元)12 珠径　0.8	幅　1.5 高さ0.2		色調　淡黒灰色 胎土　精良 焼成　良好 全体に摩耗が著しい

軒平瓦

単位（　）cm

番号	文様区幅	周縁高	上周縁幅	下周縁幅	脇周縁幅	文様・成形・調整等	備　考
9	2.5	——	0.8	0.4	——	唐草はしっかりした線で、短く文様を形成している。	色調　暗灰色 胎土　精良 焼成　良好
10	2.5	0.2	0.7	0.4	——	唐草は囲み線で、三葉及び2回反転する文様である。	色調　黒灰色 胎土　精良 焼成　良好
11	2.2	0.4	0.6	0.6	5.2	唐草は、三葉及び3回反転する文様である。	色調　黒灰色 胎土　精良 焼成　良好 全体に摩耗が著しい
12	——	0.3	0.9	0.7	——	唐草は、三葉及び3回反転するものの、線が面に近くなり、文様も模式的である。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　良好 全体に摩耗が著しい

第5章　調査のまとめ

最後に、今回の調査によって、明らかになった点を列挙することによりまとめに替えたい。

(1) 遺構について

① 残存状況は良好ではなかったが、水手御門にともなう階段遺構を検出したことにより、城が本来の機能を有していた時代には、この階段状遺構から、直接海へ出入りできるようになっていたものと考えられる点は、今回の大きな成果である。

② 水手御門西側において検出した褐色砂層は、水手御門周辺部のみの検出である。明治時代に撮影された水手御門周辺の写真に砂浜が写っている。検出した砂浜が写真の砂浜に相当すると思われ、水城としての高松城の姿を復元する資料を得たことは貴重な成果であった。

(2) 遺物について

今回の調査において出土した遺物は、コンテナに8箱程度であったが、大半は陶磁器類であった。産地別にみれば、肥前系磁器、砥部焼、瀬戸・美濃系陶磁器、備前焼、西播系陶器などがあり、時代については18世紀後半から幕末・明治初期頃までと考えられ、19世紀後半を中心とするものが大半を占める。

19世紀以降、焼物は多くの産地において生産される。今回の調査によっても、砥部焼、西播系陶器等が確認されたことは、その一端を知る手がかりとなった。また、肥前系磁器の増加もさることながら、瀬戸・美濃系陶器の増加、特に第15図に示した陶器の皿が多量に出土していること、今回検出した砂浜が幕末～明治初期頃と考えられる点等は、明治期以降になると瀬戸・美濃系陶磁器が増加する広島城の調査例[註14]とあわせて考えると興味深い。ただ、遺物量も少なく、明確な遺構からの出土でない点などから今回の傾向が、他の同時期の遺跡と合ってくるか、今後の課題としたい。

最後に今回の調査地区において検出された遺構は公園整備に組み込まれ、現状のまま、保存・復元し、文化財として活用される予定である。

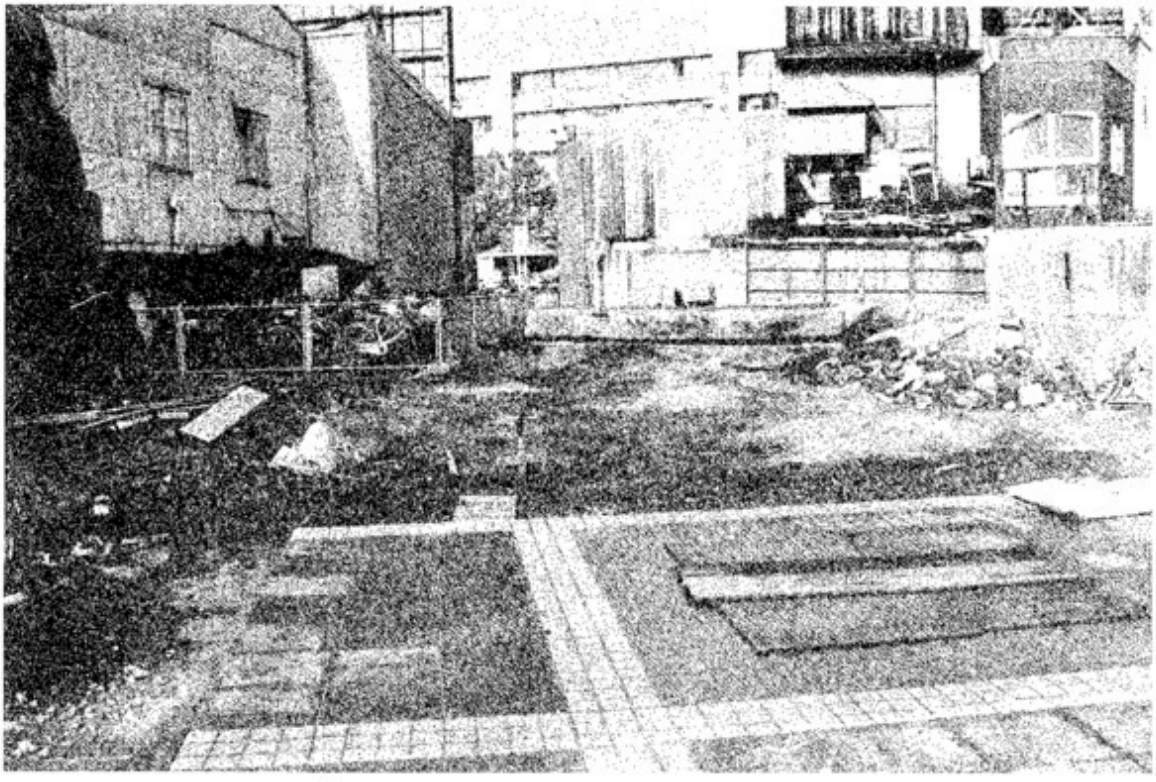
註 1.　高松市教育委員会　『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報 1 』
１９８８.　３
註 2.　香川県教育委員会　「国道バイパス建設に伴う発掘調査概報」『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和６３年度』
註 3.　香川県教育委員会　「谷・長池遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成元年度』
１９９０.　３
註 4.　註 3.文献に所収
註 5.　香川県教育委員会　「上天神遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和５９年度～昭和６２年度』　１９８８.　３
註 6.　京都帝国大学文学部考古学研究報告　第 16 冊『讃岐高松石清尾山積石塚の研究』
註 7.　注 2.文献に所収
註 8.　注 2.文献に所収
註 9.　谷・長池遺跡、谷・松ノ木遺跡、四原遺跡など
註 10. 香川県教育委員会　『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』　１９８７.　３
註 11. 高松市　『重要文化財高松城二之丸修理工事報告書』　１９５７.　３
註 12. 現在、砥部町において操業している梅山窯付属の資料館において実現、上原窯産であるらしいその他にも砥部の資料が含まれていると思われるが、現段階では不明
東広島市教育委員会　『荒谷土居屋敷跡発掘調査概報』　１９８１.　３
註13. 兵庫県教育委員会　『明石城Ⅱ』　１９８６
註14. 広島市教育委員会　『史跡広島城跡二の丸第一次発掘調査報告』　１９８８.　３
広島市教育委員会　『史跡広島城跡二の丸第二次発掘調査報告』　１９８９.　３

その他の参考文献

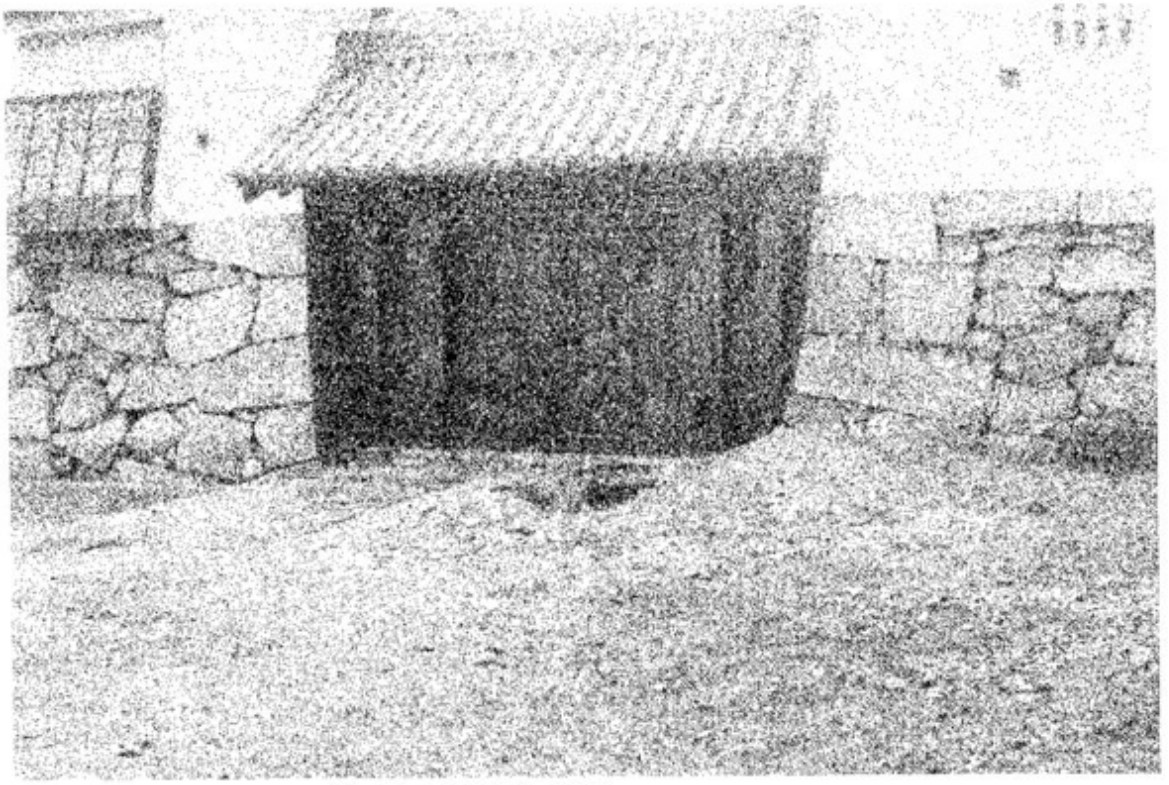
平凡社　『別冊太陽　日本の心６３　古伊万里』　１９８８.　１０
兵庫県立博物館　『特別史跡姫路城跡』　１９８４.　３
徳島県教育委員会　『本州四国連絡橋建設に伴う大毛島地区埋蔵文化財発掘調査報告（上・下）』　１９８８.　３

図　　版

(1) Ⅰ区 調査前状況

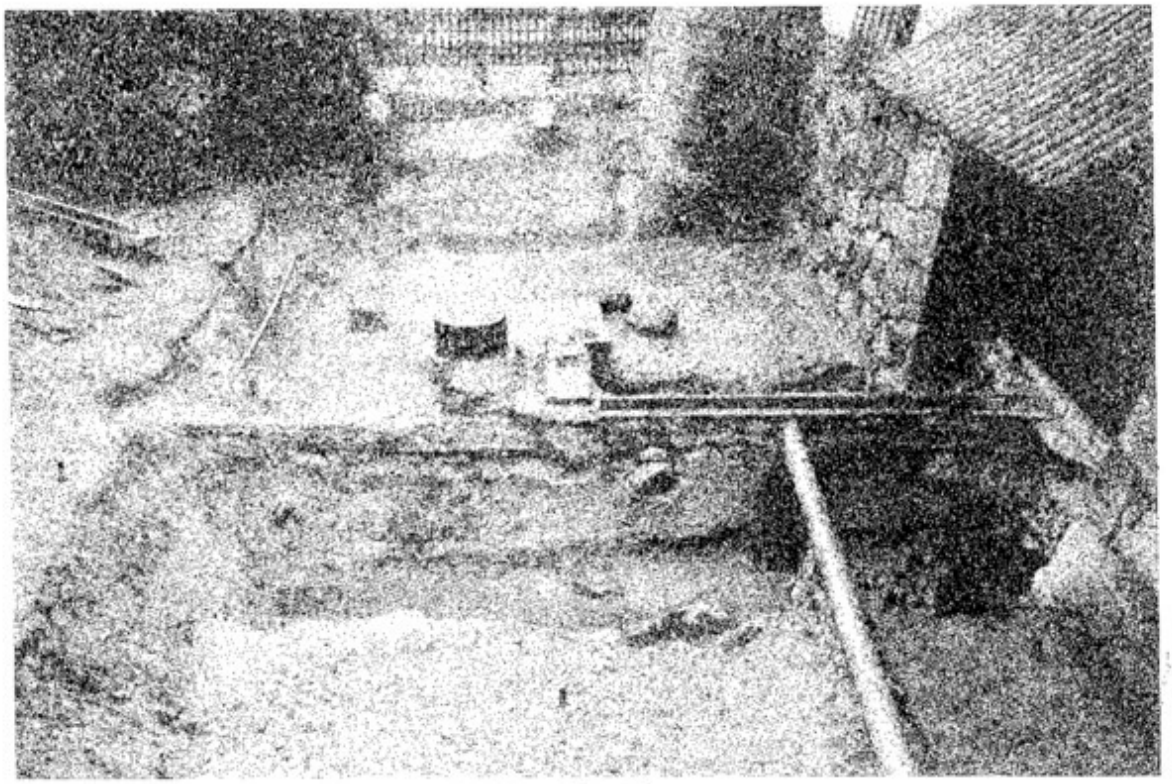


(2) Ⅳ区 調査前状況

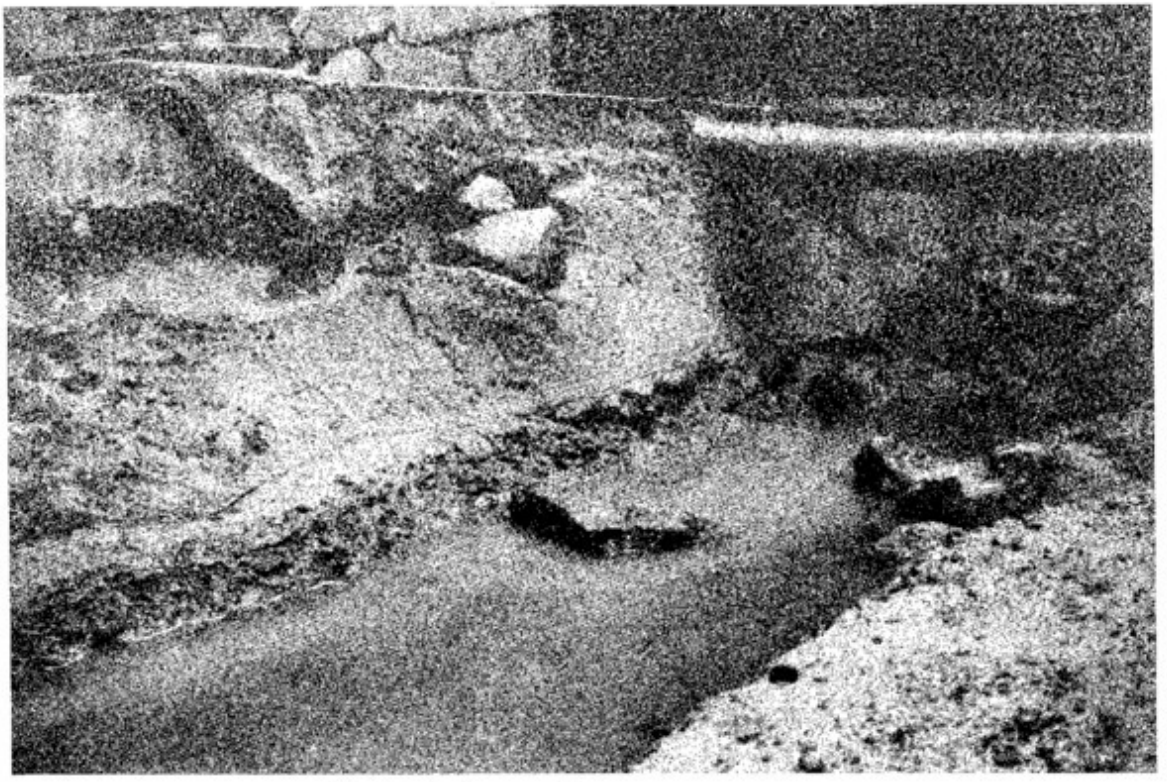


(1) Ⅱ区 調査前状況

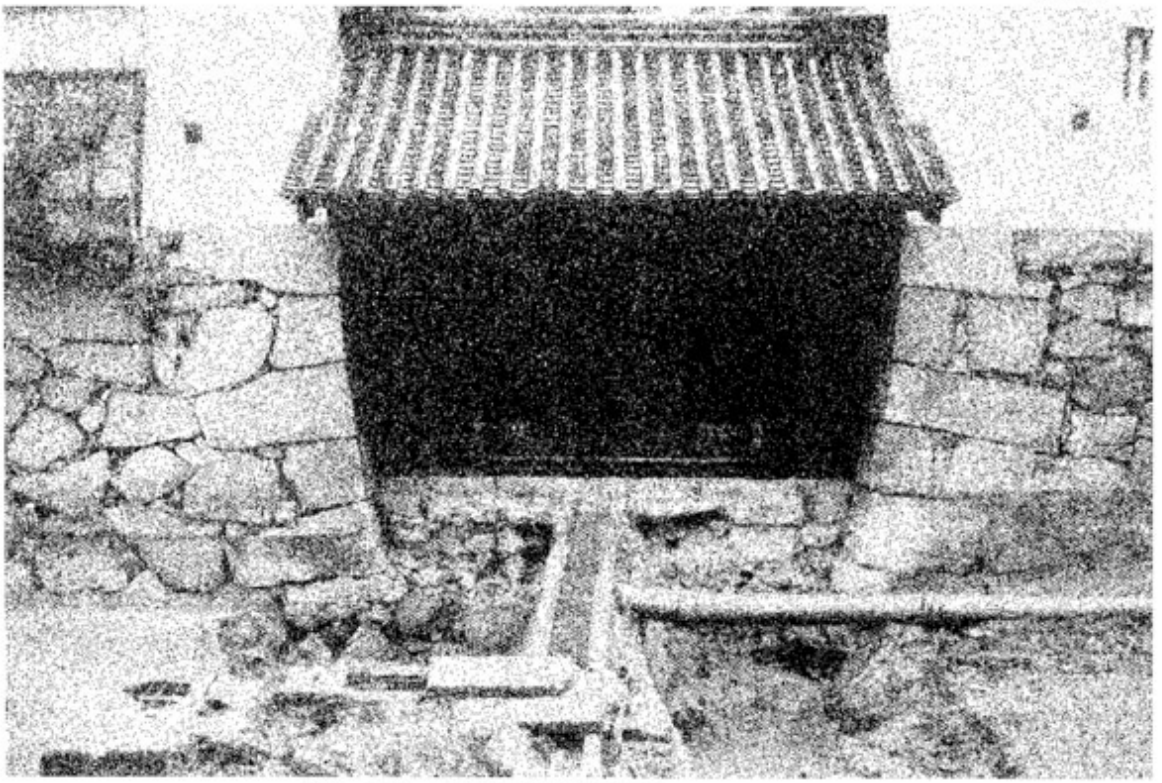
(2) Ⅲ区 調査前状況



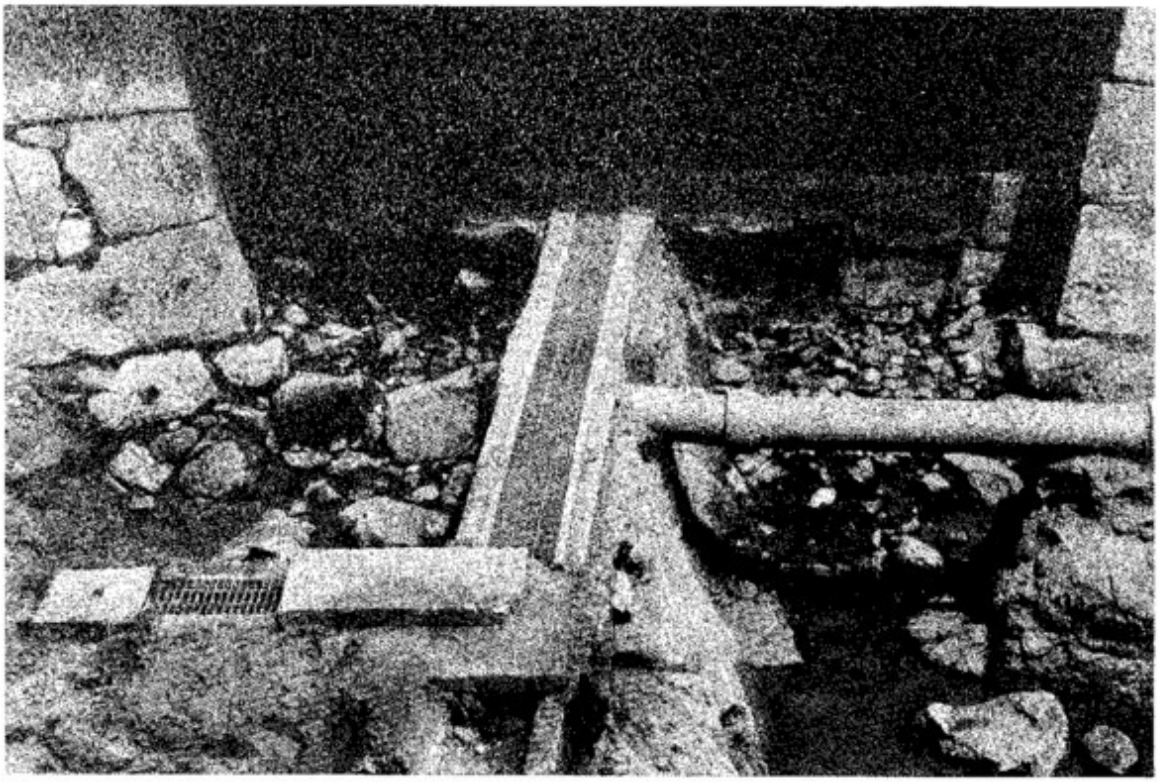
(1) Ⅱ区　完掘状況（南から）



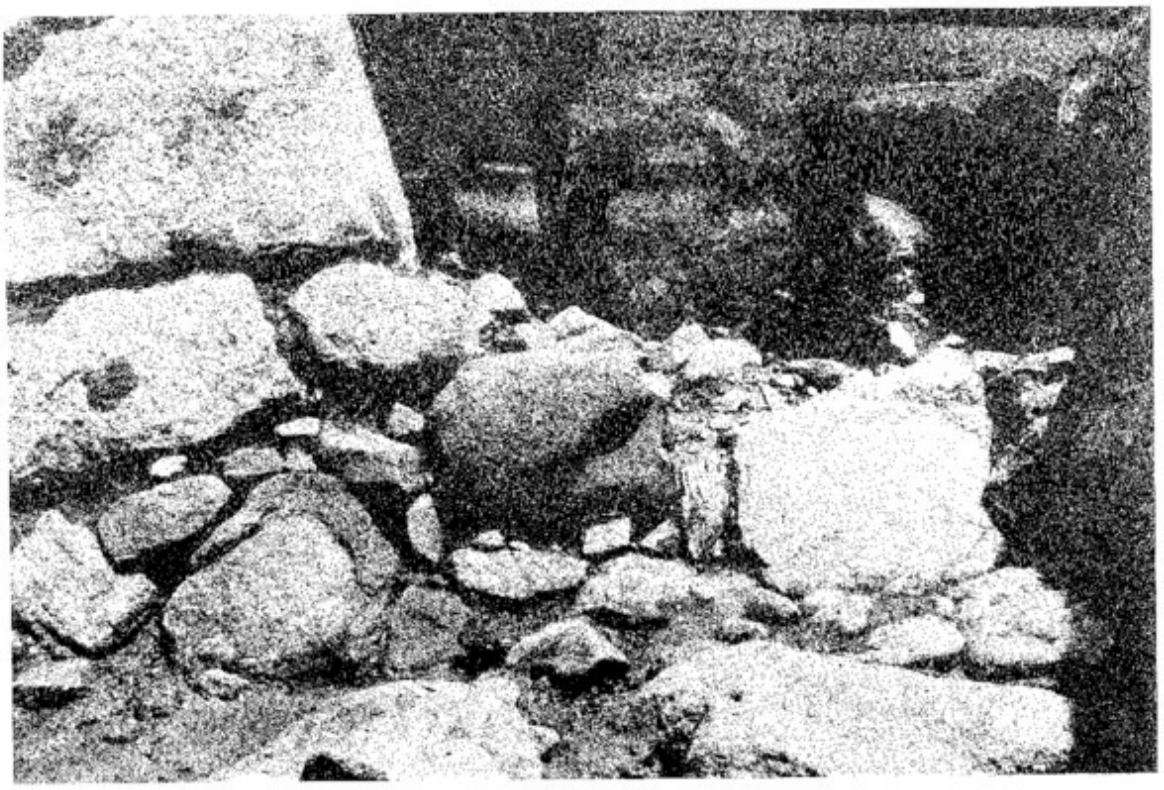
(2) Ⅱ区　土　　層



(1)　Ⅱ区　水手御門前階段完掘

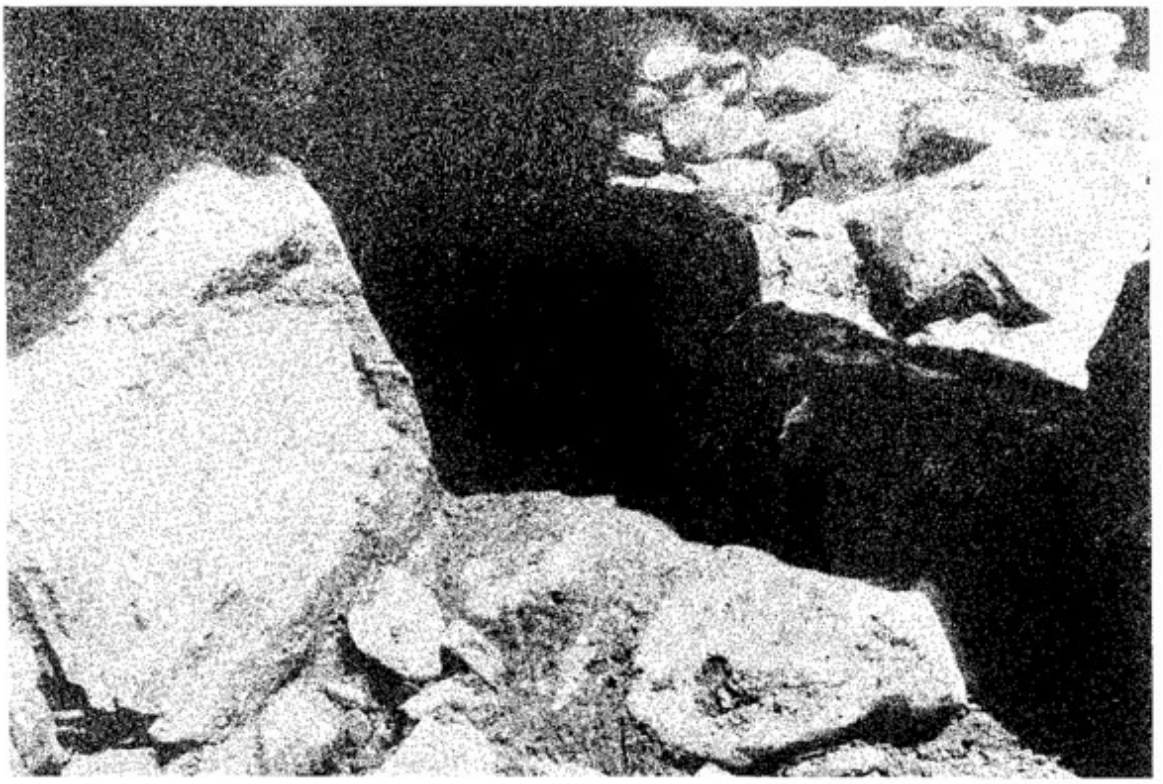


(2)　Ⅱ区　水手御門前階段完掘拡大

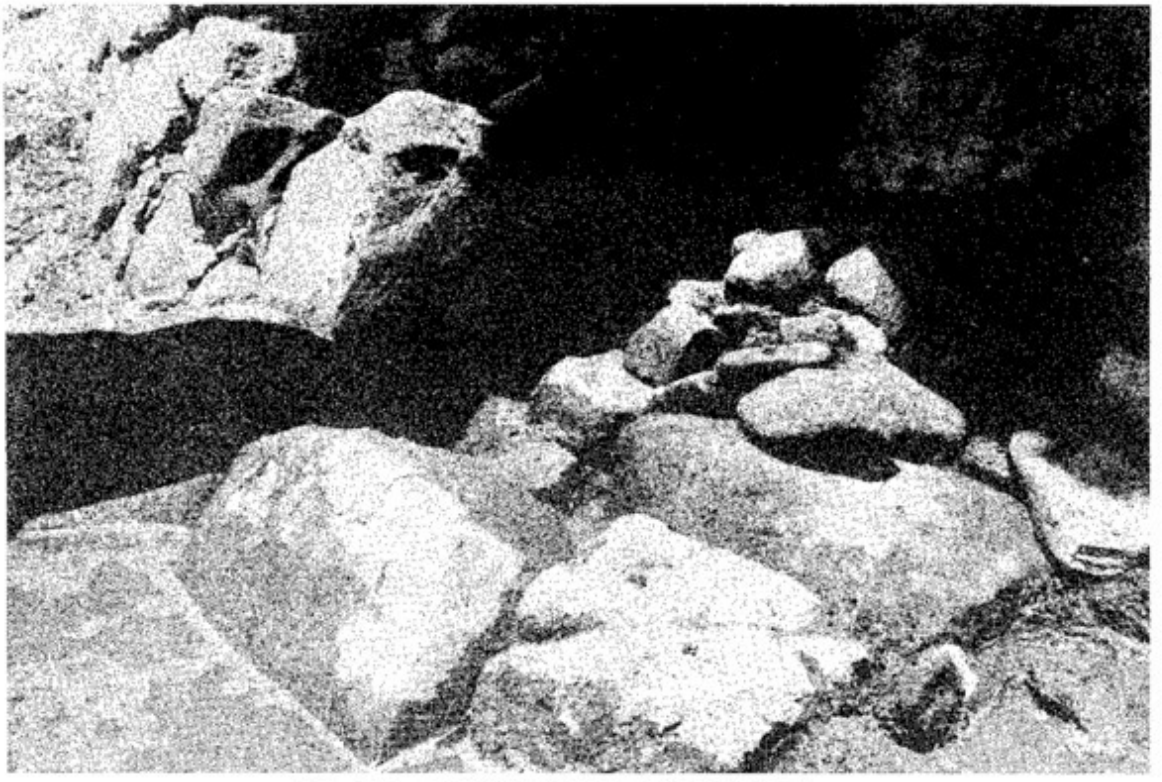


(1)　Ⅱ区　水手御門前階段北側

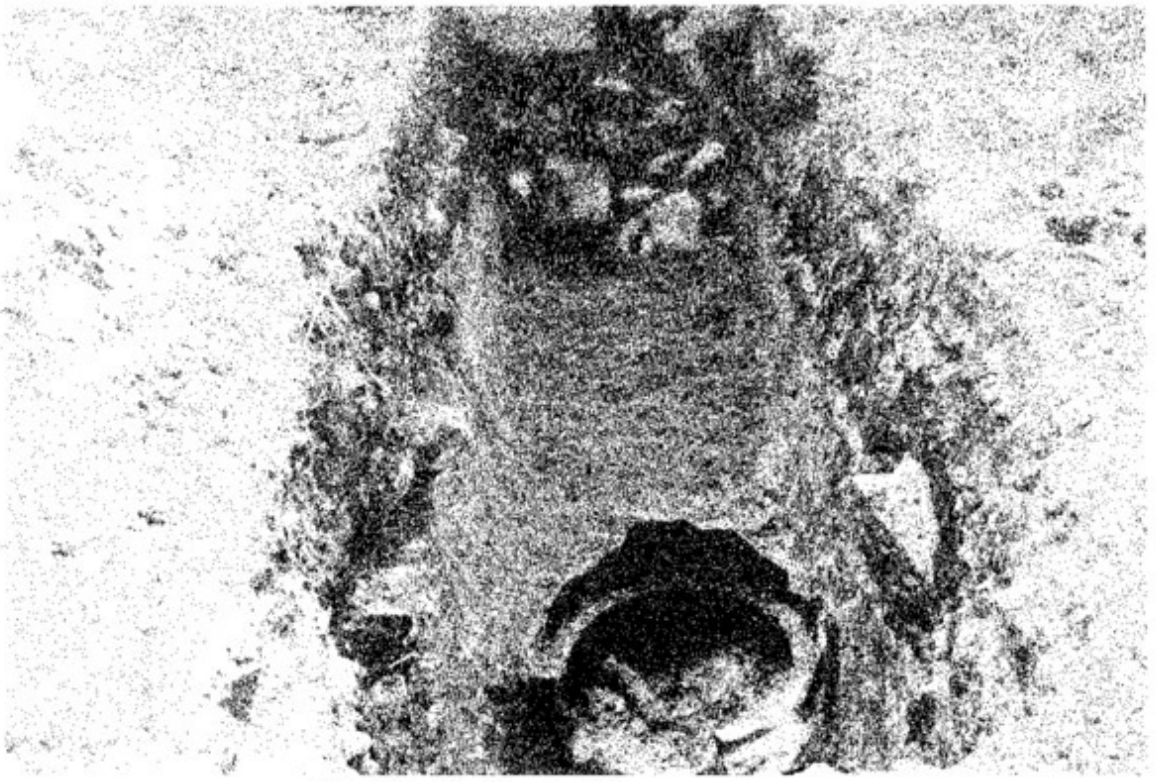
(2)　Ⅱ区　水手御門前階段南側



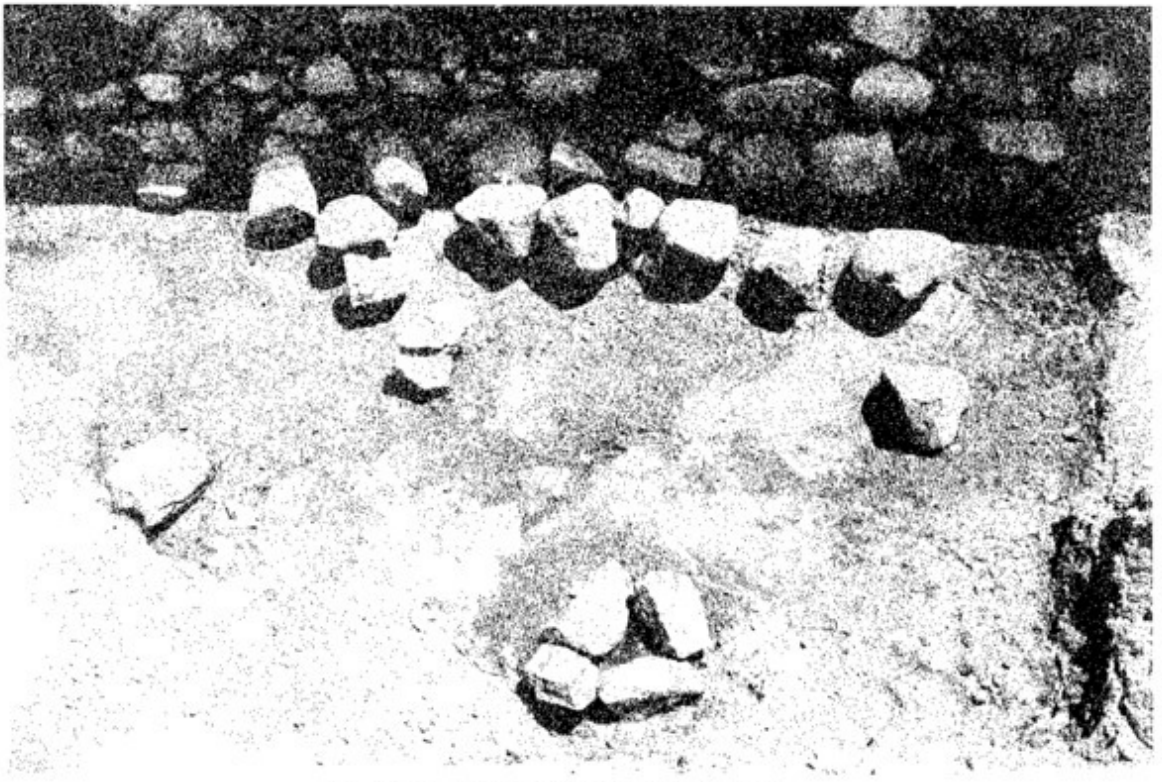
(1)　Ⅱ区　水手御門前階段排水路下（北から）



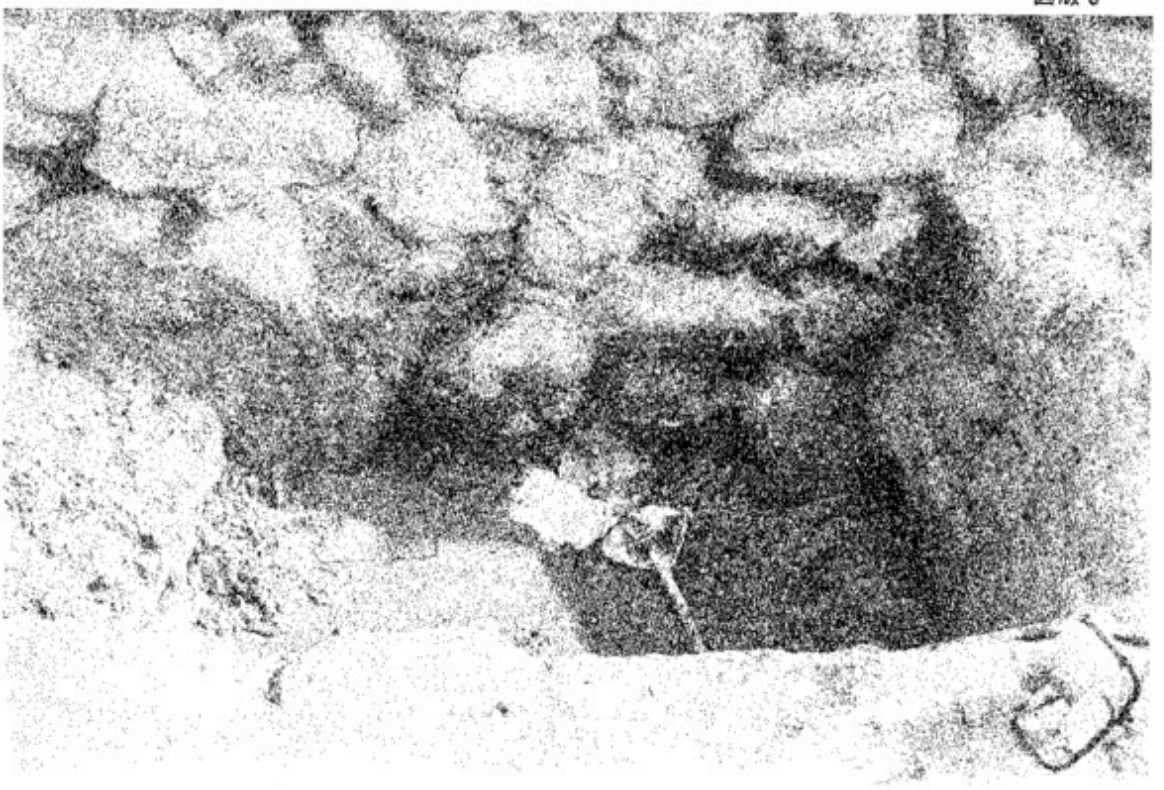
(2)　Ⅱ区　水手御門前階段排水路下（南から）



(1) Ⅰ区 完 掘 状 況

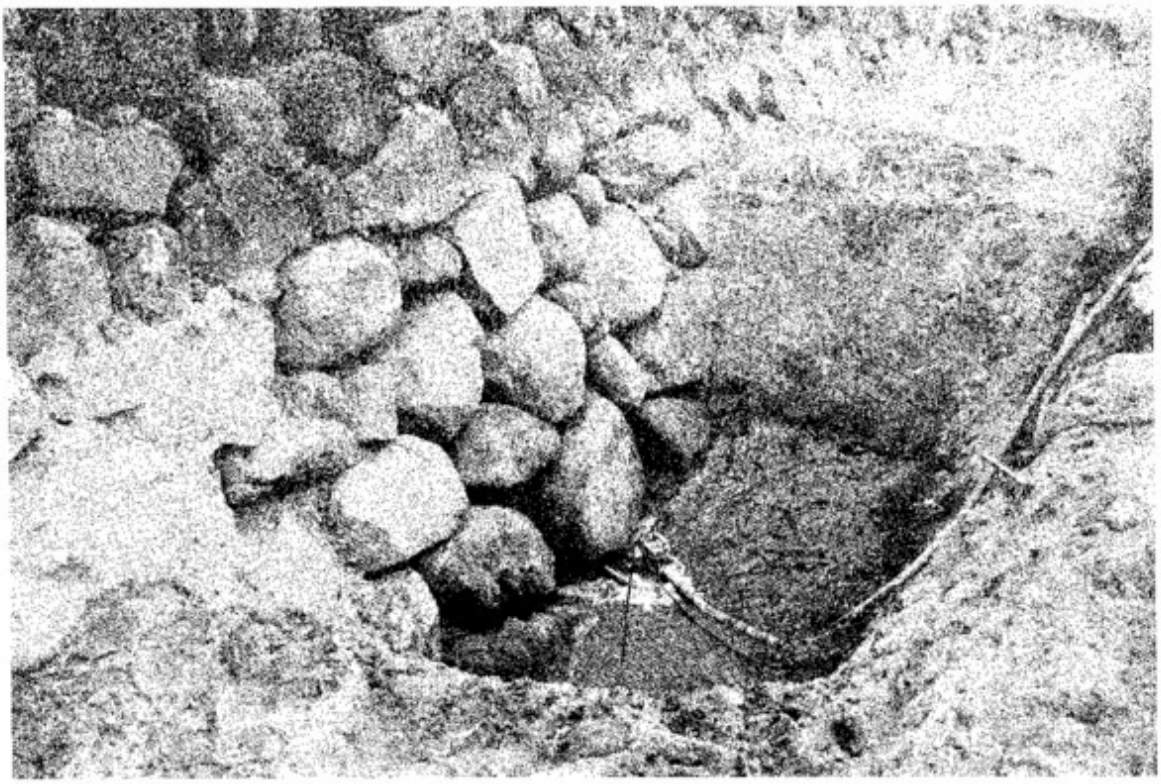


(2) Ⅱ区 試掘調査時検出石群（北から）

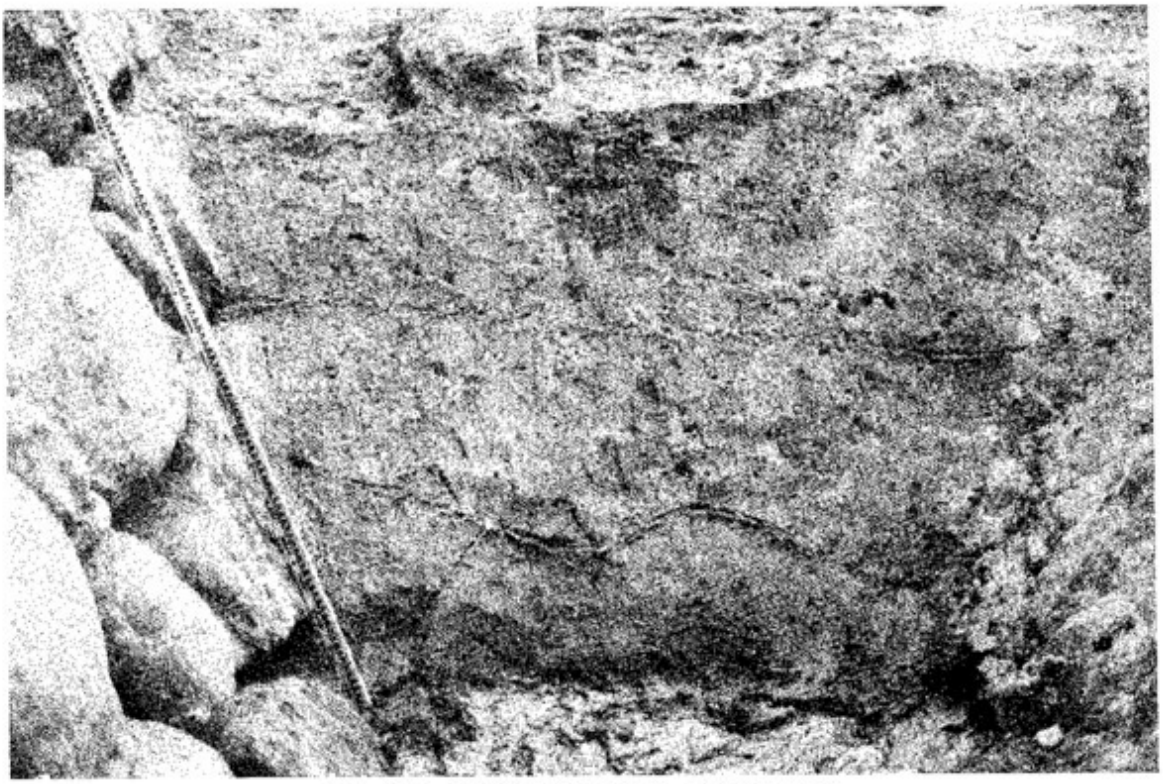


(1)　Ⅲ区　深掘り第１トレンチ完掘状況（北から）

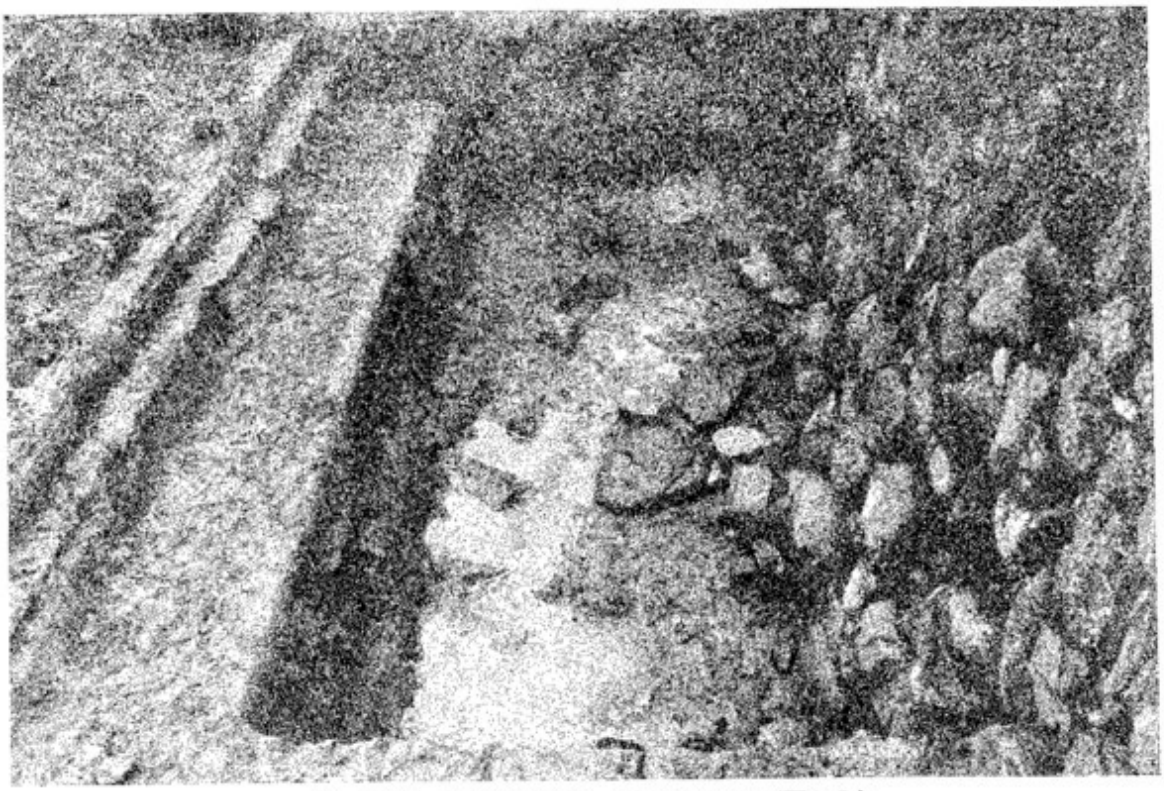
(2)　Ⅲ区　深掘り第１トレンチ土層（東から）



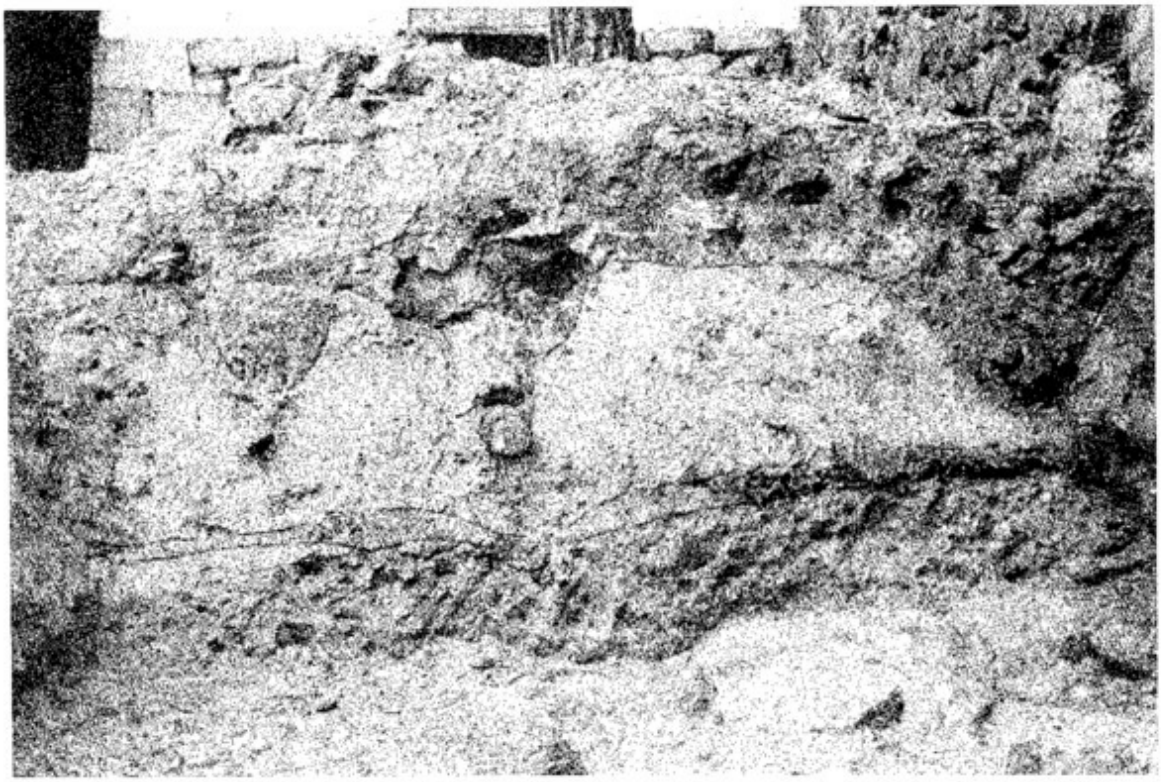
(1)　Ⅱ区　深掘り第2トレンチ完掘状況（東から）



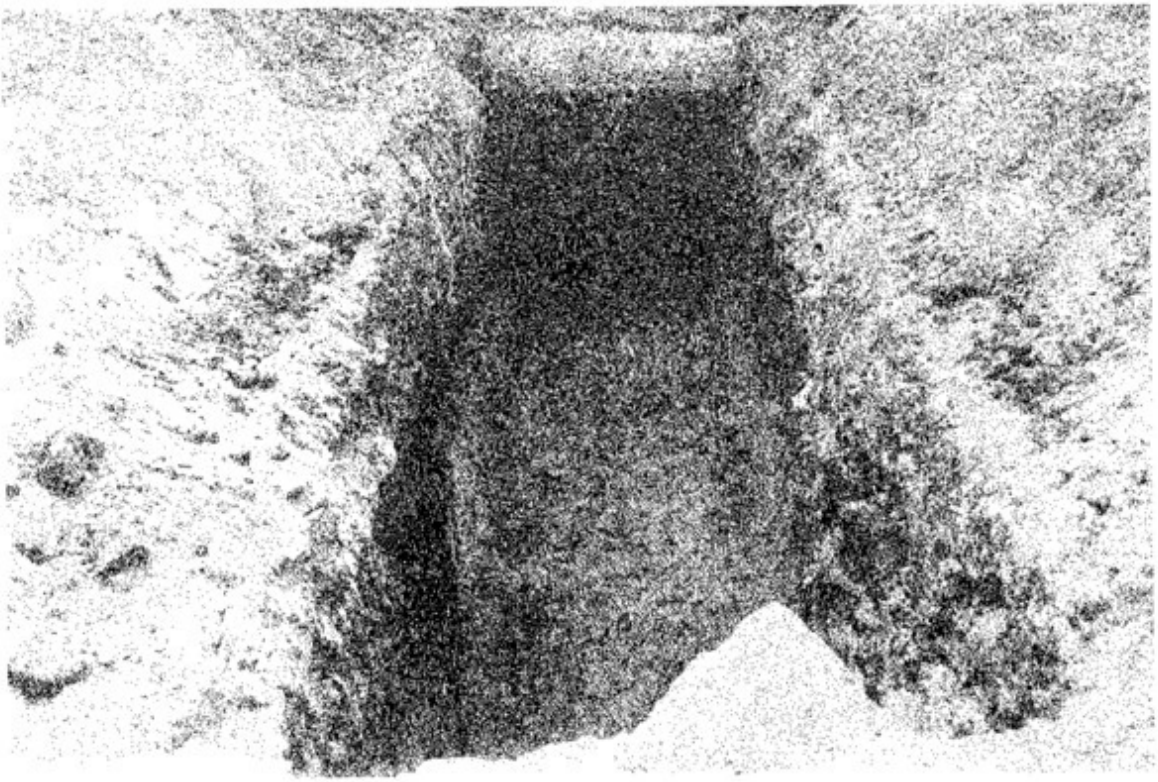
(2)　Ⅱ区　深掘り第2トレンチ土層（東から）



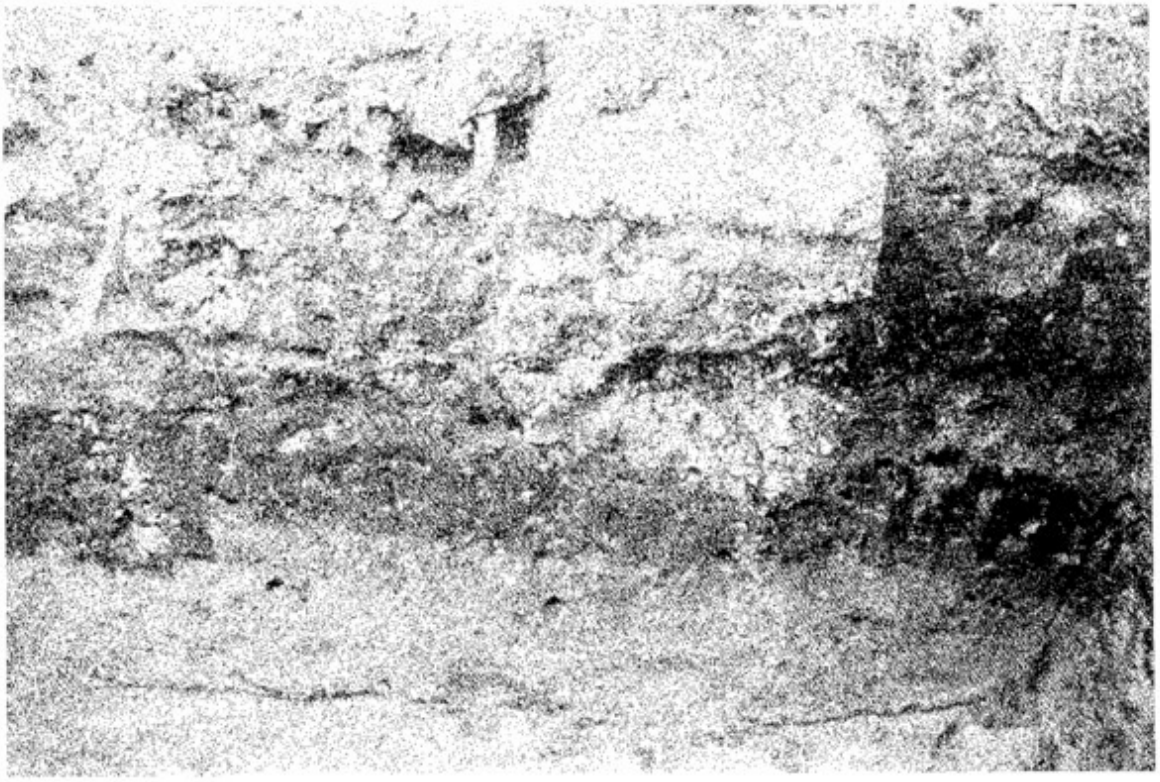
(1) Ⅱ区　深掘り第３トレンチ完掘状況（西から）



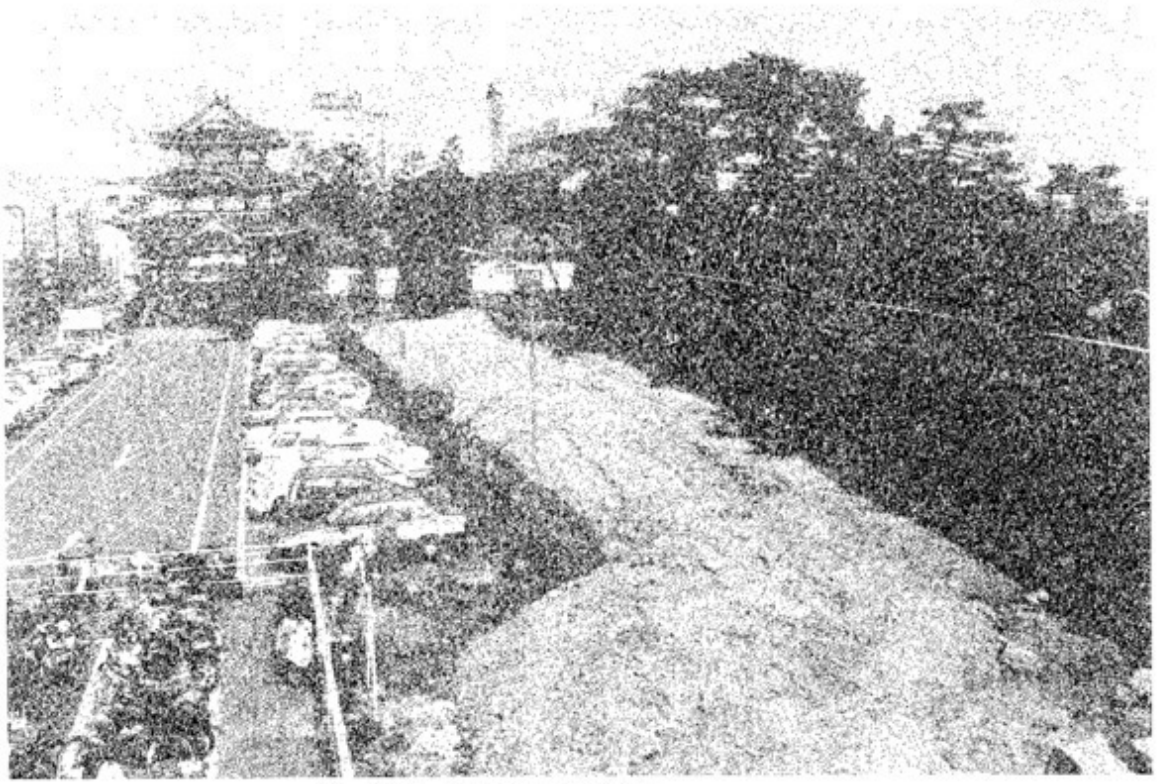
(2) Ⅱ区　深掘り第３トレンチ土層（東から）



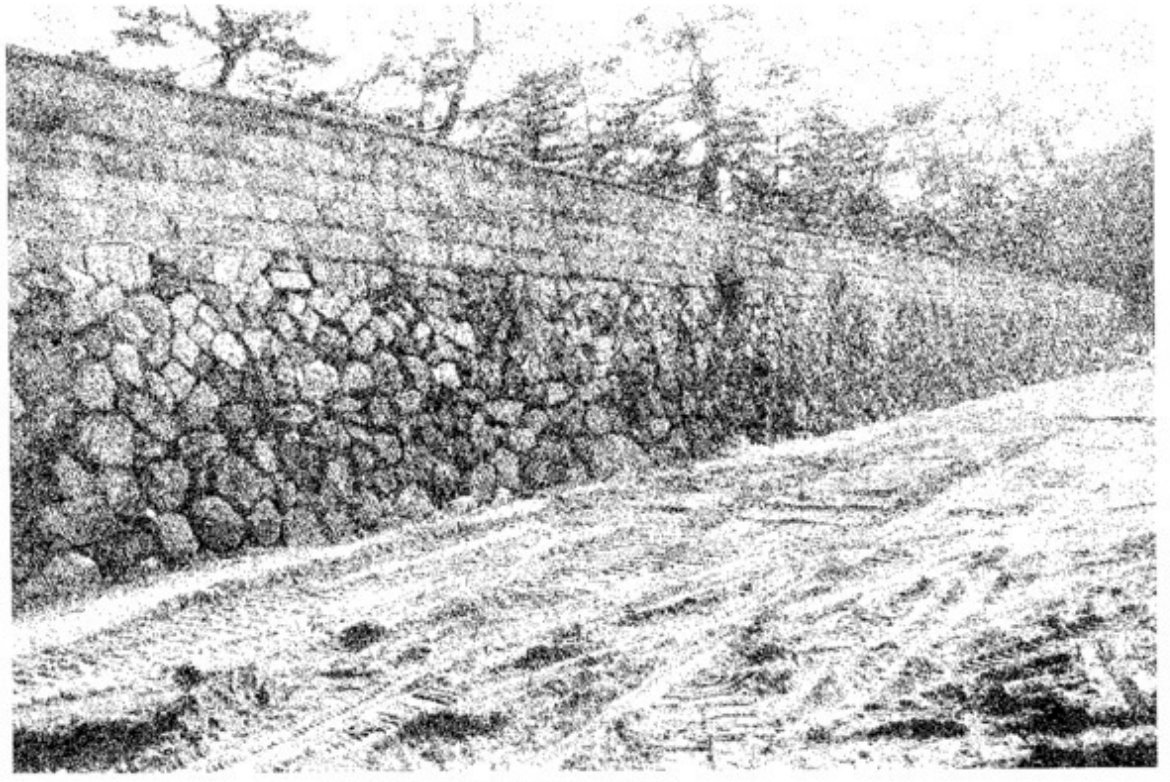
(1) Ⅴ区　完掘状況（北から）



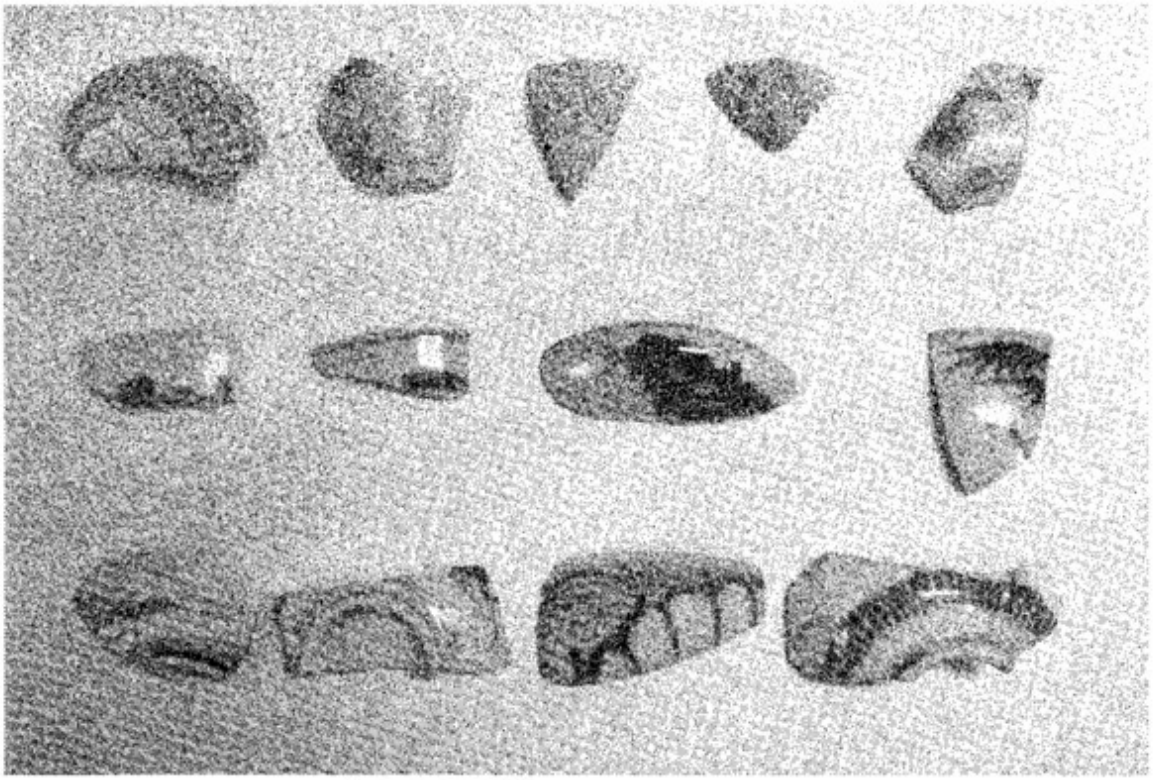
(2) Ⅴ区　土　層（西から）



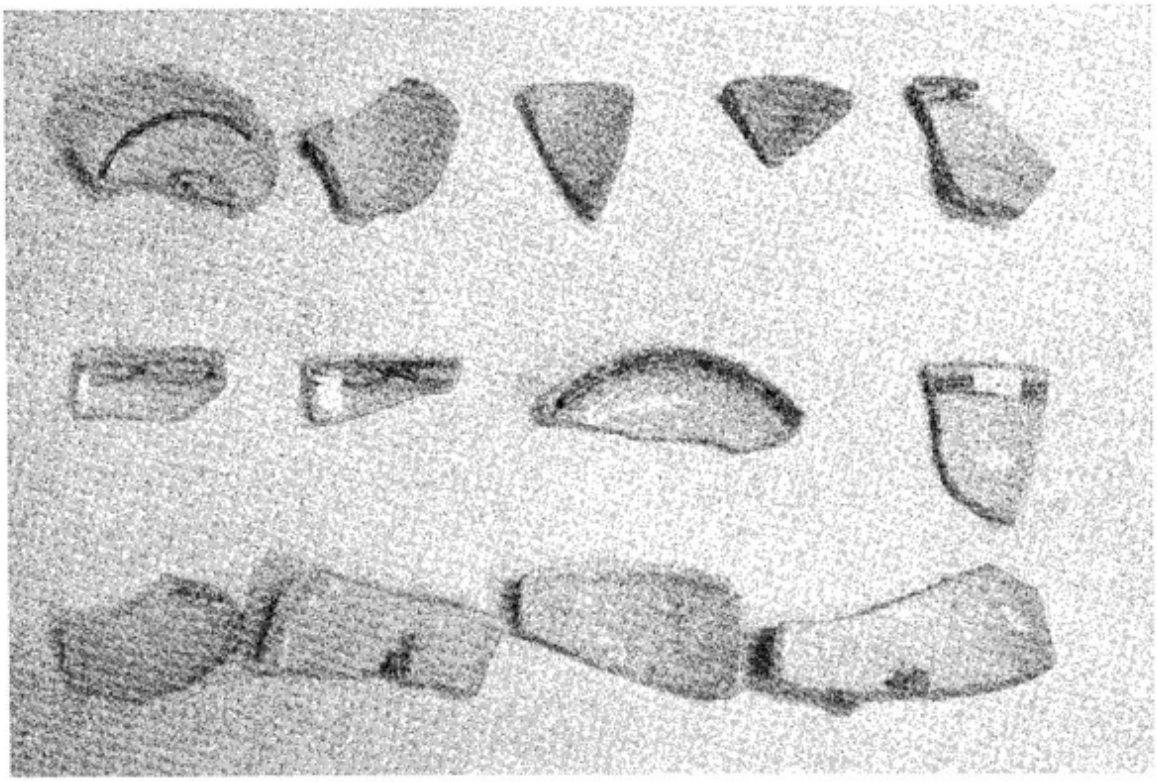
(1) Ⅱ区　完掘状況（西から）



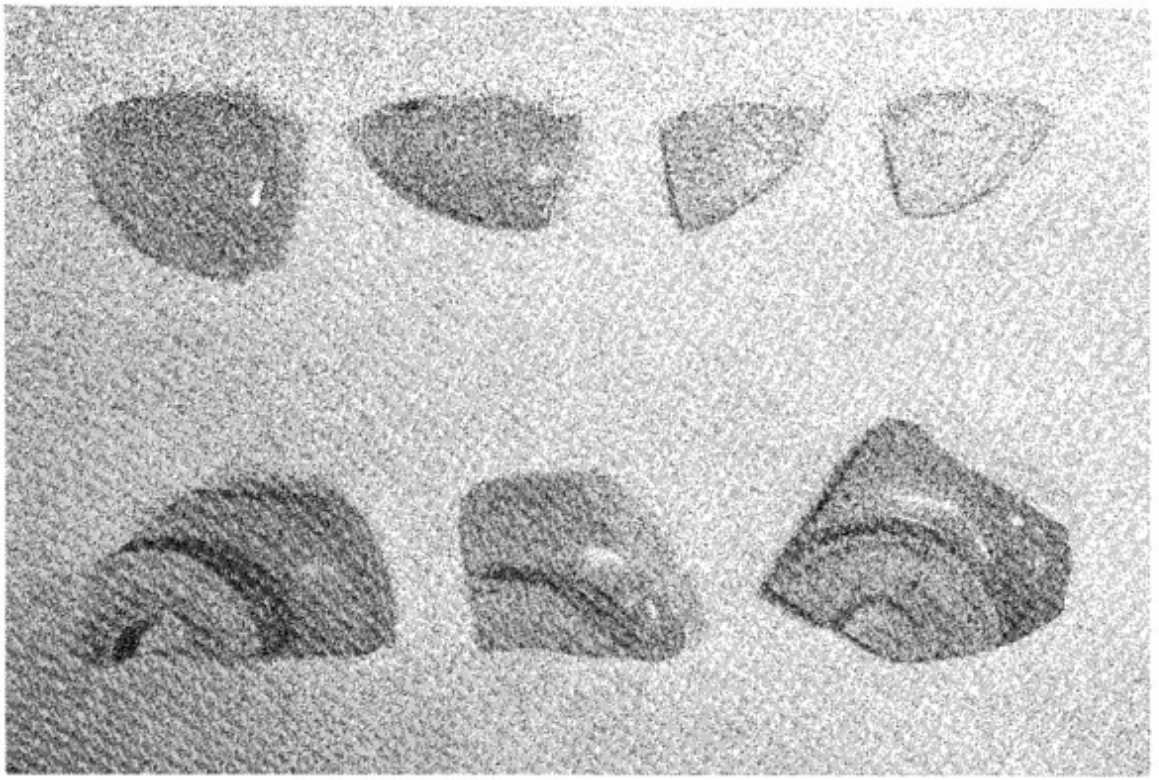
(2) Ⅱ区　埋戻し状況（東から）



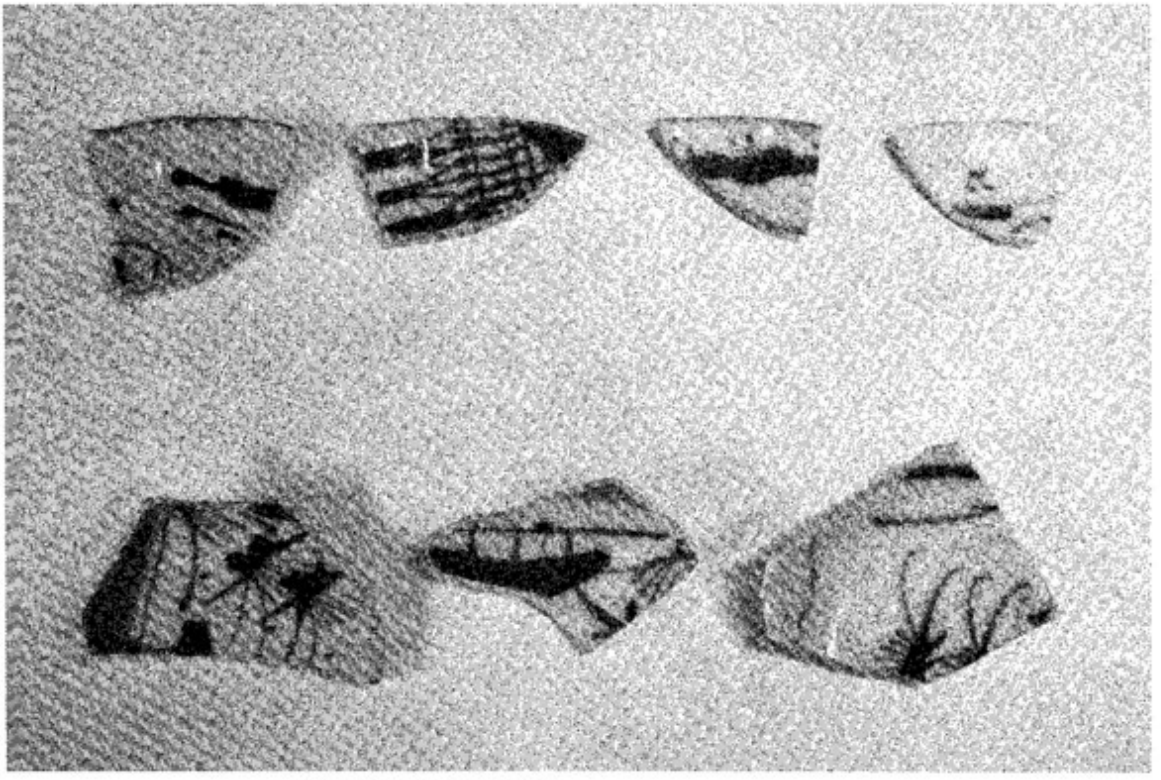
(1) 肥前系磁器(1) 表



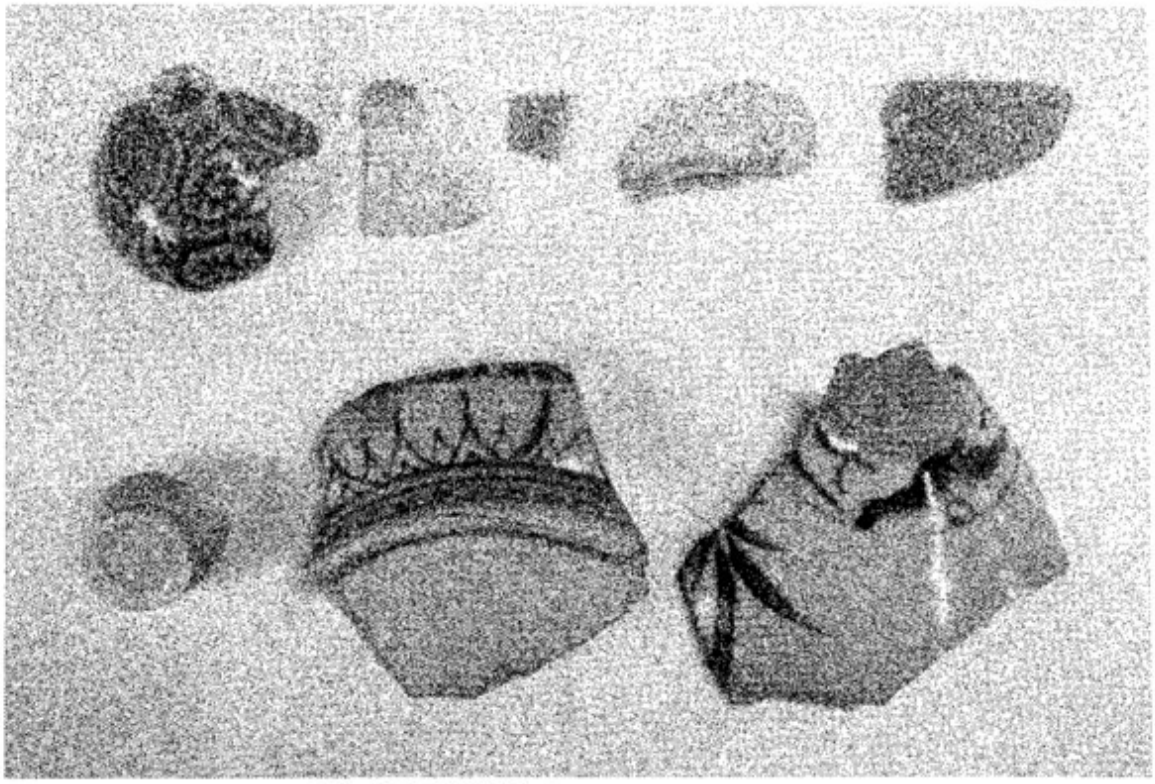
(2) 肥前系磁器(1) 裏



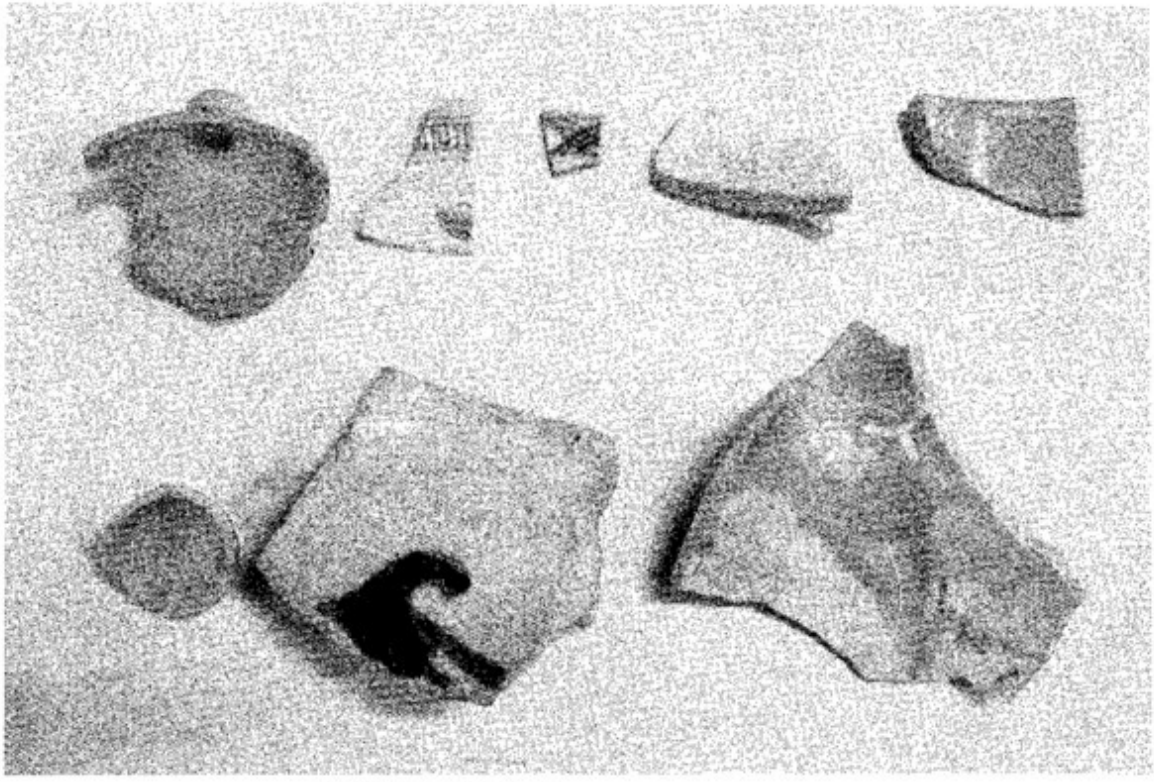
(1) 肥前系磁器(2) 表



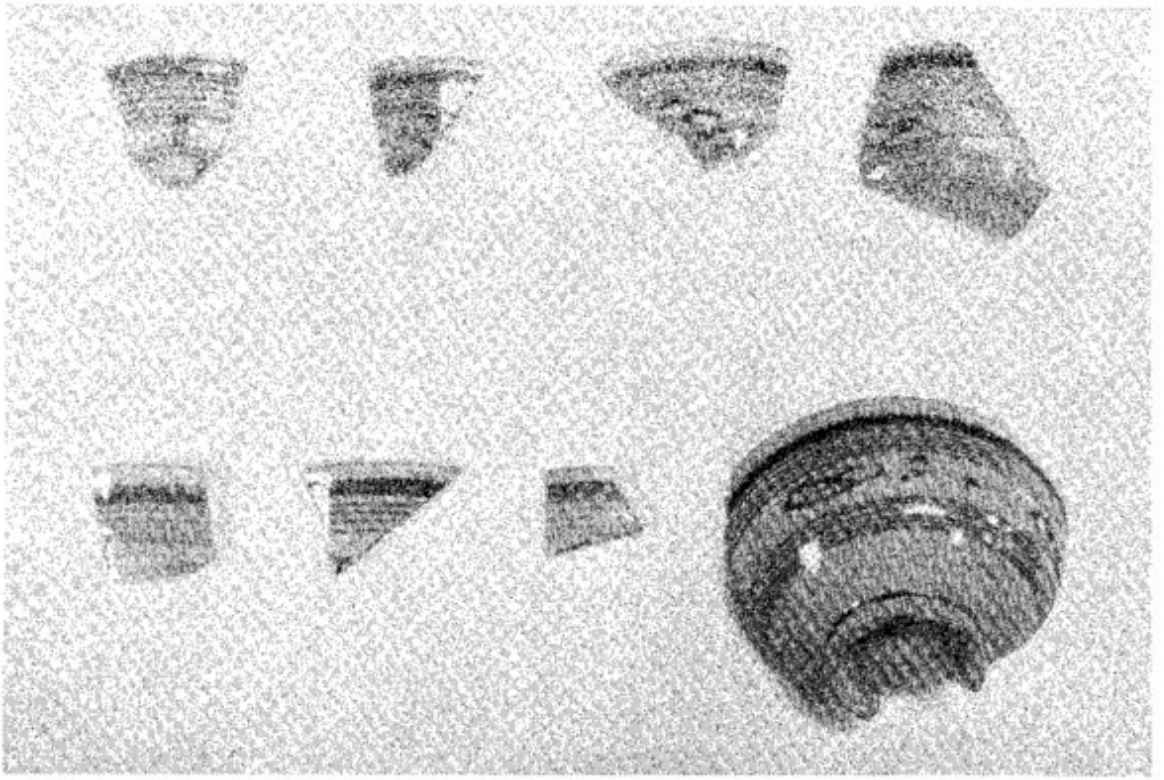
(2) 肥前系磁器(2) 裏



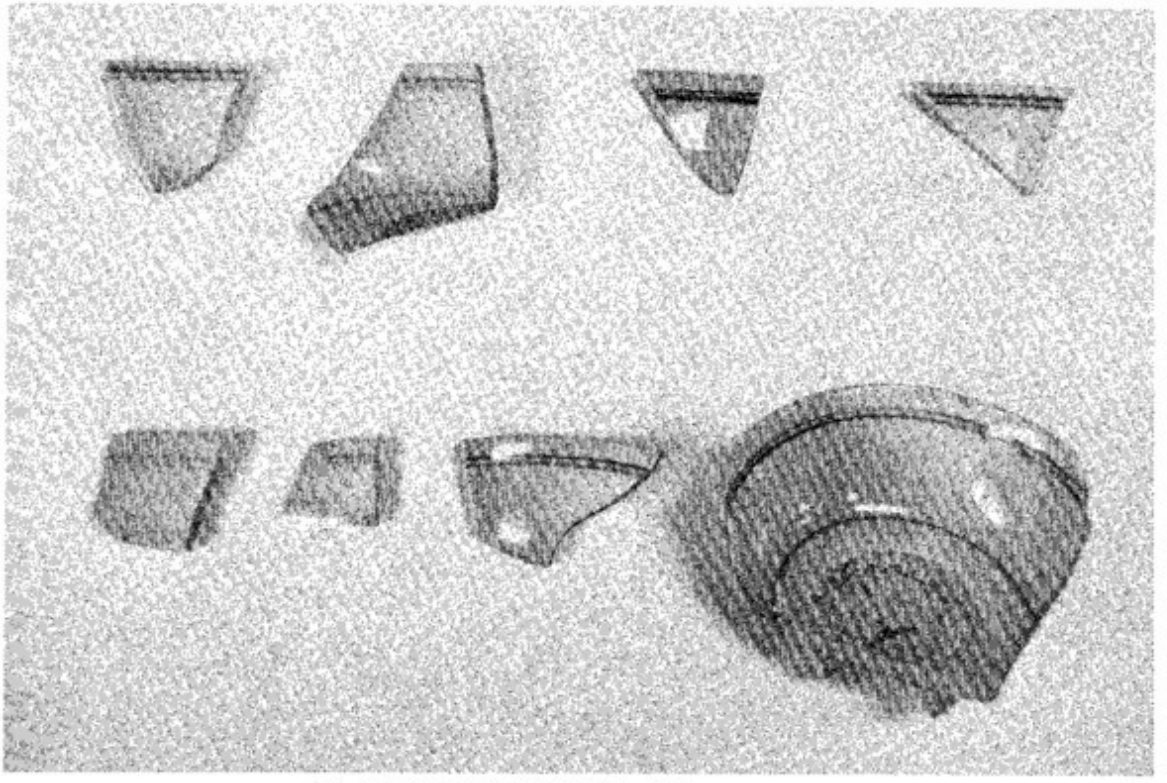
(1) 肥前系磁器(3) 表



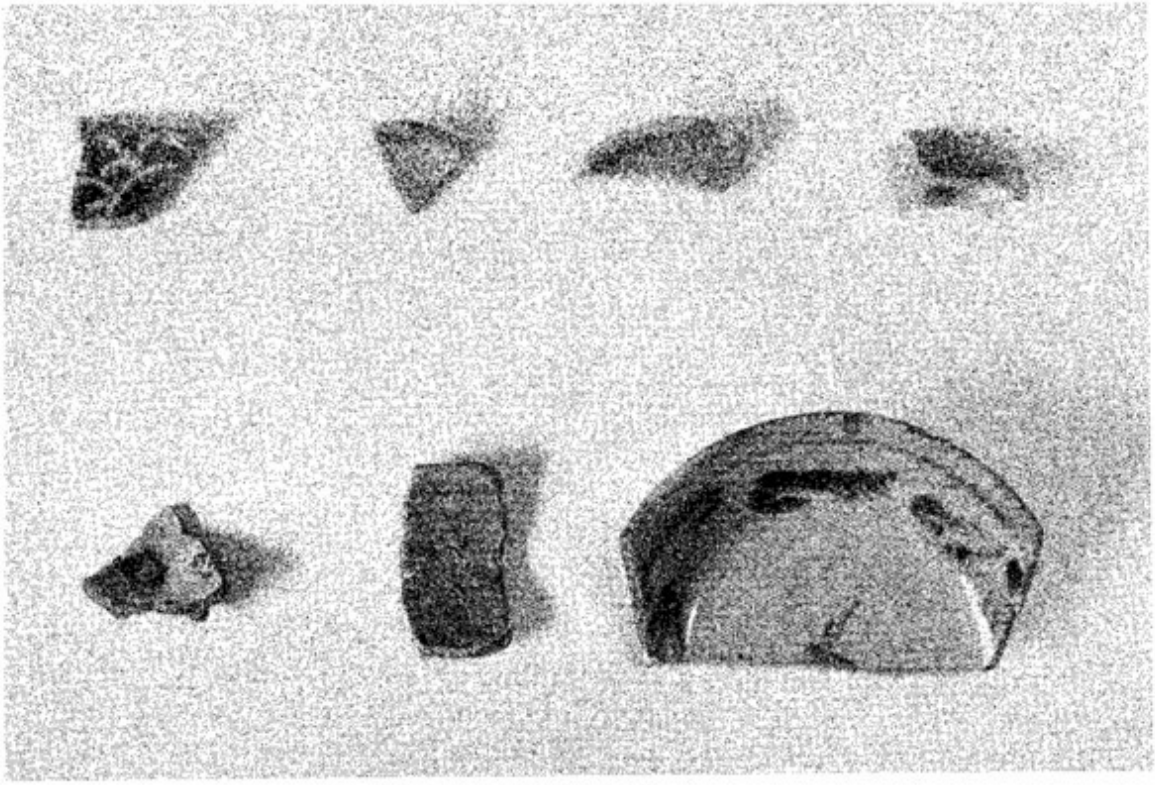
(2) 肥前系磁器(3) 裏



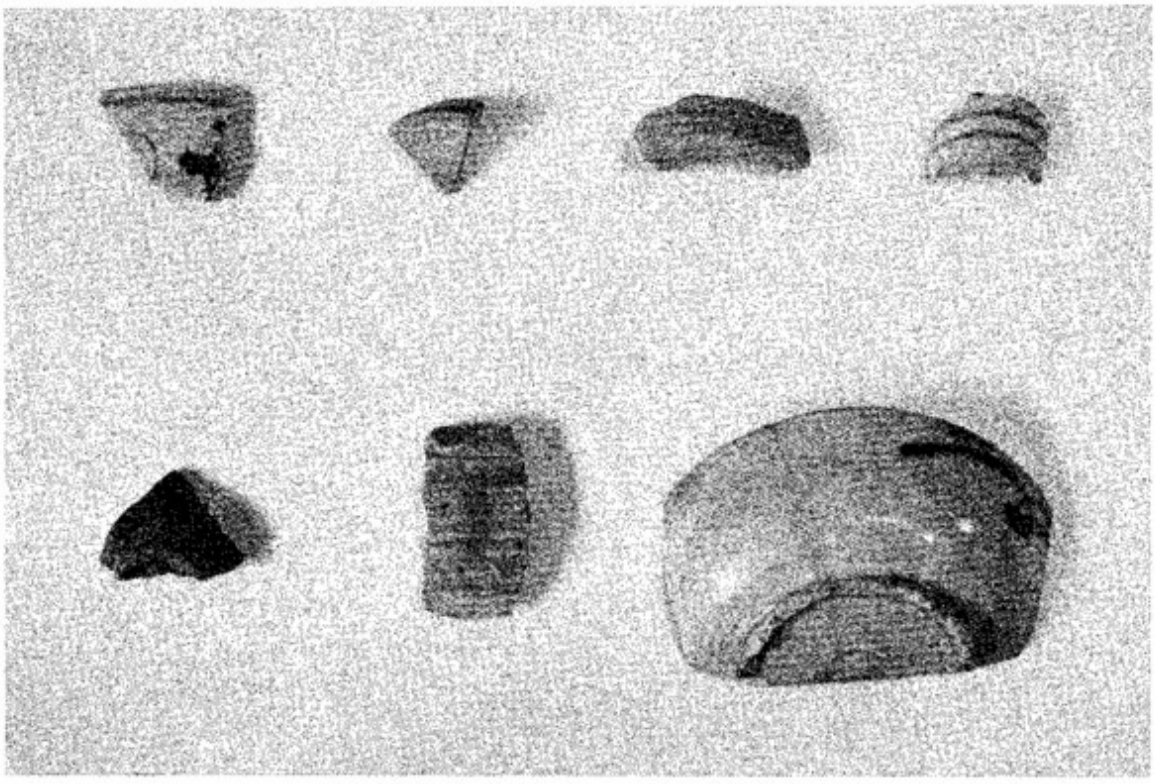
(1) 肥前系磁器(4)（砥部焼） 表



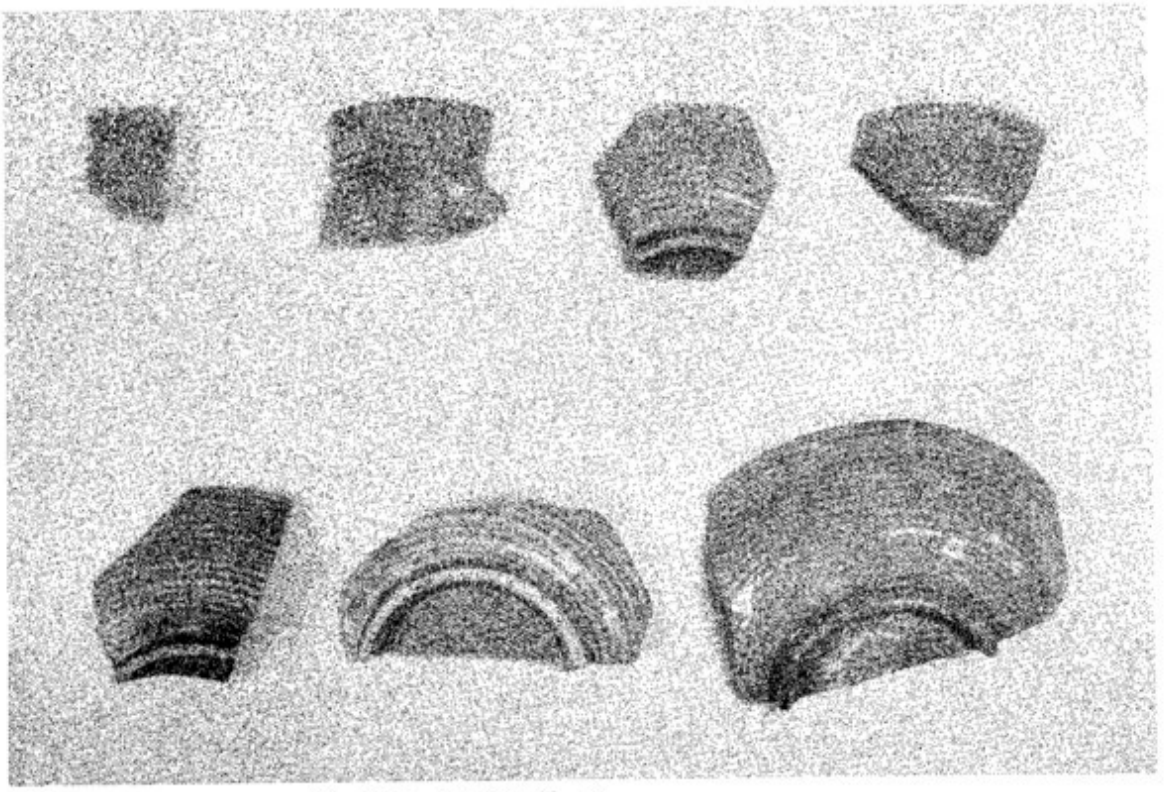
(2) 肥前系磁器(4)（砥部焼） 裏



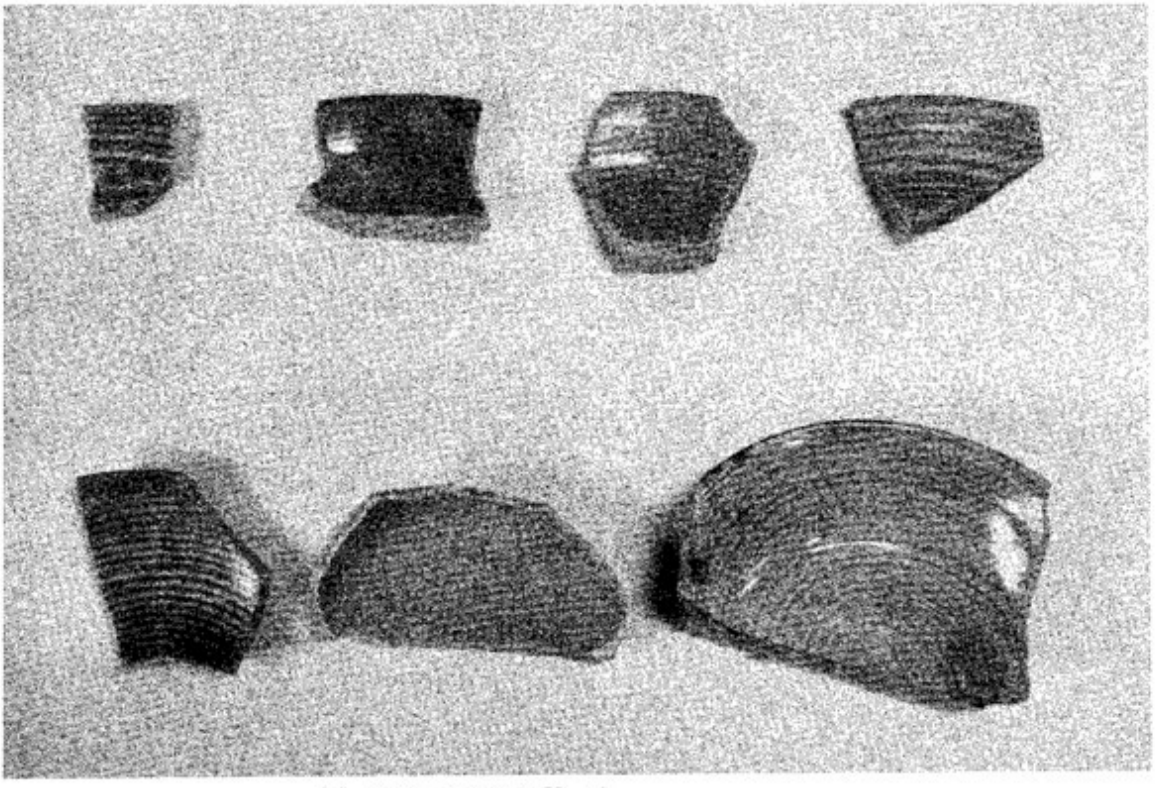
(1) 瀬戸・美濃系陶磁器　表



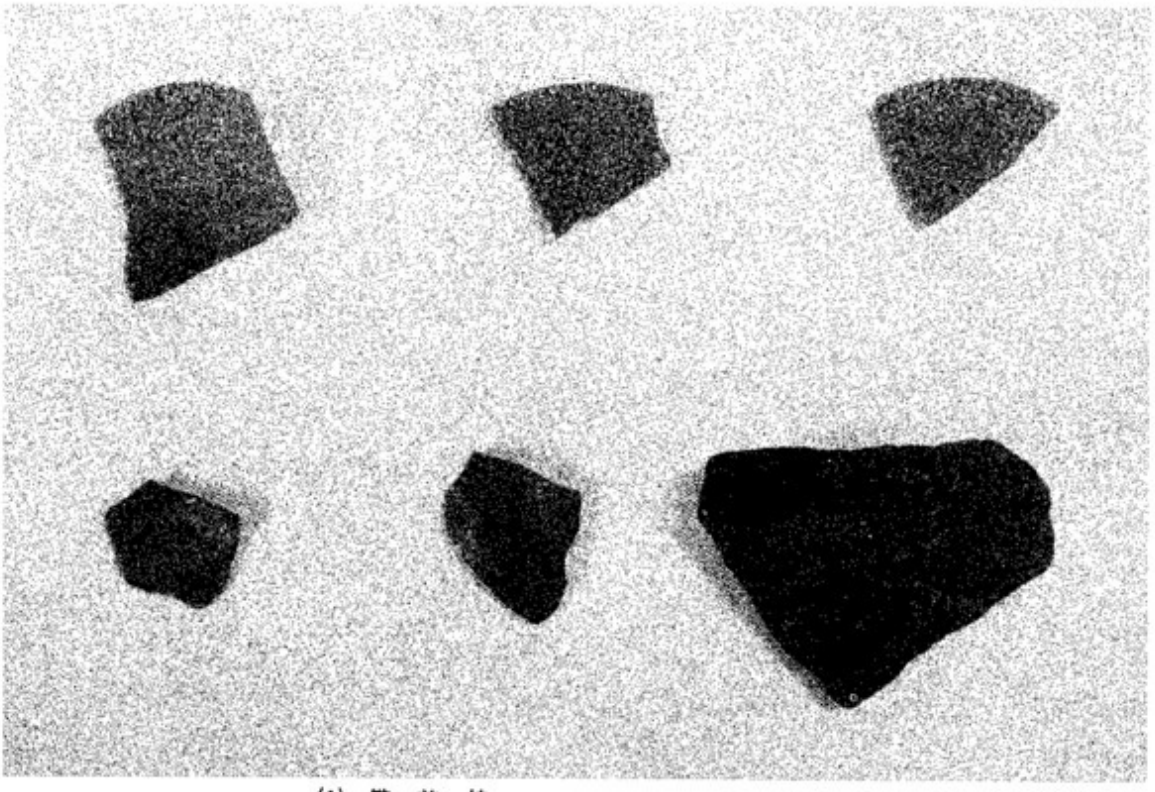
(2) 瀬戸・美濃系陶磁器　裏



(1)　瀬戸・美濃系陶器　表



(2)　瀬戸・美濃系陶器　裏



(1) 備 前 焼

高松市文化財調査報告書
1991年3月31日 発行
編集・発行 高松市教育委員会
高松市番町1丁目8番15号
印刷 ㈱若葉プリント